

富山大学におけるFD活動報告書

2019

富 山 大 学

教育・学生支援機構教育推進センター

目次

はじめに

1. 全学FD2019実施報告

当日プログラム	5
参加人数	6
基調講演スライド	7
グループ分け一覧	24
グループ討議内容	25
全体討議の司会を担当して	26
参加者感想	27
参加者アンケート用紙	30
参加者アンケート集計、記述回答	31

2. 各部局におけるFD活動報告

経済学部	35
医学部医学科	39
医学部看護学科	41
工学部	43
芸術文化学部	44
教養教育院	45

3. U D T a l kについて

4. 成績評価適正化検討WG 答申

5. 全学におけるアンケート結果

D P 達成度調査結果	74
卒業時調査結果	101

6. 全部局FD活動一覧及び参加状況

7. 各種資料

結びに代えて

はじめに

昨年度までは、毎秋に実施する全学FDの報告書を年度末に簡単な冊子で刊行する形をとっていましたが、今年度からWeb情報に切り替えるとともに、対応可能な各部局のFD報告も併せて概括する形に切り替えました。また、この機会に、従来は特に概要紹介をしてこなかったUD Talkの情報についても採録することとしました。御協力頂いた部局の関係者にまず御礼申し上げます。

まず、全学FDに関しては、2016年度から3年間継続した「富山大学モデル」(＝実際に開講中の授業の圧縮版を公開し、その後、受講した学生を交えてグループ討議、全体討議へと進む形式)ではなく、今年度は昨年度に引き続き、短めの基調講演と組み合わせる形式としました。「富山大学モデル」は、本学の全学FDが追究している3つの特徴、すなわち、討議型FD・全構成員型FD・楽しむFDを具現化する形の一つとして、参加者から概ね好評だったのですが、多くのメリットがある半面、いくつかの難点があったため、昨年度から従来型に近い形に戻したわけですが、基調講演を敢えて短めに設定したことで、「物足りなさ」を感じた参加者がグループ討議・全体討議に残るという企画者の意図が的中し、昨年度より、多くの方が討議に加わって頂いたようです。

今年度のテーマは「学部を越えた連携教育の発展・拡大に向けて」とし、基調講演には、金沢医科大学でご自分の経歴も生かしながら、文理融合教育を実践されている、まだ「若手」といってもよい本田 康二郎先生をお招きしました。哲学をベースにしながら、ロボットやAIと倫理との関係や福島原発事故も視野に入れた科学技術と社会の在り方等を幅広く探求され、しかもそれを医療系の学生を相手に授業として展開されている同氏は、9つの学部生が学ぶ本学の教育のありようを考える上で適任の一人だったといえます。同氏は基調講演だけではなく、グループ討議・全体討議にも加わって頂きましたので、言葉の端々に文理融合教育の重要性を感じさせてくれたように思います。こうした基調講演には高名な教育学者等を招くことが多いですが、本学のように討議に力点を置くFDの場合、(学生を含めた)参加者が基調講演者ともフランクに話せるかどうか重要であり、その点で、本年度、本田先生をお招きしたことは正解だったと言えるのではないのでしょうか。

一方、本学においては、全学FDに先行する形で、各部局のFDが従来から活発に展開されています。それを言わば「共有財産」として活用しようと、今回、このような形を試行してみました。無論、各部局においては、内容的に他部局に公開しにくいものもありましょうから、すべてというわけにはいきませんが、可能なところから共有しようという考えです。今後、これが発展することを願っています。

教育推進センター 副センター長

全学FD・教育評価専門会議議長

橋 本 勝

1. 全学FD2019実施報告

学部を越えた連携教育の発展・拡大に向けて

全学FD2019

プログラム

10月30日（水） 14:00～17:00

五福キャンパス共通教育棟D21教室ほか

全体のコーディネーター 橋本教育推進センター副センター長

基調講演 本田 康二郎 氏

金沢医科大学 一般教育機構 准教授

14:00～14:05 開会挨拶 磯部教育推進センター長
(共通教育棟D21)

14:05～14:15 趣旨説明 橋本教育推進センター副センター長

14:15～14:45 基調講演 本田先生

14:45～14:55 小休憩及びグループ討議会場へ移動

14:55～15:45 グループ討議
(共通教育棟A21, A23)

15:45～16:00 小休憩及び全体討議会場へ移動
(共通教育棟D21)

16:00～16:45 全体討議

16:45～16:50 本田先生による総括コメント

16:50～16:55 閉会挨拶 橋本教育推進センター副センター長

16:55～17:00 アンケート記入後、解散

参加人数

		異なり数 (非延べ)	右記 延べ数	基調講演	グループ 討議	全体討議
教員						
役員		1	3	1	1	1
人文科学系		4	6	4	1	1
教育学系		2	2	2	0	0
社会科学系		1	3	1	1	1
芸術文化学系		1	3	1	1	1
教養教育学系		9	20	9	5	6
医学系		1	3	1	1	1
薬学・和漢系		2	4	2	1	1
理学系		1	1	1	0	0
工学系		6	8	6	1	1
都市デザイン学系		1	1	1	0	0
教育研究推進系		5	9	5	2	2
他大学等教員		0	0	0	0	0
小計		34	63	34	14	15
職員						
人社系事務部 人社系学務課	人文学部	0	0	0	0	0
	人間発達科学部	1	1	1	0	0
	経済学部	1	1	1	0	0
理工系事務部 理工系学務課	理学部	0	0	0	0	0
	工学部	0	0	0	0	0
	都市デザイン学部	1	1	1	0	0
医薬系事務部医薬系学務課		0	0	0	0	0
芸術文化学部総務課		2	2	2	0	0
学務部		14	23	13	4	6
学内その他		0	0	0	0	0
他大学等職員		0	0	0	0	0
小計		19	28	18	4	6
学生						
人文学部		3	7	3	2	2
人間発達科学部		0	0	0	0	0
経済学部		3	9	3	3	3
理学部		0	0	0	0	0
工学部		2	6	2	2	2
都市デザイン学部		0	0	0	0	0
医学部		1	3	1	1	1
薬学部		0	0	0	0	0
芸術文化学部		0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0
小計		9	25	9	8	8
合計		62	116	61	26	29



金沢医科大学
Kanazawa Medical University

理系教員と文系教員の コラボレーション

金沢医科大学「大学基礎セミナー」と
三位一体の初年次教育システム

本田 康二郎 (金沢医科大学 一般教育機構)

2019.10.30 (Wed.)

富山大学・全学FD

「学部を越えた連携教育の発展・拡大に向けて」

1

理系教員と文系教員のコラボレーション

はじめに

1. 文理融合の必要性
2. 教育方法論: どうやって教えるのか?
3. 教育実践例: 金沢医科大学の初年次教育
4. PBLを他科目につなぐ

まとめ

2

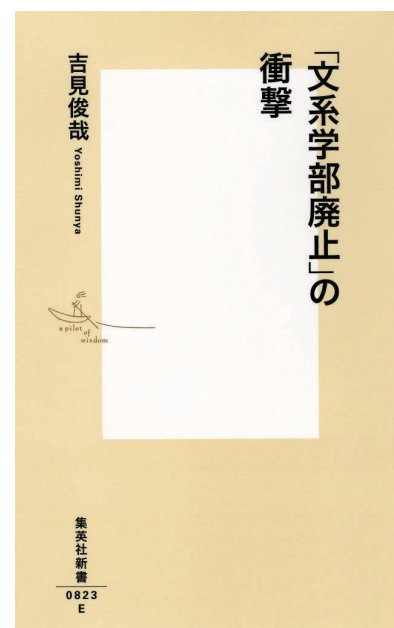
はじめに

Introduction

3

『「文系学部廃止」の衝撃』 2016

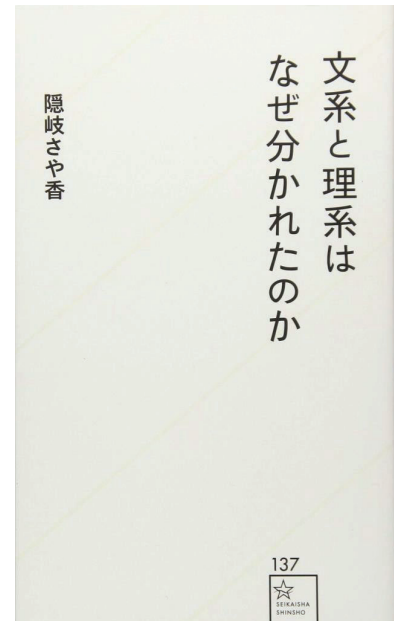
- ▶ 人文科学は不必要？ → No.
- ▶ 教養＝国民国家的概念(ドイツ)
- ▶ 一般教育＝一般大衆に向けて機能する基礎教育(アメリカ)
- ▶ 「文系」の知は、価値の軸の変化を予見したり、先導したりする価値創造的な次元を含む「長く役立つ」知である



▶ 4

『文系と理系はなぜ分かれたのか』 2018

- ▶ イノベーション政策3.0の時代
- ▶ 自然科学・技術は社会的な課題に取り組まねばならない
(経済成長だけでなく)
 - ✓ 自然環境への配慮
 - ✓ 社会的公正さへの取り組み
 - ✓ 社会福祉の普及
 - ✓ 持続可能な消費パターン
 - ✓ 新しい経済成長の形
- ▶ 領域横断的研究が必要
STEM → STEAM



▶ 5

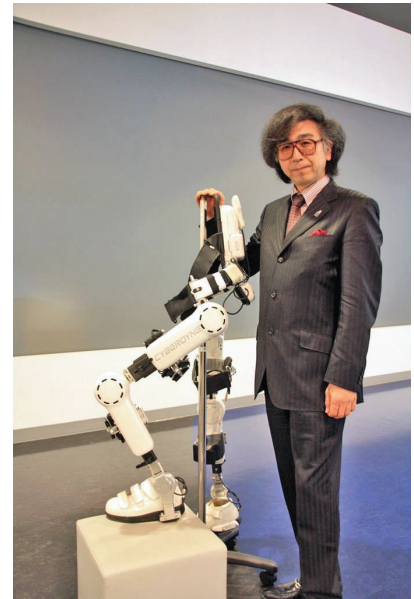
1. 文理融合の必要性

Necessity of Integrating
Humanities and Science

理系にとっての文系 HAL普及 に苦勞した 山海教授

- ▶ 日本国内で普及させる際の壁（法的・社会的）
 - ◆ 「前例がない」 技術ゆえ、安全性を確認できない。（→イノベーションとはそういうもの！）
- ▶ ISO委員会に入り、「ISO13485」の規格そのものの策定に加わる。
- ▶ ドイツにて認可。のち欧州各国へ...
- ▶ 日本の治験が動き出す。

日本はルール作りが苦手



▶ 9 図表 <https://www.sankei.com/economy/news/190520/ecn1905200028-n1.html>

文系にとっての理系 技術製品市場のリスク

- ▶ 市場経済システムの「監視機能」と、その機能不全。
- ▶ 健全に機能する市場には自己浄化作用が備わっていると言える。例えば野菜市場において、傷物商品は消費者から支持されず、結果としてそれらは市場から追い出されることになる。



文系にとっての理系 技術製品市場のリスク

- ▶ 技術製品市場では、この自己浄化作用がよく機能しない。
- ▶ ブラックボックス化のおかげで、商品の質や安全性について正確な判断を下すことが難しいから。



11

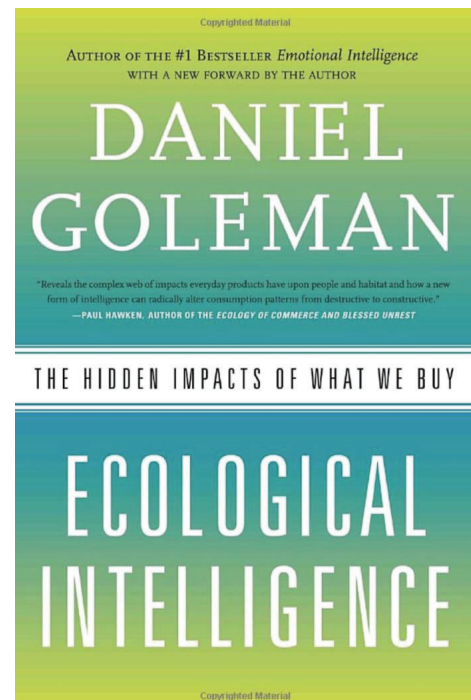
文系にとっての理系 「消費者倫理」のために

- ▶ **グレイト・ソサイエティ**から
グレイト・コミュニティへ（デューイ）
- ▶ 技術製品の選択（購入）が「**個人的かつ、公的な行為**」であることの自覚。
 - ・ 私的 — 公的
 - ・ 個人的 — 社会的 の区別
- ▶ 技術製品選択は次世代の「社会環境」の選択に繋がっていることの自覚。（倫理的責任の自覚）

12

文系にとっての理系 「消費者倫理」のために

- ▶ 市場経済システムの全面的展開
(グローバル化)
- ▶ 求められる消費者倫理
購買活動は一種の投票行為であるともいえる！
- ▶ 「エコロジカルな知性」(ゴールマン)
 1. 自分自身の影響力を知れ
 2. 事態を改善することに関心を持て
 3. 自分の学んだことを、他者と共有せよ



13

文理融合教育の必要性

理系からみて

- ▶ 安心・安全な科学技術について、社会が何を期待しているのかを学ぶ
- ▶ 研究目的の価値を社会的文脈の中で考える
- ▶ 技術の社会実装に必要な多職種との討議
- ▶ 技術の社会実装に必要なルール作りの練習

文系からみて

- ▶ 安心・安全な社会を守るために、新しいテクノロジーの動向を学ぶ
- ▶ 科学技術を、社会的に論じたり、政治学的に論じたりする練習
- ▶ 理工系学生との交流スキルを高めて、将来の「消費者倫理」の実践にそなえる

▶ 14

2. 教育方法論: どうやって教えるのか?

Educational Method

15

文理融合型の講義

- ▶ 座学のみではもったいない
- ▶ 「学内異文化体験」を意図的に作り出す
- ▶ 座学(講義型授業)と実習(PBL型グループ討議)の混合
- ▶ 開放型の討議ではなく、収斂型の討議(＝結論を出す)
- ▶ 討議結果の発表をする

▶ 16

PBL (problem-based learning) の活用

- ▶ Harvardビジネススクール → McMaster大学医学部(カナダ)で発展
- ▶ 専門職大学で発展してきたことがポイント
- ▶ 本来は各学生にそれぞれの「専門性」が備わっていて、はじめてうまく機能する方法論
- ▶ 日本で活用するなら、ある程度高学年で使った方がよい
- ▶ 討議に慣れていない学生のためにガイドラインが必要



▶ 17

3. 教育実践例: 金沢医科大学の初年次教育

An Example

三位一体の初年次教育システム



General Education

UFS

ソフトウェア(教材)が
毎年更新される。

- リーダー教員 1名
- チューターは15名

コミュニケーション能力
情報収集能力
プレゼンテーション能力



読解力
ライティング技術
文書表現力

AS

- 専門教員1名

問題発見能力
能動的態度
論理的推論能力

CT

- 専門教員1名

UFS コミュニケーションシート

大学基礎セミナー グループ ☐

コミュニケーションシート _____月____日

学籍番号 _____ 氏名 _____

担当チューター _____

指導教員 _____

これは本学第一学年における生活習慣、学習習慣に対するアンケートです。
習慣の改善などが必要な場合は、指導教員を通じて助言ならびに指導のために活用します。
その他の用途に利用されることはありません。

先週の様子を教えてください (5段階のものは、3を「ふつう」として教えてください。)

1. 睡眠は十分とれましたか? とれた 5 4 3 2 1 とれなかった

2. 食欲はありましたか? あった 5 4 3 2 1 なかった

3. 学習時間を確保できましたか? できた 5 4 3 2 1 できなかった

また、集中して学習できましたか? できた 5 4 3 2 1 できなかった

4. 週2日、30分以上の運動(部活を含む)をしましたか? した ・ しなかった

5. ストレスを感じましたか?
以下の番号から選んでください。 () (複数回答可)
可能なら、具体的内容を「6. 一週間の様子」の欄に記載してください。

① 特になし ② 生活上の悩みから ③ 就学上の悩みから
④ 友人・人間関係 ⑤ その他

6. 一週間の様子(ふり返り、または反省など)を記載してください。

■ 大学基礎セミナー(UFS)

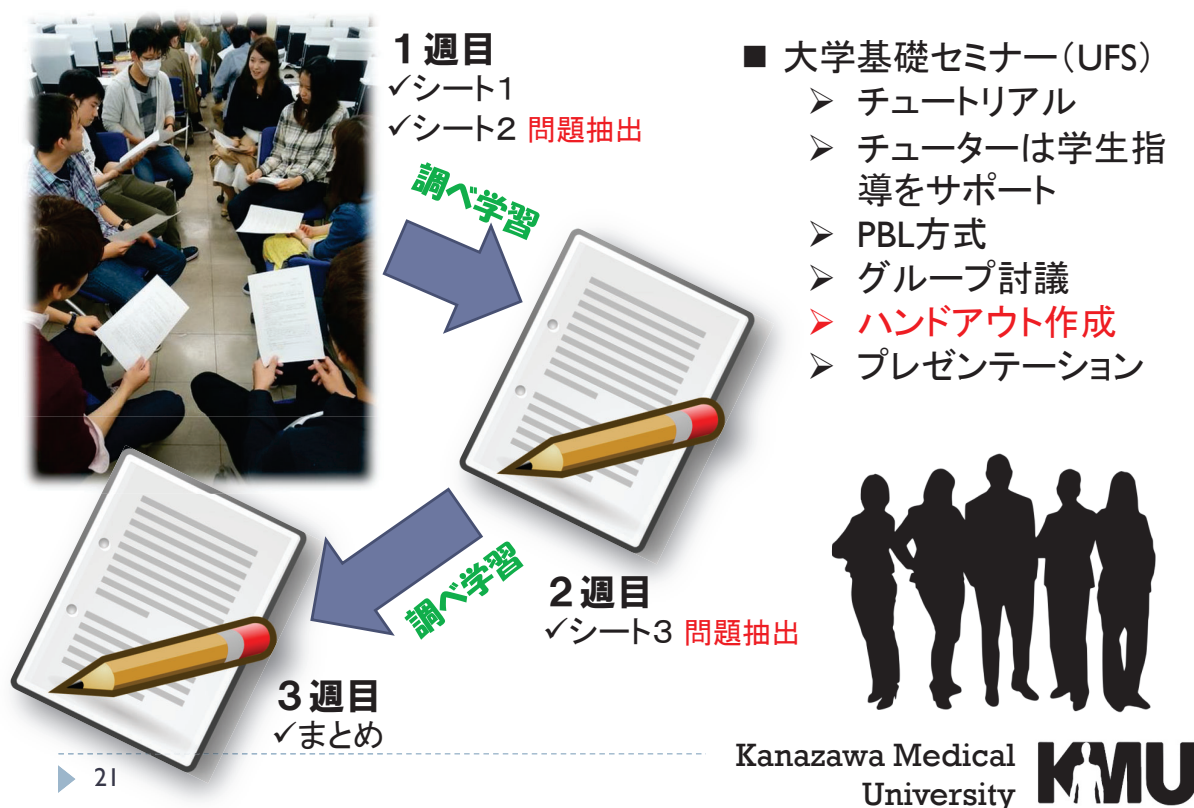
- チュートリアル
- チューターは学生指導をサポート
- PBL方式
- グループ討議
- ハンドアウト作成
- プレゼンテーション



Kanazawa Medical
University



UFS 課題学習 (1グループ: 8～9名)



UFSシナリオ例 「難病とロボット医療」

(シート1)

- ▶ Aくん: 「ねえ、難病って言葉が日本発の言葉だって知っていた？」
- ▶ Bさん: 「へえ、そうなの。知らなかったわ。どうしてそんなこと聞くの？」
- ▶ Aくん: 「いや、新しい病気が指定難病になったという記事があったから。
難病の定義を調べていたら、この言葉が日本発だってわかったのさ」
- ▶ Bさん: 「この病気は難病ですって、誰が指定するのかな？ 難病って、何気なく使っている言葉だけど、何か基準があるはずね」
- ▶ Aくん: 「ほらケンブリッジ大学のスティーヴン・ホーキング博士の病気は、たしか難病だって言われていたけど、なんて病気だっけ」
- ▶ Bさん: 「ごめん、わたしも知らない・・・」

▶ 22

UFSシナリオ例 「難病とロボット医療」

▶ (シート2)

ロボットスーツHAL、日本で医療機器として承認へ

- ▶ CYBERDYNEの「ロボットスーツHAL」が、いよいよ日本国内で医療機器として承認される見通しとなった。2015年11月10日、同社が同年3月25日に薬事承認申請を行っていた「ロボットスーツHAL医療用(下肢タイプ)」について、厚生労働省の薬事・食品衛生審議会(医療機器・体外診断薬部会)での審議の結果、部会の了解が得られたと発表した(プレスリリース)。
- ▶ CYBERDYNEはロボットスーツHAL医療用(下肢タイプ)について、筋ジストロフィーやALSなどの希少性難治性の神経・筋難病疾患に対する「新医療機器」としての薬事承認申請を行っていた(関連プレスリリース)。新医療機器は構造や使用法、効能、効果または性能が「既承認医療機器」と明らかに異なる場合の申請区分で、治験を経て申請するもの。2013年3月～2014年8月に、希少性難治性の神経・筋難病疾患の患者に対して医師主導治験(NCY-3001試験)を実施した。
- ▶ 審査期間については3月25日の申請時点で、希少疾病用医療機器として優先審査を受けられることから「通常は12カ月のところを、審査側と申請者側の双方の目標として9カ月に短縮し、難病で苦しむ患者のために早期の承認を目指す」(CYBERDYNE)としていた。なお、既に欧州では2013年に脊髄損傷や脳卒中によって歩行困難となった患者の機能回復を対象に医療機器としての認証を取得している。

(大下 淳一＝日経デジタルヘルス 2015/11/11 01:17)

▶ 23

Kanazawa Medical
University **KMU**

UFSシナリオ例 「難病とロボット医療」

(シート3)

- ▶ Aくん: 「例のホーキング博士の病気、あれなんて言ったっけ？」
- ▶ Bさん: 「筋萎縮性側索硬化症。もう忘れたの？ Amyotrophic Lateral Sclerosis、略称はALS」
- ▶ Aくん: 「うん、それ。患者さんの身体は時間を追うごとに麻痺していくらしいよね」
- ▶ Bさん: 「そうね。医師はいったいどんな治療を行っているのかしら。抜本的な治療法はまだ見つかっていないらしいけれど」
- ▶ Aくん: 「うん。介護も大変そうだよね」
- ▶ Bさん: 「介護の厳しさ、どこかで読んだことあるわ。患者さんの方だって、周囲に負担をかけるからストレスがたまる、なんて書いてあった。中には尊厳死を望む方もいるとか」
- ▶ Aくん: 「尊厳死か。それは重たい話だよな。日本ではまだ認められていないよね？」
- ▶ Bさん: 「でも法制化に向けた動きは進んでいるはずよ」
- ▶ Aくん: 「父から医者には人を助ける仕事だと教わってきたから、自殺幇助なんてどうもしっくりこないよ・・・」

▶ 24

Kanazawa Medical
University **KMU**

3. PBLを他科目につなぐ

PBL through the Curriculum

25

三位一体の初年次教育システム

【初年次三科目の連動】

- アカデミック・スキルズでは大学基礎セミナーで議論するテーマに基づいて論文執筆の練習を行う。
- 大学基礎セミナーでは、アカデミック・スキルズの論文をもとにして、プレゼンテーションを行う。
- クリティカル・シンキングでは、アカデミック・スキルズで執筆した論文のピア・レビューを行う。
- アカデミック・スキルズで、論文のリライトを行う。

三位一体の初年次教育システム 三科目水平統合の完成

	アカデミック・スキルズ AS	大学基礎セミナー UFS	クリティカル・シンキング CT
4月	●読書と要約 ● ハンドアウト の作成	「CO2犯人説は正しいのか？」 ● 情報収集 ● 信頼性の高い情報とは何か ● 論文の要約方法 ● ディスカッション	●クリティカル・シンキングの基本 ●コミュニケーションと自己コントロール1
5月	●レポートの書き方 ●レポート作成の手順	課題① ディスカッション、調べ学習、発表	● アーギュメント を特定する ●隠れた前提を明確化する
6月	●テーマ発表（DKS課題①より） ● アウトライン の作成 ●アウトラインの発表	課題② ディスカッション、調べ学習、発表	●実習 - 紙上対話 ●コミュニケーションと自己コントロール2
夏休み	● レポート作成		
7月			
8月			
9月	●パワーポイントの使い方 ●メディカル・ドローイング ● レポートのリライト	● プレゼンテーション学習 発表準備、スライド作成 中間発表 本発表	●ピアで、CTを活かして互いの論述に詳しくコメントする ● ASレポートの批評

三位一体の初年次教育システム 三科目水平統合の完成

1年次

- ▶ **UFS: 手法＝PBL (Problem-Based Learning)**
 - ▶ 問題発見能力、情報収集力、プレゼンテーション能力 の向上を目指す。
- ▶ **AS: 手法＝Academic Writing**
 - ▶ コミュニケーション能力、アカデミック・ライティング技術 の向上を目指す。
- ▶ **CT: 手法＝Critical Thinking**
 - ▶ 能動的態度、論理的推論能力、文章批判力 の向上を目指す。

初年次教育で培った力をつなぐ 垂直統合へ

▶ 医療プロフェッショナリズムⅢ

3年次

- ▶ 医学研究の重要性を理解し実践するための基礎的能力を身につける。
- ▶ 研究プロジェクトを体験し、分析的で批判的思考、科学的手法の原理、医学研究の手法などを学ぶ。



▶ 29

Kanazawa Medical
University



初年次教育から 研究プロジェクトへ

▶ 医療プロフェッショナリズムⅢ

3年次

- ▶ 研究体験談(医学教育学)
- ▶ 質的研究の実践(医学教育学)
- ▶ メディカル・ドローイング(頭頸部外科学・人文科学)
- ▶ 医学研究のデザイン(公衆衛生学)
- ▶ 研究デザインに応じた医学統計(数学)
- ▶ 研究論文の読み方(公衆衛生学)
- ▶ AS・CT を 研究に活かす(人文科学)
- ▶ 研究倫理概論(人文科学)

▶ 30

Kanazawa Medical
University



3年次

▶ 医療プロフェッショナリズムⅢ

▶ 研究プロジェクト

- ▶ 疑問の抽出と整理
- ▶ 身近な疑問から研究計画を立てよう
- ▶ 中間発表会
- ▶ 研究計画作成ワーク
- ▶ 研究発表会（プレゼンテーション）



まとめ

Concluding Remarks

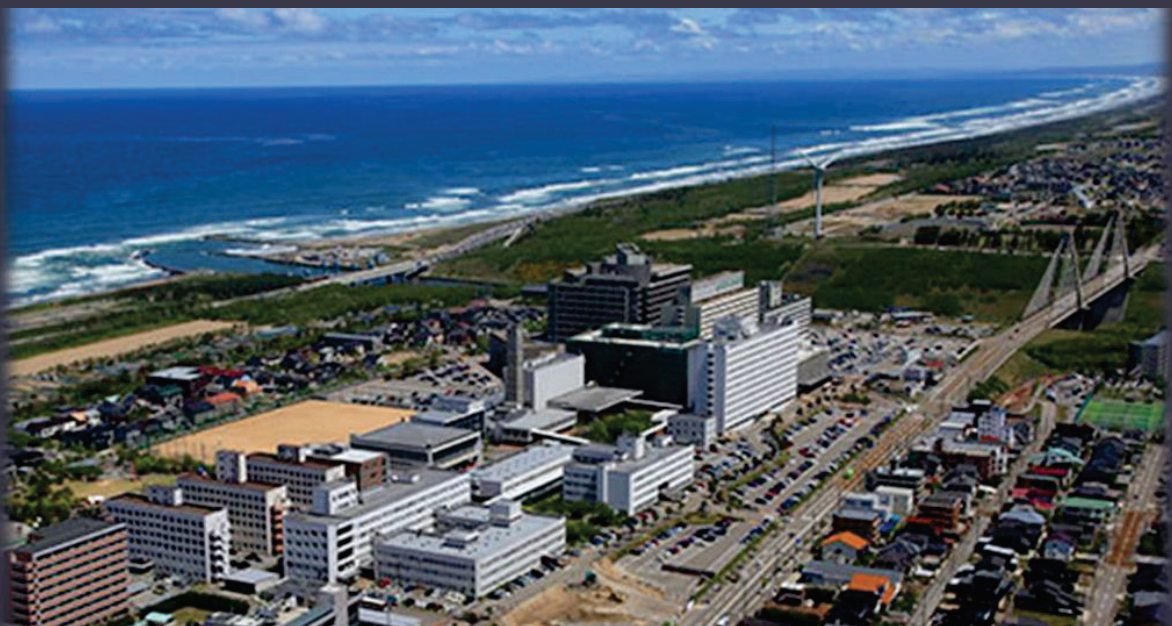
文理融合型初年次教育のすすめ

- ▶ 文理融合型の講義運営では、文系教員が黒子に徹する（とうまくいく）。
- ▶ 理系教員は「なるべく最新」の科学知識に基づいた話題を提供する。
- ▶ 理系教員と文系教員の議論が、「優れたシナリオ」の作成につながる。
- ▶ シナリオを使ってどう講義を進めるのかを詳細に記した、「チューターガイド」を作成するとよい。

▶ 33

ご清聴ありがとうございました。

本田康二郎 kh-honda@kanazawa-med.ac.jp



▶ 34

日本海を臨む 金沢医科大学

【グループ分け一覧】（●は各グループのファシリテーター）

A（A 2 1 教室）

人文科学系	教授
●教養教育学系	教授
教育研究推進系	教授
学務課	職員
学務課	職員
人文学部	1 年
経済学部	3 年



B（A 2 1 教室）

教養教育学系	准教授
薬学・和漢系	特命准教授
●工学系	教授
教育研究推進系	准教授
学外	准教授
学務課	職員
人文学部	1 年
工学部	3 年



C（A 2 3 教室）

●芸術文化学系	教授
教養教育学系	准教授
医学系	教授
学務課	職員
経済学部	4 年
工学部	1 年
医学部	1 年



D（A 2 3 教室）

社会科学系	教授
●教養教育学系	教授
教養教育学系	教授
経済学部	1 年



【グループ討議内容】

グループ討議では、全学FD2019のテーマである「学部を越えた連携教育の発展・拡大に向けて」に基づき、グループごとに討議テーマを決め、討議を行った。

以下、各グループの討議テーマ及び主張等について、ワークシートへの記入内容を記載する。

グループA

討議テーマ：分野をこえる学びは個人の好みか、大学としてのシステムか

主張等：先入観なく、食欲に色々求める。

「まずはやってみよう」の場。

多くの人に納得してもらうために必要な「素人感覚」。

融合型教育の提供→2・3年次向けの高年次教養。

個人が分野をこえられるよう、柔軟なシステムを大学が提供することが大切。

グループB

討議テーマ：文系と理系の関わりについて

主張等：擬似科学を鵜呑みにしない→文系でもリテラシーとして身に付ける必要がある。

明治時代に日本の哲学者が西洋の考え方を日本語に置き換えたように、最新の科学を一般に広めるためには、文系の協力が必要。

文系と理系の連携により新たな飛躍ができる。

グループC

討議テーマ：文系、理系という意識について

主張等：数学の位置づけを考え直す。

文系、理系 教員間の交流が少なすぎる。

他学部での文理融合をトップが考えろ！

グループD

討議テーマ：理系・文系の連携について

主張等：理系と文系がコミュニケーションをとる機会を多くした方がよい。

共通のコンセンサスが得られる（ミニマムな）土台をつくる努力が必要。

専門内の小さな部分だけにとじこもらず、広い視野をもつ姿勢が求められる。

【全体討議の司会を担当して】

全体討議の司会は、今年度も教育推進センターの橋本が担当しました。

過去4年間と同様、各グループは教職員・学生が混じるように編成し、各グループには教員の参加者の中から予めファシリテーター役をお願いしました。ファシリテーター役は初めてという方もおられましたが、今年も全体にスムーズに進行したようです。

例年、「グループ討議の時間が短い」という感想が寄せられることが多かったのですが、昨年度から、わずかながらグループ討議の時間を延長し、さらに今年度はグループ都議と全体討議の間の時間に少し余裕を持たせました。このため、全体討議の時間がやや短いスケジュールとなりましたが、昨年度までの「若干の延長」を避け、ほぼ予定通りの終了時間にできると同時に、例年並みの活発な討議となりました。今年も、教員だけではなく、学生や職員から鋭い発言があり、中身の濃い時間が持てたと思います。

基調講演をして下さった本田先生も、積極的にグループ討議に加わって頂いた上、全体討議で、さらに様々な補足説明を展開して頂きました。文理融合を自らの人生でも実践なさる先生ならではの発言もあり、有意義な時間を過ごすことができました。金沢医科大学における教育実践に具体的に踏み込んだ質疑応答もありました。

コピー担当の職員には、今年も御負担をおかけしましたが、一般的な、各グループが討議結果を順次発表する形式と比べ、他グループからの質疑や発言時間を確保しやすく、全体での共有感覚も強まります。また、参加者一人一人の手元に具体的な資料が残るという利点もあります。各グループでの討議内容を共有することは、こうしたFD形式では必要不可欠のことであり、参加者全員がより主体的に参加しやすい形にすることは非常に重要ですから、次年度もできればこの形を継続したいと考えています。

(教育推進センター教授 橋本 勝)



【参加者感想】

【ファシリテーターからの感想】①

学部を超える教育というテーマは、タイムリーなテーマだったと思う。

しかし、文理融合、教教分離、非正課教育・教育環境も含めた教育設計の必要性・・・と、このテーマの下で思いうかぶ課題は実に多い。そのため、司会役であるにもかかわらず、私も多く語りすぎてしまった。私がいたグループで、反省点があるとする、まず、この点かもしれない。

私の語りすぎ問題はさておき、活発な意見交換になったのは、やはり、学問分野の壁を超える教育という課題が、それだけ大きな、多面的な影響を教育の構造に及ぼす問題だったからだと思う。論点が多方面に拡散する傾向があったものの、全体的に見れば、充実した良いグループ討論だったのではないかな。

参加してくれた学生二人にとっても素直な思いをぶつけやすいテーマだったと思う。彼らからは、率直で前向きな意見を色々聞くことができた。街づくりへの関心や気象予報士の資格試験に向けた学びなど、時間割で標準的に与えられた学習をこえて、いかに彼らが自分の目標や将来像にあわせた学びを意識しているか、強く感じられた。学生たちの、その、実人生と地続きの学びの意識にこれからの大学がどう応えてゆくかは、大きな課題だとも感じた。

一方、教員や事務職の口から大学教育の在り方について多様な意見を聞けたというのは、学生たちにとって、それ自体ですでに良い経験だったのではないかな。大学にしろ社会にしろ、「今のこれが当たり前」と捉えるのではなく、主体的に向き合って、彼らなりに考えてくれれば嬉しいし、友人たちとも語り合ってくれれば、なおのことありがたい。だとしたら、学生参加のディスカッションの場で、教員が喧々譁々の意見を言いあうというのも、まあまあ良いことと言えるのではないかな。今回は、少しばかり口数が多すぎたと反省はしているのだが。

(教養教育院教授 名執 基樹)

【ファシリテーターからの感想】②

私はC班を担当しましたが、かなり活発な議論がなされたのではないかと思います。

私個人の意見は、そもそも文系と理系を分ける必要はないというものであったため、当初よりその論点を中心にご意見をいただきました。ただ、メンバーの中で明確に文系と位置付けられるのが学生 1 名だけであったため、バランスの良い議論ができたかどうかは若干怪しい感じです。

私は芸術文化学部には所属しているので、普段は文系(正確には芸術系)の先生方と接していますが、文系の教員の一部は「掘り下げる」研究を行っています。他方、工学部出身の私などはデザインもしていますが、主に「積み上げる」研究(創作)を行っています。

多くのすれ違いは、こうした視点の違いによるのではないかと学部運営の中では感じています。社会的には新しい何かを生み出す方が優遇されますが、それが全てであってはならないのは言うまでもありません。もちろんだちらの考えが正しいかは、私にはわからないのですが、社会的認識とのずれが気になっています。

私の意見は別にして、議論の中では、文系・理系の分離した状況を変えるにはどうすればよいかが最初的话题となりました。数学問題は、その中で出てきたことです。理系・文系を分けているのは高校段階からですが、遡れば大学入試が原因です。そして理系学部入試の数学が難しくなったのは団塊の世代におけるふるい落としが原因ではないかという意見が出ました。それならば、それをもう一度見直そうというのが議論の話題としてクローズアップされました。

次に、現状の教員間の文系・理系の分離が話題になりました。この状況を変えるのは容易ではないという点で意見は一致したと思いますが、自発的な行動で解消するのは困難であることから、システムそのものをいじらなければならず、結果的に大学執行部の判断が重要だろうということになりました。

もう一つ、富山大学の強みは何なのだろうかという話になり、地方大学としては珍しいほどに群を抜いた多様性があることではないかと話し合いました。

学生の意見で「富山大学を誇れない」というニュアンスのものもありましたが、多様性を活かした大学づくりが重要なので、何でもかんでも融合という姿勢はいかがなものかという話になりました。多様性を身に着けるための情報は1年生であつてもよいが、本格的な融合は4年生～院生で行うべきである。そうでないと自分の専門の核(背骨)を持たない不安定な学生を生み出してしまうという意見もありました。

(芸術文化学部教授 大氏 正嗣)

【ファシリテーターからの感想】③

橋本先生が企画される全学FDはいつも興味深く、毎回参加してよかったと思います。今回のテーマは「理系と文系の融合」です。本田康二郎先生のご講演では、文系学生と理系学生の両方にとって、文理融合教育が必要であることを説いています。理系大学といえば東京工業大学がすぐに思い浮かびますが、一橋大学と連携し、教養教育に力を入れています。私は理系学部出身ですが、大学生だった当時は文系科目の講義はどちらかといえばつまらなく感じました。しかし、総合科目として開講されていた文理融合科目は、科目名は「部分と全体」という哲学的なものでしたが、とてもエキサイティングでした。1つの物事を様々な角度で学ぶことは、大学の教養として重要な視点です。その科目の中で理系学生と文系学生がお互いの意見をぶつけ合うことは、学生にとって良い体験になります。富山大学でも文理融合科目を増やす、発展させることが必要だと考えます。

(教養教育院教授 谷井 一郎)

【参加した学生からの感想】

今回、私が参加した理由は、学生参画型 FD 活動に参加していて、教員の FD 研修がどのように運営されているのか、また教職員は学生及び現在の授業についてどう思っているのかが知りたくなったからでした。私は文系なので、基調講演は学生である自分が聞いても他人事でない様に感じられました。グループワークでは、先生方の人数が学生より多くて学生である自分は少し話しにくく感じましたが、先生方の方から話を振ってくださり、学生としての意見を述べる事が出来たと思います。先生からの視点の意見も聞けて、文理融合についてさらに理解が深まりました。次回もこういう機会があればまた是非参加したいと思いました。

(人文学部 1 年 前田 真央)

全学FD2019 参加者アンケート

本日は、全学FD2019に御参加いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にさせていただくため、アンケートに御協力をお願いします。(当てはまる番号に○を付けてください。)

問1 今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

	良くなかった	あまり良くなかった	どちらともいえない	おおむね良かった	良かった
1) 基調講演	1	2	3	4	5
2) グループ討議	1	2	3	4	5
3) 全体討議	1	2	3	4	5
4) 企画全体として	1	2	3	4	5

問2 全学FDでは、討議型FDを取り入れ、グループ討議及び全体討議を実施していますが、どのように思いますか。

1) このままでよい 2) 変えたほうがよい 3) その他 ()

この回答について、理由・意見があれば記入してください。

問3 開催時期について、どう思いますか。

1) このままでよい 2) 変えたほうがよい (時期:)

問4 今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。

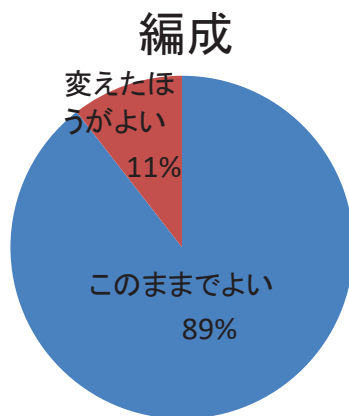
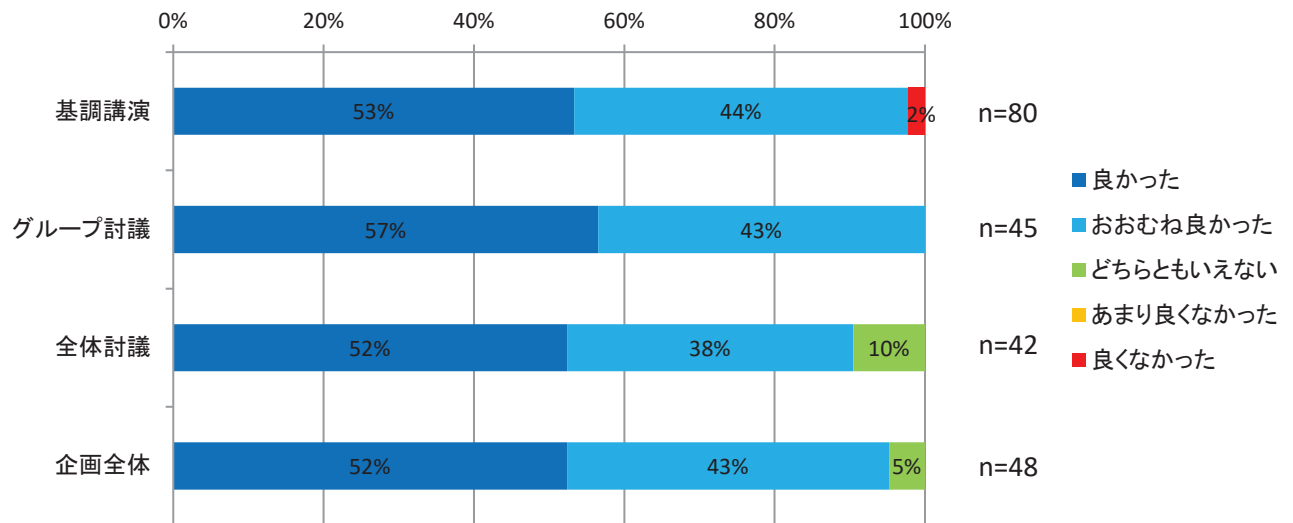
問5 今後の全学FD研修で、実施して欲しいテーマがあれば記入してください。

御協力ありがとうございました。最後にあなたの立場と御所属をお教えてください。

1) 教員 2) 職員 3) 学生

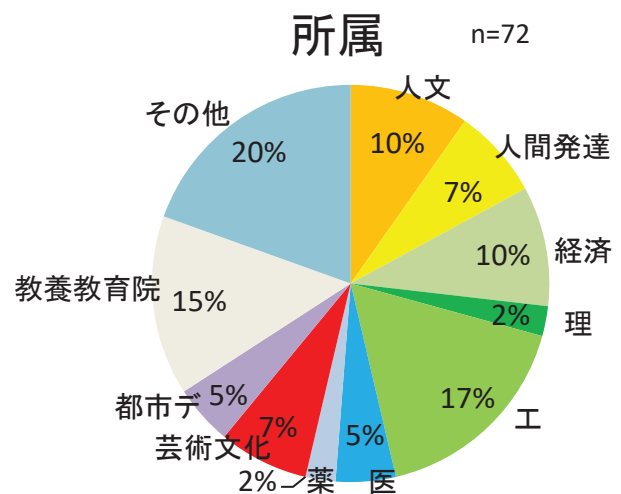
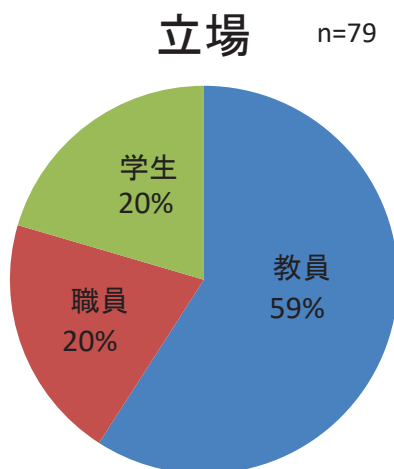
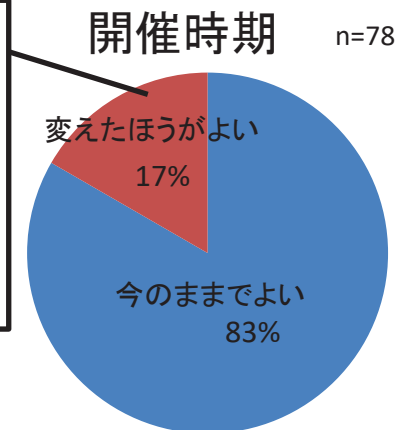
1) 人文 2) 人間発達 3) 経済 4) 理 5) 工 6) 医 7) 薬 8) 芸術文化
9) 都デ 10) 教養教育院 11) その他 ()

全学FD2019 参加者アンケート集計



代わりの時期

- ・ 夏季休業期間中
- ・ 11月
- ・ 科研費の時期以外
- ・ 避難訓練の日以外



◎問2『『全学FDでは、討議型FDを取り入れ、グループ討議及び全体討議を実施していますが、どのように思いますか。』の回答について、理由・意見があれば記入してください。』の回答

○「1) このままでよい」と回答した人の回答

—肯定的な意見—

- ・文理混合、教員・学生混合のグループ討議はとても良い。
- ・教員、職員、学生のいろいろな声を聞くことができる。
- ・意見交換がそれなりに充実していた。

—建設的な意見—

- ・グループ討議の始めの自己紹介で時間をとられてしまうため、簡潔にする工夫が必要では。
- ・テーマ決めに時間がかかることがあるため、グループ討議のテーマはあらかじめ1つか2つに絞っておいた方がよいのでは。
- ・グループ討議は毎年盛り上がっているように感じるので、もう少し時間があればよりよいように思う。

○「2) 変えたほうがよい」と回答した人の回答

- ・グループ討議・全体討議の時間を長くした方がよい。
- ・グループ討議のまとめ時間をもう少し長くしてほしい。
- ・プロのファシリテータなどを入れると、もう少し進行が円滑になるように思う。

◎問4「今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。」の回答

—周知方法・参加者の募集方法について—

- ・幅広い教員に意識してもらうための日常からの工夫が必要では。
- ・FDという名前では分かりにくいので、分かりやすい、親しみやすいサブテーマを学生向けだけでも示すとよいと思う。
- ・教員から学生への参加のアプローチ。
- ・部活・サークルの代表者に参加するよう呼びかける。
- ・参加するとどういったメリットがあるかをもっと具体的に紹介するとよいのでは。
- ・ウェブなどを通して内容を発信する。
- ・講演内容は非常に面白いので、宣伝時に概要が分かるとなお良い。
- ・全学の一斉送信メールで、全教職員・学生にアナウンスする。

- ・学生に授業として参加させる。
- ・FD 自体を知らない学生がまだまだ多いと思うので、各学部の授業で宣伝してもらう。
- ・各部局の教務委員は原則必ず参加するように要請する。
- ・学部長に一定数の教員を派遣させるルールをつくる。

—開催形式について—

- ・まずは、全学でなくとも複数学部での合同 FD を検討してはどうか。
- ・遅い時間に業務と関係なく、食事しながら世間話的にできる年や回を用意してはどうか。

—その他—

- ・学生にも企画に関わらせる。
- ・単位として認定する。

◎問5 「今後の全学FD研修で、実施して欲しいテーマがあれば記入してください。」の
回答

- ・学生が主体的になれる教育。
- ・教員向けの「教え方」のスキル。
- ・学生と教員とのコミュニケーションの強化について。
- ・学生に向学心を抱かせるために教員は何をすべきか。
- ・地域型の大学として生きる道を選んでいるので、それを教育で展開する方法（全学 PBL 以外で）を知りたいし、検討したい。
- ・学生の意見をもう少し取り上げられないか。（関心のあることなど）
- ・大学の産学官連携のあり方について。
- ・学生と教職員が共に創る大学教育。
- ・大学の就職予備校化について。

2. 各部局におけるFD活動報告

令和元年度FD活動報告

部局名 経済学部

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

例年、経済学部では、FD研修会を年5回開催している。本年度も、年度初めに実施計画を学部FD委員会で検討し、5つのFD研修会を企画した。検討に際しては、学部の中期計画・中期目標に関連して継続的に実施している研修会（PROGテスト関連）と就職指導委員会と合同で毎年行っている学生の就職に関連した研修会に加え、時代のニーズや学部の教育・指導上の課題に対応したものを企画し、教員の意識向上と学生への教育・指導効果の向上を図るべく取り組みを行っている。

今年度企画した研修会は以下の5つであり、その概要は次の通りである。

第1回：「PROGテストの結果報告会」（令和元年7月17日開催：17名参加）

株式会社リアセック 教育開発支援グループ ソリューションプランナーの根本康宏氏を講師にお招きして、新入生に対して行ったPROGテストの結果－PROGテストで測定されるリテラシーおよびコンピテンシーの本年度新入生の能力ならびに他の国公立大学等の学生の能力との比較結果等－について報告していただいた。参加された先生方には、本年度新入生の特徴を把握し、より効果的な教育・指導を行っていくための参考となる有意義な内容であった。

第2回：「ネット依存症」（令和元年9月11日開催：52名参加）

経済学部では、過去に学生の自殺者や犯罪者が出てきていることから、学生の教育・指導にあたってメンタル面でのサポート体制の充実化を喫緊の課題として取り組みを行っている。この研修会はそうした取り組みに呼応するものであり、本年度は、現在話題にもなっている「ネット依存症」（令和元年5月にはWHOが「ゲーム障害」（ネット依存症の一種）を国際疾病として正式に認定）をテーマに、本学大学院医学薬学研究部 疫学・健康政策学講座の山田正明先生をお招きして、ネット依存症の原因や症例、診療等について事例を交えわかりやすく解説していただいた。参加された先生方の関心も高く、本研修会を通して、ネット依存症のリスクを適切に把握することができ、またそうした傾向を持つ学生の早期発見にもつながることが期待される有意義な研修会であった。

第3回：「学生の県内就職と地方創生の取組について」（令和元年12月4日開催：40名参加）

本学地域連携推進機構 地域連携戦略室の金岡省吾先生と尾山真先生を講師にお招きし、地域連携戦略室における取組事業－自治体や民間企業、各種団体と連携した地域振興への企画立案、COC+の事業展開、および地域イノベーション創出に向けた活動等－の紹介と、そうした事業活動を通じた学生の県内就職率向上への取り組みについてお話しいただいた。参加された先生方には、地方創生に関わる活動に対する戦略室との連携の可能性や学生の就職活動の参考にしていただける有意義な内容であった。

第4回：「PROGテストにみる1年次から3年次の成長」（令和元年12月11日開催：47名参加）
（概要については、以下の【取組事例】を参照。）

第5回：「性の多様性と、いま大学・学部求められる対応について」（令和2年2月17日開催：16名参加）

民族的／宗教的／性的マイノリティが直面するさまざまな社会的困難について知り・対話する＜場＞として「ダイバーシティラウンジ富山」プロジェクトを立ち上げ、活動されている本学人文学部の林夏生先生を講師にお招きし、「マイノリティ学生への配慮について」をテーマにお話しいただいた。参加された先生方の関心も高く、ワークシートを用いた討議も交え、性的マイノリティや性的指向・性自認（SOGI）における困難について把握することができ、学生への対応等にも生かしていくことが期待される有意義な研修会であった。

【取組事例】

今年度経済学部で行ったFD研修会の具体的な取組事例として、令和元年12月11日に開催した第4回の「PROGテストにみる1年次から3年次の成長」（47名参加）について紹介させていただく。

PROG（「PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS」）テストとは、学校法人河合塾及び株式会社リアセックが実施している、①リテラシー（現実場面で知識を活用する能力）と、②コンピテンシー（自分を取り巻く環境に実践的に働きかけ、対処する能力）という2つの能力（ジェネリックスキル）を学生がどの程度身に付けているかを計測し可視化するテストのことである。

経済学部では、学生自身がこれら2つの能力を現時点（新入学時）でどの程度身に付けているかを把握し、今後の学生生活の中で優れた能力をより一層高め、また不足している能力については取得・育成していくという意識を高めていくことを目的として、平成27年度より実施している。実施方法としては、新入学時に受験し、その後、3年次後期に再度受験するという形をとっており、新入学時から2年半にわたる学生生活を通じた自らの成長を把握し、その成果を就職活動にも活かせるようになっている（なお、平成27年度は3年次学生のみの実施であり、平成28年度より1年次と3年次の学生に対して実施している）。

本研修会では、株式会社リアセック キャリア総合研究所 主任研究員の谷川雅之氏を講師にお招きして、3年次学生（全体ならびに学科別）のリテラシー及びコンピテンシーの各能力について、他の国公立・私立大学の学生やモデル社会人・グローバル人材との比較、本学部における過去の受験者との比較を交え報告をいただき、また1年次に受験した時から2年半の期間にわたる学生の能力の成長等についても報告いただいた。

研修会での報告は、詳細な分析データ資料に基づくものであり、各教員は本年度3年次学生の能力の特徴を把握したうえで、今後より効果的な教育・指導を行っていくための検討課題を明確にすることができた研修内容であった。

【得られた成果とその活用】

【取組事例】で紹介したFD研修会「PROGテストにみる1年次から3年次の成長」の成果については以下のとおりである。

本研修会を通じて、本年度3年次学生の能力の特徴と成長の状況を、他の国公立・私立大学の学生や本学部における過去の受験者との比較を通じて把握することができたことで、現時点での

検討課題が明確になり、今後の授業やカリキュラムの改善等へ活かすことが期待される成果が得られた。

特に、これまでも課題となっていたコンピテンシーの向上という問題に対するアプローチのヒントが得られたことは大きいものと考えられる。すなわち、本学部学生のPROGテスト結果の例年の傾向として、リテラシーは他大学平均に対して高い傾向があるのに対して、コンピテンシーが低い傾向にあり、今年度も同様の傾向を示しているが、コンピテンシーを効果的に高めるために具体的にどのような取り組みが必要なのかこれまで大きな課題となっていたのである。今年度の研修会では、コンピテンシーを高めるために他大学等で行われている3つの事例の紹介がなされたことで、本学部における学生のコンピテンシー向上へ向けた取り組みについて、具体的な検討が進むものと期待される。

【今後の課題】

PROGテストに関しては、FD研修会そのものの課題というよりも、その実施についていくつか課題が生じており、それが間接的に教員のFDに影響を与えているものと思われる。

まず、PROGテストの結果については、全体の傾向のみの把握にとどまっており、学生個人の成績については個人情報観点からゼミナールの指導教員にも開示されておらず、個人の能力の成長へ向けた踏み込んだ指導へ役立てられていないということが現状としてある。

また、PROGテストの大きな意義として、1年次から3年次への能力の成長を測ることにあがるが、残念ながら3年次学生の受験率が3割程度（本年度）と低くなっている。それによって、多くの学生がテスト結果に基づく自己能力の分析・把握によるメリットを享受できず、また教員側も今後の教育上の改善策を検討する際に制約を受ける可能性がある。したがって、テスト結果を有効に活用し、授業やカリキュラムの改善を進めるためにも、3年次学生の受験率向上のための方策を検討していく必要がある。

そして、教員の側でPROGテスト実施の意義に必ずしもコンセンサスが得られていないことがあげられる。すなわち、PROGテストは、前述のような目的で実施されており、学部の中期計画・中期目標に関連した学生の学習成果の可視化に対する資料として活用されているものである。もし今後も同テストを活用していくのであれば、学部全体として同テストの意義について改めて議論をし、明確なコンセンサスのもとに、積極的な役割をもったものとして実施していく必要があるだろう。そのような形での実施が実現できれば、より有効なテスト結果の分析・検討も可能となり、結果的に、それをもとにした教育の改善等として教員のFDとしてもより効果的なものになるものと考えられる。

また、学部FD研修会の全体的な課題として、2点ほど指摘できる。

1つ目の課題は、これまで行われてきた学部FD研修会では、参加した教員を対象にした事後アンケート等を行ってこなかったことがあげられる。研修会のテーマや内容、実施方法等に関する評価や、教員の満足度や成果等についてしっかりと把握するためにも事後評価は不可欠なものと考えられる。また、事後アンケートの実施によって、教員が興味・関心を持っている研修会テーマについての意見を集約することも可能である。今後よりよい研修会の企画を行っていくためにも、事後アンケート等の導入へ向けて検討を進めていく予定である。

2つ目の課題は、FD研修会の実施に際しての予算の確保が難しいということである。すなわ

ち、学内もしくは近隣の大学で講師の先生が見つかるかどうか研修テーマがある程度影響されてしまうということである。たとえ学部の教育・指導上の課題に対応した研修テーマであったとしても、学内で適切な講師が見つからない場合、予算の関係で当該テーマでは開催できない可能性もあるということは残念なことである。

以上、いくつかの課題を指摘したが、こうした課題と向き合いながら、今後とも、教員一人ひとりが教育の現場で直面している問題に対するサポートとなるようなテーマを通して魅力的な研修会を企画し、教員のFDの意識を少しでも高めていけるよう取り組みを進めていくものである。

令和元年度FD活動報告

部局名 医学部医学科

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

2015年に受審した、医学教育分野別評価に基づき医学科の教育改革を進めている。2018年第1回FD「富山大学医学部分分野別評価報告書に基づく卒前教育の改善計画」、第2回FD「コンピテンシーを活用する」、第3回FD「Active learningを導入する」の一連のシリーズは、いずれも分野別評価において、本学科でのより改善すべき教育内容であり、教員間で情報共有をした。それらを踏まえ、2019年度は策定された医学科コンピテンシーに基づくactive learningの推進、改善を図るため、①4年生のプレ臨床実習において臨床推論能力と医療技術の向上目的にシミュレーション実習をより充実させ、②6年生の臨床実習期間にシミュレーション実習を正規科目として導入し、③3年生、4年生に対し、基礎・臨床統合型授業のトライアルを開始するなど、医師キャリアパス創造センターが主導してカリキュラム改善を実践した。

【取組事例】

第1回FD：「臨床実習後OSCEへの備え」（2019年6月7日開催）

- ・学生の卒業時コンピテンシーの獲得能力を総合的に評価するために来年度から正式実施される臨床実習後OSCEの概略と準備状況、及び実行組織の必要性を教員間で情報共有をした。

第2回FD：「コンピテンシーを評価する」（2019年10月4日開催）

- ・2018年度にワーキンググループにより策定された医学科コンピテンシーが制定された。医学科コンピテンシーの学内の広い範囲での情報共有と意見交換を目的にFDが開催された。

第3回FD：「地域枠制度の現状と課題」（2019年10月7日開催）

- ・全国の多くの医学部で導入されている“地域枠制度”について、筑波大学の片岡義裕先生を講師に迎え、地域枠制度の実態と課題について講演頂き、地域枠・特別枠制度への理解を深めた。

第4回FD：「試験問題（教育コンテンツ）と個人情報保護」（2020年2月18日開催）

- ・特にICTを利用したデジタル学習教材や試験問題作成時の個人情報の取り扱いにつき、広く教員間での情報共有を促進し、個人情報保護の重要性とその対策につき教員全員の認識を深めた。

【得られた成果とその活用】

第1回FD：

- ・医学部医学科臨床教育医長の会を設立し（2019年6月）、本委員会が中心となって体系的に本OSCEを運営することとなった。また、委員による活動は教員業績評価に反映することが制定され（2019年9月）、よりアクティブに本委員会が運営されることとなった。

第2回FD：

- ・本コンピテンシーに基づく授業の評価は、分野別認証評価の際の必須項目であり、医師キャリアパス創造センターが主体となり各授業のコンピテンシーに基づく評価を継続的に促進し、次回審査（2022年）に向けて準備する。

第3回 FD：

・講演後の質疑応答で、講師と本学教員の間で活発な意見交換が行われ、地域枠制度への理解をより深めた。FD 開催後、地域枠・特別枠制度の入学生に対し、学生面談を実施し、富山県の地域医療に貢献する意識付けを行った。

第4回 FD：

・試験問題作成時における個人情報保護について知識及び技術の情報共有ができた。

【今後の課題】

・FD 参加者の参加回数に偏りが見られる。医学部全体で教育改善をすすめるために、教育関係部署の継続的、計画的な努力が必要である。

・分野別評価で指摘されている、統合型学習を体系的に整備するために基礎系、臨床系教員の協働により学習コンテンツを作成するための FD が必要と考えられる。

・FD の短期的な効果は毎回アンケート調査をしているが、中長期的な FD の評価がなされていないため、調査を実施し、FD の質の改善に努めるべきと考えられる。

令和元年度FD活動報告

部局名 医学部看護学科

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

「看護学における学習者のパフォーマンス課題と評価」と課題を設定し、実施しました。

【取組事例】

私たちは普段何に着目して教育・評価をしているのかについてグループで事前課題を行ったのちに、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会委員の京都大学大学院教育学研究科の石井英真先生をお迎えして、「社会から求められる看護職像に基づく『真正の学習評価』－学生のパフォーマンス評価の方法の考え方－」についてご講演を拝聴しました。（別紙実施要項参照）

【得られた成果とその活用】

伝統的な評価方法の人工性や断片性の批判を受けて、知識や技能に限らない概念の意味理解や知識・技能の総合的活用力を質的に評価するパフォーマンス評価について、バスケットボールのドリブルやシュートができてゲームが上手にできるとは限らない学生たちへの真正の学習の必要性、学力の質的レベルである知識の獲得と統合（知っている）、学力の質的レベルである知識の拡張と洗練（わかる）、知識の有意味な使用（使える）、評価を指導に生かす指針となる3つ、学習の評価、学習のための評価、学習としての評価、その質的な評価基準としてのルーブリックについて、多くの示唆を得るとともに理解を深めました。

【今後の課題】

平成 29 年看護学教育モデルコアカリキュラムによる卒業までに到達すべきコンピテンシーが明らかになり、本学看護学科の3つのポリシーとの整合性を各領域、各教員でチェックし、看護学教育学生課程のシラバスを作成、教育を実施しているところである。

特に、学士課程看護学教育において、臨地実習は重要で特徴的な科目である。

その評価の本質的な考え方について、学科教員全体で共有できたことは大変有意義であった。

本企画で得た知見を、各領域、各講義・演習・実習の評価に生かしていくことが課題である。

2019年度医学部看護学科FD実施要項

テーマ：看護学における学習者のパフォーマンス課題と評価

目 標：①看護学科教員で、社会から求められる看護職像について、互いの描きを尊重しつつ共有する。

②①の描きに基づいた学習者のパフォーマンス課題と評価の方法について検討する。

③単なる「成績評価の厳格化」ではなく、「真正の学習」を促す評価方法について追究する。

④学生から「なぜ私のレポートは、80点では無く75点なのか」の問いに説明責任を果たせるような評価の捉え方ができる。

期 日：2019年9月24日(火) 10時から16時

場 所：富山大学医学部看護学科棟 10教室

参加者：医学部看護学科専任教員

日 程：

10:00～	開講式挨拶 日程等の説明
10:10～10:30	【学内近況報告】 「本学看護学科をとりまく状況と課題」 講師：八塚美樹(学科長) ・大学改革・組織改革にともなう学部・大学院教育の課題 ・看護系大学分野別認証評価の概要 質疑応答
	・その他 申し出により企画
10:30～12:00	【GW及び討議】 事前ワークとして5種類のレポートを評価の高い順に並べてみる。 その結果をグループメンバーに全員報告する。 その後、日頃どのようなことに着眼して教育⇒評価しているか話し合う。
12:00～13:00	休憩
13:00～15:00	【GW報告】 3グループのみ口頭報告 全グループ紙面報告 【講義】 「社会から求められる看護職像に基づく『真正の学習評価』」 ー学生のパフォーマンス評価の方法の考え方ー 講師：石井英真先生(京都大学教育学研究科／教育学環専攻教育・人間科学講座／准教授) 質疑応答
15:00～15:15	休憩
15:15～16:00	【学外研修参加報告】 ・日本看護系大学協議会報告 ・全国国立大学法人助産師教育専任教員会議報告 ・その他 申し出により企画
16:00～	閉講式挨拶

石井英真先生 著書等

- ・今求められる学力と学びとは コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影, 日本標準, 2015
- ・西岡加名恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために』, 有斐閣, 2015
- ・増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開 スタンダードに基づくカリキュラムの設計, 東信堂, 2015

令和元年度F D活動報告

部局名 工学部

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

令和元年度、工学部では教育に関するF D研修会を、本学部の「学生による授業満足度」が全学目標に届いていない現状を踏まえ、授業満足度の向上をテーマに実施した。

【取組事例】

令和元年度第一回工学部F D研修会の概要は次のとおりである。

日時 令和元年12月25日(水)午後1時～午後2時45分

場所 工学部大会議室

題目 学生による授業満足度の向上に向けて ～授業満足度を向上させるためのヒント～
次 第

- ・開会挨拶 富山大学工学部長 會澤 宣一
- ・授業満足度の現状と学生アンケート分析結果について
富山大学工学部F D委員長 磯部 正治
- ・各コースのザ・ティーチャーによる事例紹介
 - ① 電気電子工学コース 小川 晃一 教授
 - ② 知能情報工学コース 参沢 匡将 准教授
 - ③ 機械工学コース 関本 昌紘 講師
 - ④ 応用化学コース 堀野 良和 准教授
 - ⑤ 材料機能工学科 砂田 聡 教授
- ・総合討論
- ・閉会挨拶 富山大学工学部F D委員長 磯部 正治

【得られた成果とその活用】

工学部の授業満足度の現状について学生アンケート結果に基に分析した結果、本学部では高い授業満足度を示す学生が少ないこと、授業満足度は難易度が少し難しいところで高くなることが示され、授業満足度を上げるには「分かりやすい説明」、「学生の理解度をもとに進める講義」、「学生の質問に正しく回答」、「補助プリントの配布」、「聞き取りやすい講義」、「板書が読みやすく、ノートに取りやすい講義」、「講義の意義を説明し、興味を持たせる」ことが重要であるとされた。平成30年度ザ・ティーチャーからは「教科書の自作」、「演習中の巡回(教壇で質問を待つのではなく自分から回る)」、「演習問題を毎講義終了時に課し、実践を通して理解を深めさせる」、「学力層別に異なる方法を用いて学生のモチベーションを上げる工夫をする」、「シャトルカードを活用することにより授業の随時改善や学生の把握を図る」等、学生の理解度向上のために、それぞれの講義で実践している事例について報告があった。

教員にはこのF D研修会で得られた成果を活かし、授業改善することが期待される。

【今後の課題】

当面の課題としては、本学部学生の授業満足度平均を全学目標まで引き上げることである。

令和元年度FD活動報告

部局名 芸術文化学部

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

本年度は、単純な講習会型のFDだけではなく、簡単に答えが出ない問題に対する教員の議論型のFDの両者を計4回開催した。

5月：休学・退学の動向とその対応に関する議論型FD

6月：授業評価アンケートの効果的活用に関する議論型FD

7月：LGBTQに関する講師を招いたFD（人間発達科学部 林准教授）

1月：学生とのカウンセリング基礎技術に関する講師を招いたFD（保健管理センター 西山講師）

【取組事例】

議論型のFDでは、正しい情報に基づき意見交換を行うことで、教員の認識が偏ったものにならないものとなるように意図した。上記に示す通り二度の議論型FDを実施したが、結論や明確な対応策を導くまでは至っていない。ただ、教員同士が様々な意見をやり取りするフランクな状況を作り出したのは成果であったと考える。

講習会型のFDでは、どんどん難しくなっていく学生との接し方に対して、専門家を招き従来型の研修会を開催した。ただ、こちらも押し付けになるような内容ではなく、教員同士と一緒に考えられるような研修内容としている。

【得られた成果とその活用】

明確な成果がすぐに出るようなものではないと理解しているが、学生との相対し方について教員が再度意識するきっかけは得られたのではないかと考える。

【今後の課題】

今年度、当初予定したFDがいくつか実施できなかった。外部講師を招いての先進事例を学ぶ機会を来年度は実施したい。

予定：文化財保護法の改正に伴う勉強会（文化庁関係者）

地域づくりに対する先進事例やこれまでにない取り組み（三重大学西村副学長）

令和元年度FD活動報告

部局名 教養教育院

【令和元年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

- ① 全学の教職員、学生を対象に「学生と考えるおもしろい授業」をテーマとしたFD「教養教育院FD2019」（令和元年9月25日開催）を開催した。
- ② 「学生による授業評価アンケート」の実施結果を、今後の授業改善に活用するため、各授業担当教員から「フィードバック・改善報告票」の提出を依頼している。
- ③ 本学が取り組むべき「グローバル化」に対応した英語教育の充実・推進に向けた方策について意見交換するため、「本学の英語教育に関する意見交換会」を令和元年12月27日に開催した。

【取組事例】

- ① 「教養教育院FD2019」では、第一部として「なぜカリキュラム改革は必要なのか」と題し、時代の要請に沿った大学教育について説明し、本学の教養教育が目指すべき姿を提案した。また、第二部として本学では実施されていない他大学の特筆すべき教育プログラムの事例を紹介し、第三部では、第一部並びに第二部を踏まえ、「富大の授業をおもしろくするために」というテーマで学生を交えた総合討論を行った。
- ② 提出された「フィードバック・改善報告票」を取り纏め、平成30年度実施分について、「教養教育院FD2019」において、「学生による授業評価アンケート結果に関するフィードバック・改善報告書」として公表した。
- ③ 「本学の英語教育に関する意見交換会」では、佐賀大学より早瀬 博範 氏（副学長・全学教育機構長）を講師として招き、佐賀大学における英語教育の改善事例について講演を行った。また引続き実施した本学の教育改善の充実・推進に向けた意見交換会にも参加いただき、貴重な意見をいただいた。

【得られた成果とその活用】

- ① 「教養教育院FD2019」で紹介した他大学の事例については、そのまま本学に当てはめ、教育改革を進めるという趣旨ではないが、本学にはない特筆すべき事例として全学で共有するとともに、これから行うべき教育改革について、FD参加者と意見交換ができた。
- ② 平成30年度「学生による授業評価アンケート結果に関するフィードバック・改善報告書」として公表するとともに、今後の授業改善の参考として全学で共有することができた。
- ③ 佐賀大学における教育改善事例を参考に、招聘した講師を交え、本学の英語教育等の充実・推進に向けた意見交換を行い、取り組むべき課題等について、理解を深めることができた。

【今後の課題】

- ① 他大学の先行事例について、個別に大学訪問する等、令和4年度からの教育課程の見直しに向け、本学が取り組むべき教育改革について、さらに検討する予定である

- ② 「学生による授業評価アンケート」における授業満足度について、従前に比して若干低下した。教養教育院では、アンケート結果を解析し、学生が理解しやすい授業構成や要点をまとめた説明方法の検討が授業満足度向上につながると考え、改善に取り組んでいる。
- ③ 意見交換会で得られた知見を参考に、英語教育等の充実・推進について、更に検討を進める予定である。

3. UD Talkについて

UD Talkの概要

UD Talkは学生参画型FDの恒例イベントとして、学生が企画し、学内外の学生、教職員、市民に参加を呼び掛けて、2012年から年に1～2回のペースで開催しているものであり、2019年度は5月に第9回を、11月に第10回を開催した。

学生の視点をFD活動に加味することが、教職員・学生の双方に意義があることは、例えば、本報告書の全学FDにも学生が参加していることに関して、参加者から寄せられている感想などからも明らかであり、今後も様々な形で推進していきたい。

注) 2001年以降、岡山大学を起点に全国の国公立大学(80～100大学)で展開されている学生参画型FDの展開のための学生中心組織は様々な形態・名称となっているが、本学では2011年の開始時からUD Matesという名称を用い、教育推進センター副センター長の橋本の授業受講者を中心に自主的な参加者を募り、日常的に活動を継続している。(UD: University Development)

ここでは大型イベントとして定着しているUD Talkの今年度分のみについて概略を記すが、他にも、例えば、学長・副学長との対話、高校生との対話、自主講座、他大学の類似組織との公的交流など、年度により様々な活動を試行実施している。

【第9回UD Talk】

開催日時 令和元年5月18日(土) 13:00～17:00

トークテーマ 大学生生活のすゝめ

参加者(26名)

本学学生 17名(人文、人発、経済、理、工、都市、薬、芸文)

本学教職員 2名(経済、教育推進センター)

他大学学生 4名(富山県立大、金沢星稜大、新潟産業大)

他大学教職員 2名(金沢星稜大)

市民 1名(高校教諭)

《概要》

5人ずつのグループに分かれ、大谷翔平の「目標達成シート」をヒントに、約3時間で、充実した大学生活を送るにはどうすればよいかをじっくり話し合い、その成果を共有した。比較的小規模な開催ながら活発な議論ができた。

【第10回UD Talk】

開催日時 令和元年 11 月 23 日(祝) 11:00~17:00

トークテーマ 授業改善のすゝめ

参加者(57名)

本学学生 38名(人文, 人発, 経済, 理, 工, 都市)

本学教職員 9名(経済, 医, 教養教育院, 研究推進センター, 教育推進センター)

他大学学生 2名(東京大, 岡山大)

他大学教職員 4名(金沢大, 福井大, 文京学院大, 大手前学院大)

市民 4名(大学教員OB, 高校教諭, 民間企業, オープンクラス生)

《概要》

まず, 一部の積極的参加者による第1部としてランチミーティングを行い, 大学教育における様々な問題点を抽出し, 本編にあたる第2部の参考資料とした。本編は6人前後の10グループに分かれ, 大学教育の改善について, 約3時間をかけて, ホワイトボードや模造紙などを活用しながら, テーマを絞って話し合い, その成果を「要望書」という形でまとめた。その後, その成果について全体で共有する場を設け, 活発な討議を行った。

開催後, 企画・運営にあたったUD Mates が集約した「要望書の要約」を次ページに, また, 各グループの要望書をその後に採録してある。



《第 10 回UD Talk における要望書の要約》(UD Mates として集約)

＜地域 COC 科目の改善＞

- ・全ての科目が COC に関係しているのか？
→基礎編や発展編の 2 種類に分けて、学生に選択してもらう
- ・動機づけ（シラバス）の工夫もいる

＜英語の授業の見直し＞

- ・教員によって方法や難易度の違いが生じている
→一貫性を生み、英語力の向上を計る授業を行う
- ・実用的な英語能力を育む学習の提供及び、詳細な授業計画の提出

＜全般的な授業における改善＞

- ・シラバスと実際の授業内容の不一致
→シラバスがより正確になるシステムを作る（レビューなど）
- ・取りたい授業が取れない現状がある
→授業の開講頻度を増やす、向上させたいスキルに合わせた授業選択
- ・授業方法の改善（板書の字、参考にならないシラバス、Moodle やヘルンが適切に運用されていない…）
- ・教員側の意識の改善
→実際にどのように改善するかを掲示、アンケートに時間をかけて回答できるように回収ボックスを設置
- ・学習の主体者は学生
→アンケートの要望を実際に取り入れる、成績評価の仕方を明確に、学部混合でつなげる仕組みを
- ・一方通行の授業、意味のないグループワーク
→予習やフィードバック、学生への直接のコメントや質問対応の実施（双方向のやり取り）
⇒学生中心への工夫へ
- ・学生と教員のコミュニケーションを増やす
→チャット機能の導入、アクティブラーニングの実施

＜学習環境における改善＞

- ・全学部で 24 時間、学部棟でも利用できるように
- ・同一名称科目の授業間で内容や評価の差が無いように
- ・必要な教科書が「安価」で入手できるように
- ・出席の扱いを統一・明示する
- ・昼食時の混雑の緩和

令和元年十一月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

授業内容(地域○○○科目)

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「地域○○○科目の授業内容の改善」

理由

本当に全ての科目が○○○に関係しているのだから、

他界の情報も共有、交換できる貴重な場
(地元でも役立つ)

地域との交流の場

詳細

・2つに分ける

・基礎の発展の2段階の授業

学生に説明してもらう

幼微づけによって変化

↓ツイン入の内容になる。

令和元年十一月二十三日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

教員への授業への取組と熱意

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「学生と教員の双方の意見により行われる
アウツリプアイン」

理由

- ・形だけの意味のないグループワークが行われる。
- ・シラバスと実際の授業内容・評価が異なっている。
- ・授業の内容が教員中心で双方向である。

詳細

教員中心から学生中心への変

予習やフィードバックを心がける

ミニツペーパーも利用した 学生への直接のコメントや質問対応
の実施

令和元年十二月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

授業選択

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対処をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「関心に沿った授業選択制度の導入」

理由

取りたい授業が取れず、取りたくない授業を取らざるをえないことが多いためから。

詳細

それぞれの授業の開講頻度を増やす。
 ↓授業が重なることが減る
 教養教育科目のクラス割となっている授業について
 1年後期からシラバスを見て選択できるように
 する(例:英語、第二外国語)
 自分の向上させたいスキルに合わせた授業選択。

令和元年十二月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

シラバス

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「シラバスの内容改善」

理由

問題点として、

- ・ シラバスと授業内容の不一致
- ・ 教員に関する内容の不足

が挙げられるため。

詳細

- ・ シラバスを書く時期を各学期の直前までとし、より実際の内容に近い記述にする。
- ・ シラバスがより正確になるシステムを考える。
(例としてシゴニーシステム)
- ・ 教員の情報のページを見やすい場所になくが、シラバスからリンクをはる。

令和元年十一月二十三日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

学生と教員の交流

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対処をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「学生と教員のコミュニケーションの機会を増やすこと」

理由

授業内容の理解を深めるため

詳細

- ① 質問用紙・メモカードの導入
- ② チャット機能の全面導入(スラボアプリなど)
- ③ 授業の中で必ずフィードバック・ラーニングの時間を設ける

令和元年十一月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

言語系の授業

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「英語の授業内容の見直し」

理由

英語の授業において、教員へにより、方法や難易度の差がある。そこで、内容の見直しにより、授業の一貫性を生み、英語力の向上を計る授業を行えるようにするため。

詳細

- ① 英会話や英語の論文がとる用「実用的な英語能力を身に学ぶ学習の導入」。
- ② 詳細で具体的な授業計画の提出と学生への採用して授業評価。

令和元年十一月二十三日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

教員への教育方法

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対処をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「 授業方法の改善 」

理由

一部の教員の授業方法について問題があり、
学習意欲の妨げになっているから。

詳細

- ① 教員が授業の時間帯以外おらず連絡が取れない。
- ② 板書の字が小さい、汚い、声が小さい。
- ③ シラバスが参考にならない。
- ④ LMS(Moodle)やヘルンシステムが適切に運用されていない。

※「出席」と「中間・期末テスト」の関係、ウエイト等については
まだ見がまともでなかった。

令和元年十一月二十三日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

学生生活

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「学修しやすい環境づくり」

理由

学生も「学びやすさ」を高めることが出来る
 カリキュラムは工夫が多々あるから

詳細

- ① 全学部が24時間、学習機を学修利用できるように
- ② 同一科目別実施の授業間で、内容・評価の差が小さいように
- ③ 必要な教科書が、安価に入手できるように
- ④ 出席の扱いを統一・明示する
- ⑤ 昼食時の混雑の緩和

令和元年十二月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

授業のありがた

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対応をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「教員の授業に対する意識の改善」

理由

生徒の学びに対し、教員側の姿勢が十分なものでないから。

詳細

- ① 半期ごに行われるアンケートを基に、どのように改善するのかを指示。
- ② 生徒が時間をかけて回答できるような回収ボックスの設置。またはカードでの実施。

令和元年十二月二十二日

第十回 UD Talk 「授業改善のすゝめ」

授業

に関する要望書

次の事柄につきまして、万全な対処をしていただきたく、お願い申し上げます。

記

「学びたいことを明確に示したシラバス」

理由

学習の主体者は学生だ

詳細

- ① シラバス通りに授業を行う
- ② 授業アンケートの要望を、実際に授業に取り入れる。
- ③ 成績評価の仕方も明確に。
- ④ 全学部に通じる担任制度・たて割りのグループ

学部混合でつながれるように。

4. 成績評価適正化検討 WG 答申

答 申

富山大学における成績評価の適正化に向けて

令和元年 12 月

成績評価適正化検討ワーキンググループ

1. はじめに

本答申は、教育推進センター長から委嘱を受け令和元年7月に設置された成績評価適正化検討ワーキンググループ(以下、「適正化WG」という。)が、富山大学における成績評価の適正化に向け、鋭意検討を重ねてまとめたものである。

適正化WGは、以下の4名の委員で構成され、全学的見地から、入念な検討を行った。

教育推進センター 橋本 勝 教授(座長)

教養教育院 谷井 一郎 教授

教養教育院 名執 基樹 教授

人間発達科学部 山口 範和 准教授

中教審の『学士課程答申』(2008)、『質的転換答申』(2012)等を契機に大学教育は大きな変革期の中にある。法人評価に向けた中期目標・計画の策定・実施や機関別認証評価においても教育機関としての大学の組織的対応が社会的責務として求められている。とりわけ、近年、高等教育の無償化も絡んで、成績評価の厳格化・適正化がクローズアップされてきた。従来、ともすれば、教員個々の判断・責任に委ねられがちだった成績評価は、例えばGPAの積極的活用を学生に大きな不公平感を伴わずに進めるという観点等からも、きちんとした組織対応が必要になってきた。

こうした背景から、既に本学においては、本年3月4日には、『各部局における成績評価分布の目標』を教育・学生支援機構として決定し、成績評価割合の部局別(場合によっては学科別)目標値を明示して、本年度前期分の成績データについての検証もスタートしている。

今後の課題としては、いかに評価プロセスを適正化するかということになるが、これに向けての手段としては、各種答申や専門書等では「ルーブリック」の導入・活用が有効策として紹介されることが多い。但し、ルーブリックに関しては、教員負担や科目特性による向き・不向き等の問題点もあり、全学での一斉導入は困難である。

そこで、適正化WGとしては、検討の結果、富山大学版『成績評価のためのガイドライン』を示した上で、それに沿うことを前提に、「ルーブリック評価と機械的相対評価を選択利用する方式」を提案し、できるだけ無理なく全学的な成績評価適正化に向かう第一歩を踏み出すための富山大学独自の方式を考案したものである。

本答申を受け、関係諸機関での活発な議論を期待したい。

2. 適正な成績評価とは

2.1 適正性の3つの基準

教育は創造的な営為であるとともに公的な営為であり、とりわけ、成績評価には強い公共性が求められる。というのも、成績は、個々の学生の学修の証であることはもちろん、大学が自らの教育面のミッションを着実に果たしていることの証であり、学生が学修を計画し見直す際の基準ともなるものだからである。社会に対しても学修者に対しても広く責任を負う営為であり、恣意的な判断に基づく偏った評価、教育目標に合致しない評価方法、学修内容との対応関係が不透明な評価基準の利用がないよう、大学は努めなければならない。

適正な成績評価とは、これらの公的な側面において十分な管理責任が果たしているもののこと、すなわち、評価に偏りが無いという点で公平で、学修目標（ディプロマポリシー、一般学修目標、到達目標）との合致という点で妥当性を持ち、かつ、説明可能な構造化された基準に基づくという点で透明性が保たれているものを言う。

したがって、富山大学では、

- 1) 評価内容の公平性、
- 2) 評価方法の妥当性、
- 3) 評価基準の透明性、

この3点を満たすものを適正な成績評価と認め、その維持、管理に努めるものとする。

2.2 適正な成績評価の維持と管理に向けて

この3つの適正性の基準は、それぞれ異なる性質を持つ。

公平性の維持という点では、学生間、授業間での成績評価の偏りをなくすることが重要であり、成績評価のための共通の指針の策定や、組織的な事後点検のための基準づくりなどが必要となる。

これに対し、妥当性の観点からは、教科内容の多様性（講義科目か演習科目かなど）や対象学生の偏り（到達度別授業の場合など）の考慮、教員の授業改善努力に基づく教育成果の差異（教員間での成績分布の一定のゆらぎ）についての配慮も求められる。このため、教科の性質に即した公平性の指針の多様化、公平性の判断指標の弾力化もまた必要となる。公平性も妥当性も教育内容に即して判断されるべきものであることから、改善状況に沿った、持続的な指針・教育実践間のフィードバックが必要となる。

一方、透明性は、より技術的な課題であり、公平性、妥当性を検証可能なものとするために最初に取り組まなければならない課題でもある。加えて、ルーブリックやポートフォリオなどをめぐる近年の他大学での取り組みに見られるように、そのノウハウは試行錯誤を通して蓄積可能でもある。

富山大学としては、成績評価の透明性を図る取り組みを喫緊の課題として行い、その中で公平性と妥当性の達成状況と課題点を明らかにするという方向性が望ましい。持続的な教育改善のサイクルに乗せてこそ、公平性、妥当性、透明性が担保される公正な成績管理が実現できる。透明性の確保は、そのための最初の条件であり、個々の教員の多様な取り組みを、私的に閉じたものから公的な開かれたものに置き換える、教育運営の基盤づくりに関わる課題であるからである。評価内容の公平性、評価方法の妥当性をめぐる個々の教員の取り組みも、評価基準の透明性を意識してゆく中で、より深化されてゆくものと期待できる。

3. 富山大学版『成績評価の方法と基準』のガイドライン

3.1 全体に関する事柄

【単位の実質化と適正な成績評価】

本学の学則では、1単位の授業時間を45時間の学修を必要とすると定めており、講義では1時間の授業時間に対し教室外学修時間を2時間、演習では2時間の授業時間に対し1時間を行わせることが前提であり、その学修に対して適正な評価が求められる。従って、本学のシラバスでは定期試験以外に課題やレポート、授業での発表等の多様な評価指標により成績評価する旨を予め公表することとしている。これらを背景に、定期試験以外の評価項目についても適正に評価することが求められている。

各授業科目はディプロマポリシー、カリキュラムポリシーに沿って展開されているが、本学では、各授業科目間や部局において達成目標や成績評価基準の擦り合わせが十分に行われているとは言い難く、成績評価分布にあっても教員の裁量に任せている状況がまだまだ散見される。カリキュラム全体、各授業科目において適切な達成目標・難易度が保たれているのか、学生の知的好奇心に応え、本学の教育の更なる向上を図るために、常にモニタリングをしながら微調整を行うと共に、教員個々が「富山大学のGPA制度に関する規則」「各部局における成績評価分布の目標」の趣旨を理解することが重要である。

一方で令和2年度から高等教育の修学支援制度（高等教育の無償化）が実施され、成績評価の結果により奨学金の停止につながることから、大学は、選択する授業科目間の成績評価の差異や成績評価分布も含め、より公平・公正な成績評価を行う必要がある。

【評価視点の複数化】

評価には、コースの最後に学修目標がどれくらい達成できたかを評価する総括的評価と、コース途中に学修者の学修状況をモニターし、学修を促すために行われる形成的評価がある。形成的評価方法は、学生の学修に取り組む意欲を刺激し、課題への関心を深めさせる効果がある。また、本学のディプロマポリシーに掲げられている問題発見・解決力、組織や社会の一員として貢献する能力やコミュニケーション能力は総括的評価だけでは評価できないものである。したがって、評価はこの2つを組み合わせる行うのが望ましい。

【絶対評価と相対評価について】

絶対評価では、学生が身に付けてほしい知識・能力・態度を「到達目標」として定め、その目標を学生がどの程度達成できたかで、彼らの成績を判断することになる。本学において、成績に関しては主に絶対評価に基づいて評価を行うこととする。絶対評価を行う場合は、評価基準（難易度）の妥当性が問題になる。第三者から観て、その科目の到

達目標および評価基準の設定が、ディプロマポリシーに沿っているかを検討する必要がある。また、評価基準の透明性の観点から、その設定の根拠や理由を適切に説明できなければならない。

相対評価は、科目間の評価結果を統一できるという特徴がある。しかし、その反面、学修者側個人の能力の多様性（学力差）を考慮していないので、真に公平な評価にはならず、合理性を欠いた評価になるケースもある。

3.2 科目ごとのガイドライン

（１）一般講義科目

富山大学では適正な成績評価をするために、評価内容の公平性、評価方法の妥当性、評価基準の透明性の３つの適正性の基準を満たすように、授業設計と成績評価を行うものとする。評価内容の公平性の観点から、成績評価は主観によらず、できるだけ客観性を持たせなければならない。特に、レポートの評価、プレゼンテーション等のパフォーマンスの評価においては、内容の優劣を問わない評価や主観のみに基づく評価はできるだけ避けるべきである。評価を客観化する方法としてルーブリックが推奨される。ルーブリックを用いない場合は、第三者に評価が主観によらずに公平に行われたことが説明できなければならない。到達目標の設定は教員の裁量のみによるものではなく、学部全体の科目の中で位置づけられるべきものである。評価方法の妥当性の観点からは、期末試験だけで成績評価をするのではなく、コース途中の評価を行うなど、できるだけ多面的な方法で、知識だけでなく授業外学修における学修態度や意欲などの多面的・形成的評価も行うことが望ましい。評価基準の透明性を保証するために、評価基準はできるだけ具体的にシラバスにおいて公開することとする。

本学では、絶対評価による成績評価基準に基づいて、成績は「秀（S）」「優（A）」「良（B）」「可（C）」「不可（D）」をつける。ただし、90点以上を修めている学生の割合が学部等で定めた上限を超えた場合には、成績評価基準における秀の基準「到達目標を達成し、極めて優秀な成績を修めている」を勘案し、秀（S）の成績について「各部局における成績評価分布の目標」に近づけるよう、授業の難易度、評価指標、評価基準の在り方も含め各授業科目において工夫する。例えば、クラス内で極めて優秀な成績を収めた最上位層の学生に限定するように相対評価による補正を行うことを検討する。

尚、同じ名称の授業科目で担当者が異なる場合は、たとえ授業内容が異なっても、科目間で難易度に大きな差が生じないように、担当者間で摺り合わせを検討することが求められる。

（２）講義科目以外の科目

講義科目以外の演習科目（外国語系、情報処理系科目）および実技・実験系科目（スポーツ、実験科目）でも、一般講義科目の項で述べたように３つの適正性の基準を満たすことが求められる。授業科目の特性により期末試験等での評価が難しいことから、ルーブリックの活用等により形成的評価を取り入れることが望ましい。また、担当者によって成績評価分布に大きな差があることは公平性の観点から問題があるので、担当者間で摺り合わせを検討することが求められる。「秀（Ｓ）」の割合については、一般講義科目ほどの厳格性は求めている。しかし、「秀（Ｓ）」の割合が極端に多いことは、評価の妥当性・公平性の観点から相応しいとは言えない。できるだけ、各部局で定めた範囲に近づくように評価方法を見直すことが望ましい。

（３）少人数科目

ゼミなどの少人数クラスでは、成績評価分布に偏りが生じることはやむを得ない。その中でも「秀（Ｓ）」は相対評価により上位の学生だけに限り、安易に「秀（Ｓ）」を与えないような配慮が求められる。尚、初年次ゼミなど、達成目標が一定水準以上を満たすことを目的とする授業科目の場合は、「合」「否」による成績評価とすることも検討する。

3.3. 今後の課題

本学の「富山大学のGPA制度に関する規則」「各部局における成績評価分布の目標」を勘案し、各授業科目の成績分布が各部局の目標に近づくよう、授業の難易度、評価指標、評価基準の在り方も含め、公平な評価に向け組織的に点検・調整を行う体制を整備する。

また、成績評価は素点で行うこととし、「各部局における成績評価分布の目標」と大きく外れる場合には素点を機械的に補正し秀の割合を適正化すること、或いは秀の成績のみ相対評価とし、クラス内で上位の成績を収めた学生に与えること、秀の評価基準を「到達目標を超えている」に見直すこと等も検討する。【参考：他大学の評価基準の秀の欄を参照】

【補足】

学習効果を高める、あるいは、教育内容・方法を調整するために、学期中に行った中間試験・中間レポート等はできるだけ授業時に学生に返却するか、あるいは、学生への開示を試み、学期途中のフィードバックを実施することが望ましい。また、期末試験・期末レポート等も、可能であれば、学生への返却あるいは開示を試みるべきである。尚、保有文書の成績判定資料は、適切に管理し、返却を行わなかった分については、法規に基づく本学の基準で、３年間の保存が義務づけられている。

【参考】

本学の成績評価基準（富山大学G P A制度に関する規則）

成績グレード	秀（S）	優（A）	良（B）	可（C）	不可（D）
評価点	100-90	89-80	79-70	69-60	59-0
基準	到達目標を達成し、極めて優秀な成績を修めている	到達目標を達成し、優秀な成績を修めている	到達目標を達成し、良好な成績を修めている	到達目標を達成している	到達目標を達成していない

新潟大学の成績評価基準（H30年度理学部履修の手引）

成績グレード	秀	優	良	可	不可
評価点	100-90	89-80	79-70	69-60	59-0
基準	<u>授業科目の目標を超えている。</u>	授業科目の目標を十分達成している。	授業科目の目標から考えると一定の水準に達している。	授業科目の目標から考えると最低限を満たしている。	授業科目の目標に達していない。

横浜国立大学の成績評価基準（2017教育学部履修手引）

成績グレード	秀	優	良	可	不可
評価点	100-90	89-80	79-70	69-60	59-0
基準	<u>履修目標を超えたレベルを達成している</u>	履修目標を達成している	履修目標と到達目標の間にあるレベルを達成している	到達目標を達成している	到達目標を達成していない

4. 成績評価におけるルーブリックの利用

4. 1 ルーブリックについて

評価用ルーブリックは、評価指標（到達目標）と評価指標に即した評価基準のマトリックスで構成された評点表である（表 1. を参照）。評価指標と評価基準に囲まれたセルには、それぞれの評価指標ごとに、どの程度達成できれば、どの程度の評点を与えるのかのパフォーマンスの特徴が記述されている。評価指標および評価基準は、学修課題を踏まえて適切な設計が求められる。

表 1. ルーブリックの構成例

評価指標	指標の内容	評価基準				
		Lv. 1（高）	Lv. 2	Lv. 3	Lv. 4	Lv. 5（低）
指標 A	指標 A の説明	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
指標 B	指標 B の説明	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
指標 C	指標 C の説明	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点

ルーブリックは、レポート課題、プレゼンテーション、実技などパフォーマンスを単純に数値化することが困難なものを採点する際に有効な評価方法である。尚、計算をしたり知識の再現を求めたりするような試験については、元々数値化することが容易であるため、わざわざルーブリックを用いる必要はない。

4. 2. ルーブリック活用のメリットとデメリット

ルーブリックを利用する利点を評価者視点と被評価者視点に分けて述べる。

評価者（教員）にとって、ルーブリックを利用する利点としては、（1）評価時間を短縮できる、（2）成績評価の一貫性、客観性を担保できる、（3）他者（受講者や同僚）とのコミュニケーションを促進する、（4）自身の教育活動に対するフィードバックを得る、（5）授業改善に役立つ、（6）受講者の学修状況を把握することが出来る、（7）複数の評価指標による多面的な評価を可能にする、などが挙げられる。（2）は評価の透明性、（3）～（7）は妥当性の確保に有益である。また、適切に設計されたルーブリックは評価の公平性を確保する上でも有益となる。

一方、被評価者（学生）にとって、ルーブリックを利用する（される）利点としては、（1）どのように評価されているのかが明確である、（2）授業への参画・関与を促す、（3）ルーブリックを用いて自己評価をすることで受講者の自己改善を助ける、などが挙げられる。レポート課題や実技などがどのように採点されるのかは、被評価者の立場

では非常に気になるところだろうが、事前にルーブリックを提示することでどのように授業や課題に取り組んだり関与したりするべきかが明確になる。さらに、事後に採点済みのルーブリックをフィードバックすることで、改善点が明らかとなることで、高い学修効果が期待される。

次に、ルーブリックを用いることの留意点や欠点を述べる。(1) ルーブリックを用いれば素早くかつ透明性を確保した評価を行うことが可能であるが、そのためにはルーブリックを作成しなければならないので、ルーブリックを作成するという最初の負担がある。ルーブリックは一度作成したら終わりではなく微調整が必要である。自らの科目の採点に適したルーブリックに落ち着くまでに最低でも3年程度の微調整が必要だと言われている。(2) パフォーマンスという「全体」が評価項目という「部分」に還元できるのかという問題点がある。これまでの採点の感覚だと全体としてはパッとしないものが、ルーブリックに沿って採点すると高評価となるようなことが起こりうる。(3) 学生の主体性や自律性を奪うかも知れない点も指摘されている。事前に提示されるルーブリックに沿って評価するということは、言い換えればルーブリックに書かれている達成目標をクリアするための学修だけをすれば良い評価となる。受講者は「良い評価になるにはどうすればよいのか」という効率だけを求めて学修をし、本質的な部分が蔑ろになる可能性がある。

4. 3. 適正な成績評価へ向けたルーブリックの利用

4. 2. で述べたように、ルーブリックを用いる評価は完全ではないものの、適切に設計されたルーブリックの利用は、評価の公平性、妥当性、透明性を確保する上で有益な方法の一つである。また、4. 1. でも述べたようにルーブリックはパフォーマンスを単純に数値化することが困難なものを数値化する一つの方法である為、従来は一部の講義では困難であった成績の入力を素点で行うことを可能にする。ついては、評価者には適正な成績評価を行う方法の一つとして、ルーブリックの利用を検討して頂きたい。尚、講義や科目の特性にあわせて、一部の課題や試験の採点にのみルーブリックを利用する部分的な利用についても検討の余地はあるだろう。

5. 2つの提案：ルーブリック評価・機械的相対評価化の併用とGPA得点の一部変更

前節で述べたように、ルーブリックを用いて成績評価の適正化を進めることは合理的な方策であり望ましい面を持つ反面、本学のように様々な分野を持つ中・大規模な大学では全学的一斉導入はかなりの困難を伴う。

そこで、適正化WGとしては、できるだけ無理なく全学的な成績適正化に向かう第一歩を踏み出せるよう、次の2つの提案をしたい。2)は他大学でも見られるが、1)は本学独自のものである。

1) ルーブリック評価・機械的相対評価化の併用

2) GPA得点の一部変更(S評価を4点ではなく3.5点とする)

1)は成績評価に関し、3節で提示した『成績評価の方法と基準』のガイドラインをよく理解した上で、次の3つのうちいずれかを採用してもらう方策である。

A：科目特性等に十分配慮したルーブリックを予め作成し、実際の成績評価はそれに則して行う

B：多様な成績評価の一部にルーブリックを採用する

C：従来通りの成績評価を踏襲した上で、報告された成績のうち「成績評価割合の学部別(学科別)目標値」に相当する部分を事務的に機械的換算する成績の一部相対化を行う。尚、これを円滑に行うため、これまで評語のみにて成績評価をしていた科目も、原則として点数によって成績評価を行うこととする。

2)は成績評価の偏りによる弊害の是正策であり、1)とは別に採用することもできるが、これだけでは成績評価の適正化の決定策にはなりえない。今回、1)を採用する場合の補完的是正策として合わせて採用することを提案する。

本来、秀(S)評価は、優(A)評価の中でも特に優れたものという意味合いのものであり、GPA算定においても、その意味に照らせば、優(A)と良(B)、あるいは良(B)と可(C)との差に比べ、質的な違いがあると考えられる。こうした判断に立って、その差を考慮した換算点を用いている大学も少なくない。

特に、秀(S)評価に関する成績評価のありようを中心に適正化に取り組む本学の場合は、1つの方策として有効性を持つと考えられる。

尚、1)の採用にあたっては、事務的な労力、費用がかかるため、事務的な検討が必要となる。2)に関してはわずかなプログラム修正なので追加的なコストはあまりないと考えられる。

また、1)でA、Bを採用する教員に向けての全学的研修を数次に分けて行う必要もあることも併せて提案したい。

5. 全学におけるアンケート結果

DP達成度調査実施

調査の目的

入学時からこれまでの教育成果を検証するため、全学部の学生（最終学年を除く。）に対し、学年末において裏面の項目についての調査を実施することになりました。

これは、皆さんが、DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与方針）に掲げる能力をどの程度身に付けることができたかを調査するためのものです。

皆さんはこの調査への回答を通して、自ら評価し、これまでの本学での学修を振り返って、今後の計画的な履修を行ってもらいたいと思います。

なお、皆さんからの回答は、学部・学科・学年毎に集計を行い、能力達成状況の把握を行うとともに、カリキュラム改善等に活用します。

回答方法

本学の学習支援システム「Moodle」から回答してください。

（本学トップページ）→「在学生・教職員の方」→「Moodle」

<https://lms.u-toyama.ac.jp/login/index.php> （学外からもアクセス可）

ログイン後、「平成 30 年度 DP 達成度調査」をクリックし、回答。

※ログイン時のユーザ名及びパスワードは、PC ログインや E-mail 利用時と同様です。

スマホからの回答は
こちらからお願いします



提出期限

平成31年 月 日17:00まで

留意事項

最終学年以外は、原則として全員が回答することとしますので調査への御協力をお願いします。

なお、未回答の方については、提出期限後に指導教員等を通じて調査回答依頼を行う予定です。

【お問い合わせ】

所属学部の教務担当または学務部学務課学務企画チーム

E-mail: g-kikaku@adm.u-toyama.ac.jp

※裏面は参考として回答項目を掲載

入学からこれまでの教育によって、DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与方針）に掲げる以下の能力をどの程度身に付けることができたのかを回答してください。

- 1) 課題や問題を自ら解決する能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 2) 組織や社会の一員として責任を持って行動する能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 3) 他者と協力し合うコミュニケーション能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 5) 母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 7) 教養教育等による幅広い知識
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 8) 専門教育による深い専門知識・技能
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 10) 地域を志向する意識
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 11) 本学での学生生活で得られたこと、あるいは得られなかったことについて、思うところがあれば自由にお書きください。

御回答ありがとうございました。

平成 30 年度 D P 達成度調査実施結果

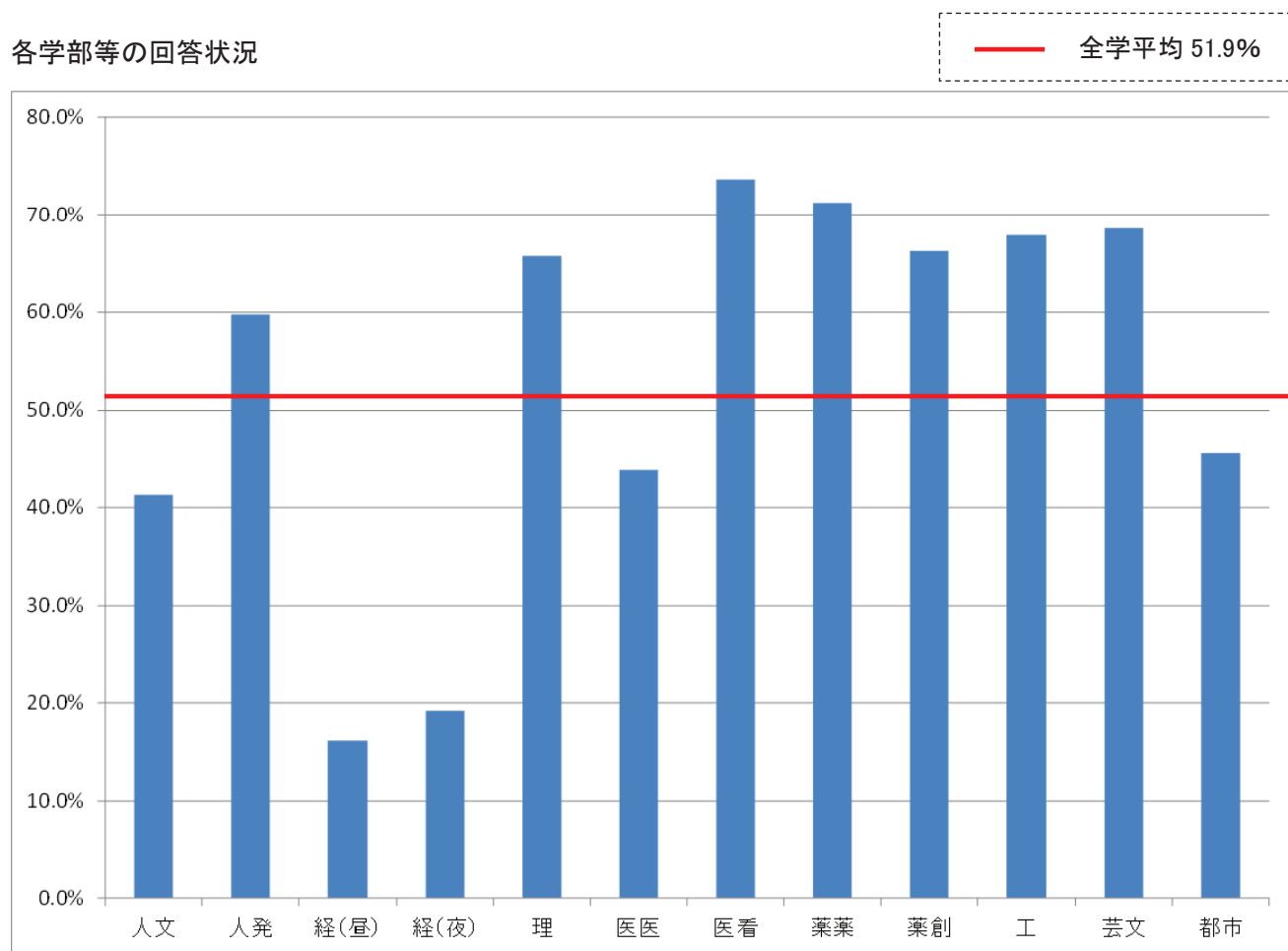
実施時期：平成 31 年 1 月下旬～4 月末（※一部の学部・学科においては、5 月中旬に実施）

対象学年：最終学年を除く全学年（対象学生数：5927 人）

実施方法：Moodle による回答

回答学生数：3077 人（回答率 51.9%）

各学部等の回答状況



2018年度DP達成度調査回答状況調

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率
人文学部	人文学科	1	178	555	138	229	77.5%	41.3%
人文学部	人文学科	2	183		46		25.1%	
人文学部	人文学科	3	194		45		23.2%	
人間発達科学部	発達教育学科	1	85	527	51	315	60.0%	59.8%
人間発達科学部	発達教育学科	2	83		59		71.1%	
人間発達科学部	発達教育学科	3	81		42		51.9%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	1	93		53		57.0%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	2	94		76		80.9%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	3	91		34		37.4%	
経済学部(昼間主)	経済学科	1	128	1022	31	166	24.2%	16.2%
経済学部(昼間主)	経済学科	2	139		8		5.8%	
経済学部(昼間主)	経済学科	3	135		10		7.4%	
経済学部(昼間主)	経営学科	1	100		25		25.0%	
経済学部(昼間主)	経営学科	2	116		31		26.7%	
経済学部(昼間主)	経営学科	3	119		17		14.3%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	1	87		17		19.5%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	2	96		20		20.8%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	3	102		7		6.9%	
経済学部(夜間主)	経済学科	1	11	151		29	0.0%	19.2%
経済学部(夜間主)	経済学科	2	20		4		20.0%	
経済学部(夜間主)	経済学科	3	22		4		18.2%	
経済学部(夜間主)	経営学科	1	10		5		50.0%	
経済学部(夜間主)	経営学科	2	18		6		33.3%	
経済学部(夜間主)	経営学科	3	19		3		15.8%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	1	10		3		30.0%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	2	21		1		4.8%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	3	20		3		15.0%	
理学部	数学科	1	50	698	34	459	68.0%	65.8%
理学部	数学科	2	52		26		50.0%	
理学部	数学科	3	59		27		45.8%	
理学部	物理学科	1	42		26		61.9%	
理学部	物理学科	2	40		23		57.5%	
理学部	物理学科	3	43		25		58.1%	
理学部	化学科	1	37		25		67.6%	
理学部	化学科	2	33		26		78.8%	
理学部	化学科	3	40		26		65.0%	
理学部	生物学科	1	37		27		73.0%	
理学部	生物学科	2	36		32		88.9%	
理学部	生物学科	3	42		33		78.6%	
理学部	地球科学科	2	40		22		55.0%	
理学部	地球科学科	3	46		28		60.9%	
理学部	生物圏環境科学科	1	33		24		72.7%	
理学部	生物圏環境科学科	2	32		22		68.8%	
理学部	生物圏環境科学科	3	36		33		91.7%	
医学部	医学科	1	113	544	70	239	61.9%	43.9%
医学部	医学科	2	109		80		73.4%	
医学部	医学科	3	105		55		52.4%	
医学部	医学科	4	105		16		15.2%	
医学部	医学科	5	112		18		16.1%	
医学部	看護学科	1	81	242	56	178	69.1%	73.6%
医学部	看護学科	2	83		60		72.3%	
医学部	看護学科	3	78		62		79.5%	
薬学部	薬学科	1	63	285	51	203	81.0%	71.2%
薬学部	薬学科	2	54		32		59.3%	
薬学部	薬学科	3	57		39		68.4%	
薬学部	薬学科	4	56		40		71.4%	
薬学部	薬学科	5	55		41		74.5%	

2018年度DP達成度調査回答状況調

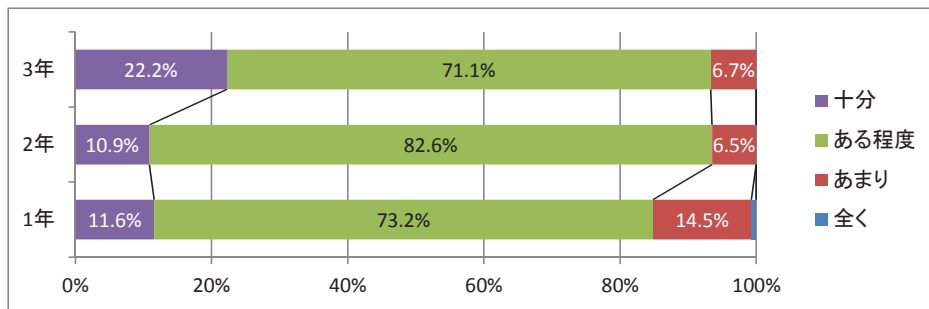
確定値

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率
薬学部	創薬科学科	1	54	160	25	106	46.3%	66.3%
薬学部	創薬科学科	2	55		37		67.3%	
薬学部	創薬科学科	3	51		44		86.3%	
工学部	電気電子システム工学科	2	96	1252	63	850	65.6%	67.9%
工学部	電気電子システム工学科	3	99		82		82.8%	
工学部	知能情報工学科	2	79		68		86.1%	
工学部	知能情報工学科	3	80		54		67.5%	
工学部	機械知能システム工学科	2	97		73		75.3%	
工学部	機械知能システム工学科	3	111		66		59.5%	
工学部	生命工学科	1	2				0.0%	
工学部	生命工学科	2	51		30		58.8%	
工学部	生命工学科	3	54		30		55.6%	
工学部	環境応用化学科	2	55		50		90.9%	
工学部	環境応用化学科	3	48		42		87.5%	
工学部	材料機能工学科	1	3		2		66.7%	
工学部	材料機能工学科	2	53		33		62.3%	
工学部	材料機能工学科	3	57		38		66.7%	
工学部	工学科	1	367		219		59.7%	
芸術文化学部	芸術文化学科	1	114	344	105	236	92.1%	68.6%
芸術文化学部	芸術文化学科	2	113		92		81.4%	
芸術文化学部	芸術文化学科	3	117		39		33.3%	
都市デザイン学部	地球システム科学科	1	41	147	17	67	41.5%	45.6%
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	1	42		14		33.3%	
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	1	64		36		56.3%	
				5927		3077		51.9%
文系				2599		975		37.5%
理系				3328		2102		63.2%

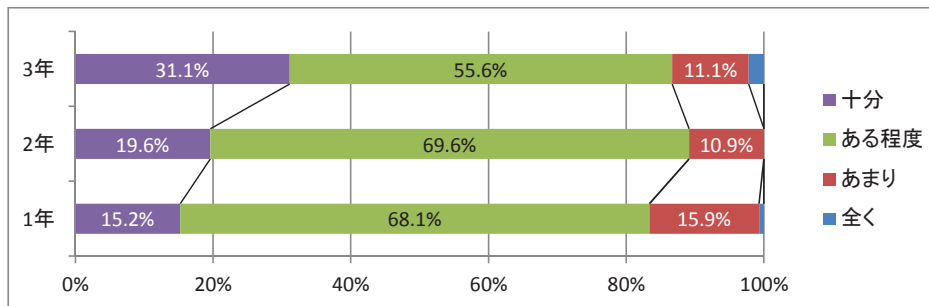
※学生数(休学者を除く。), 回答数は, H30年度における学年を基に集計。

DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

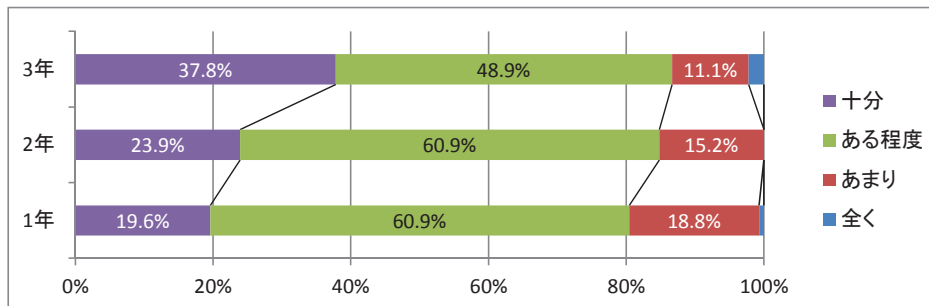
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



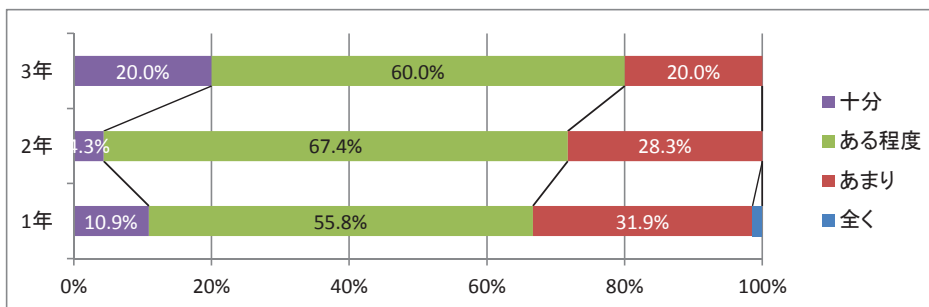
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



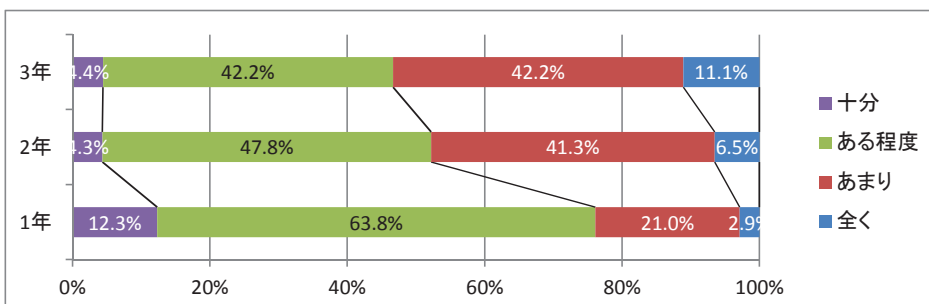
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



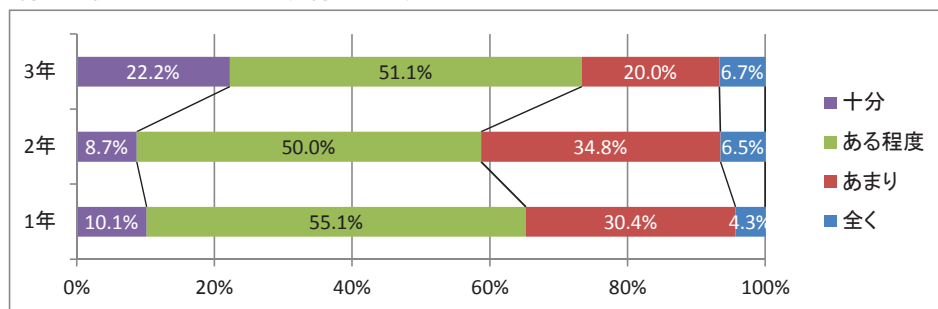
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



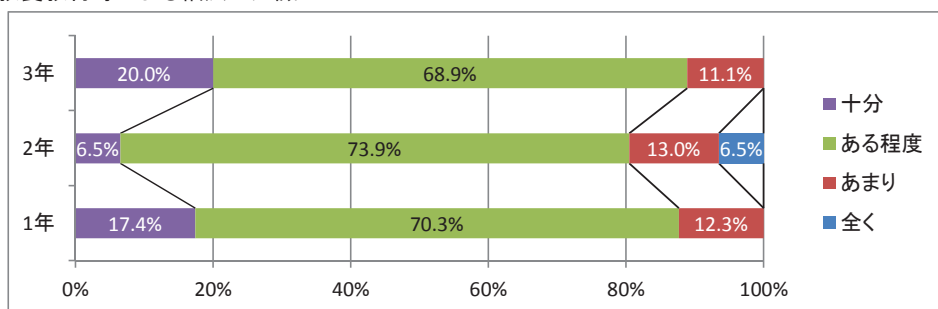
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



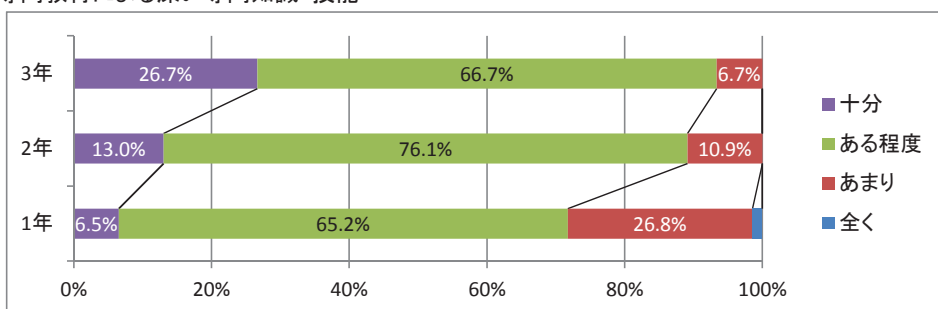
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



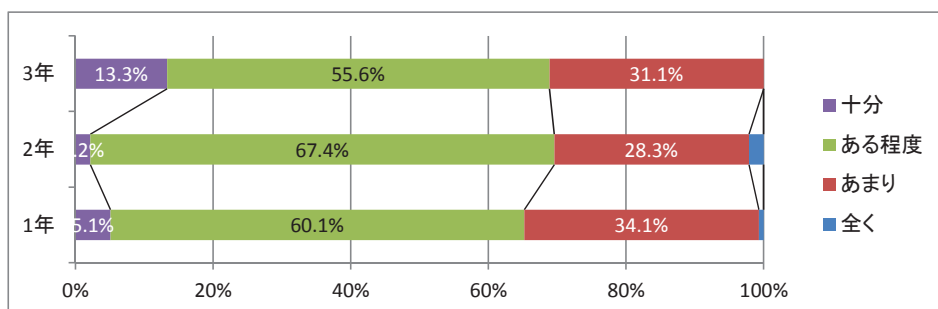
7) 教養教育等による幅広い知識



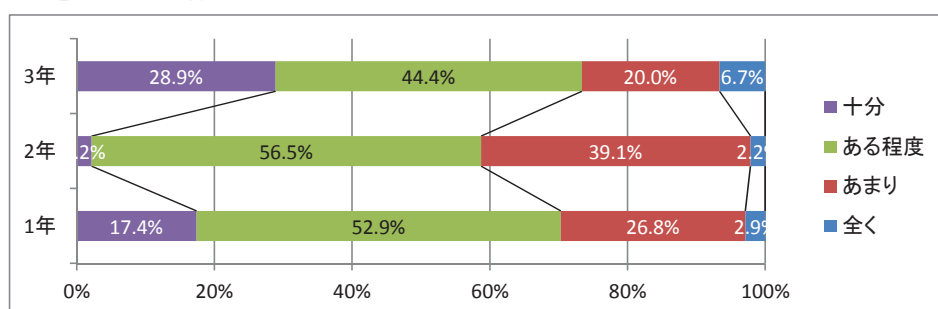
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

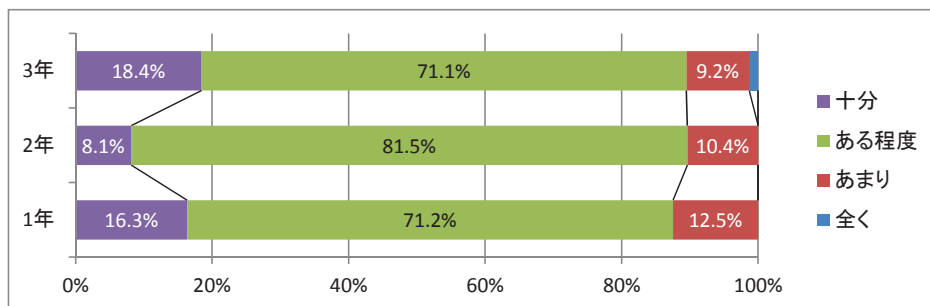


10) 地域を志向する意識

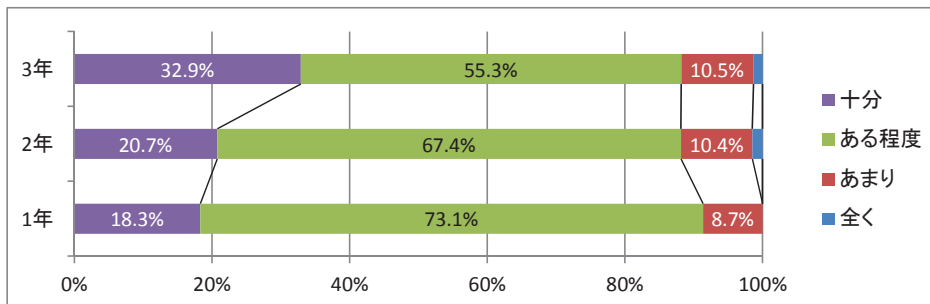


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

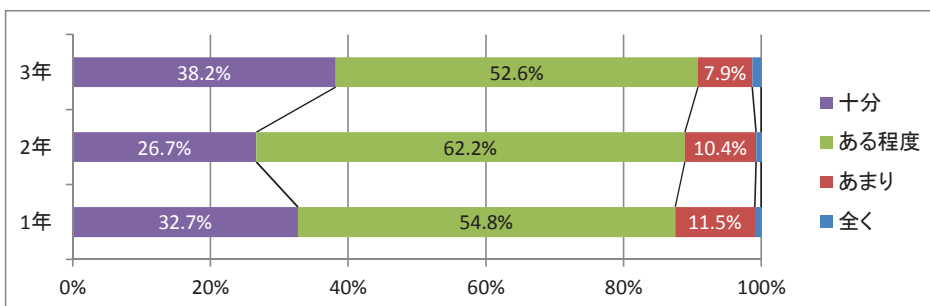
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



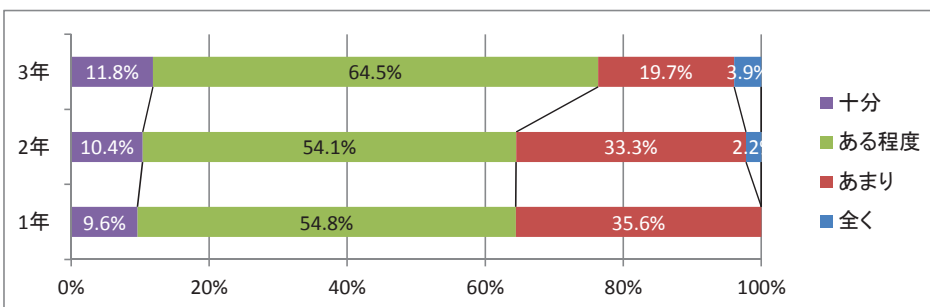
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



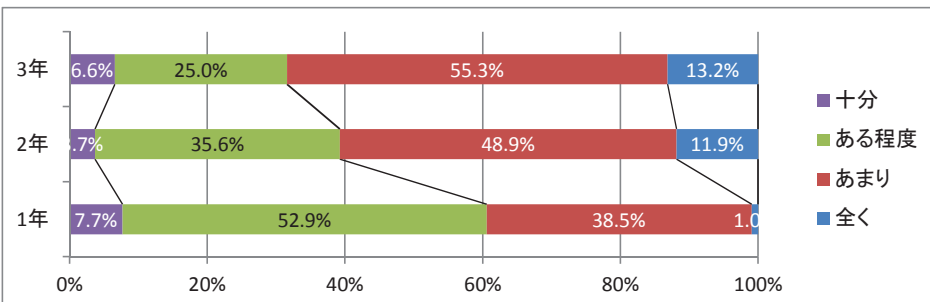
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



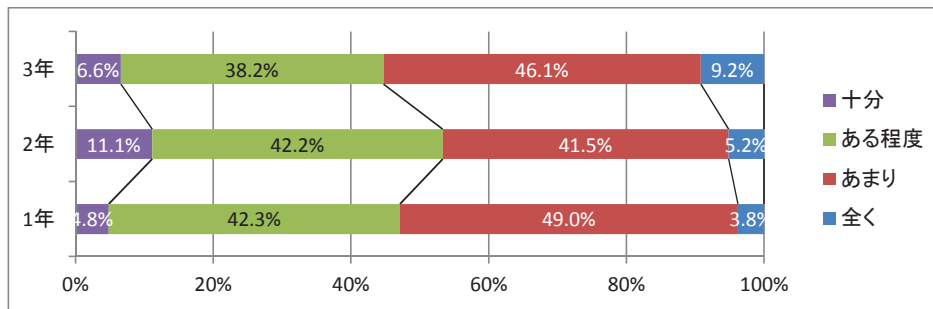
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



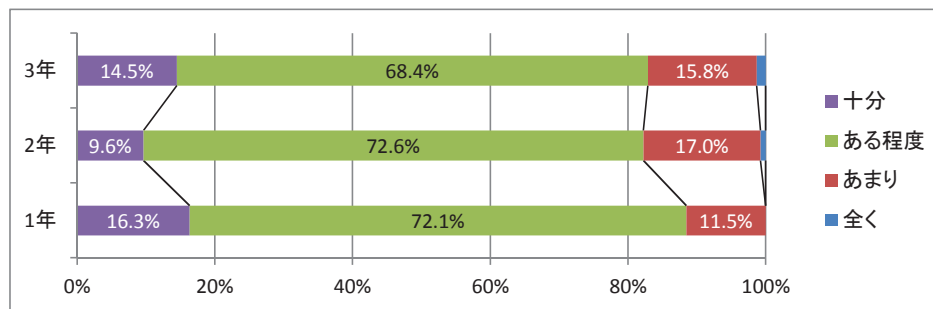
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



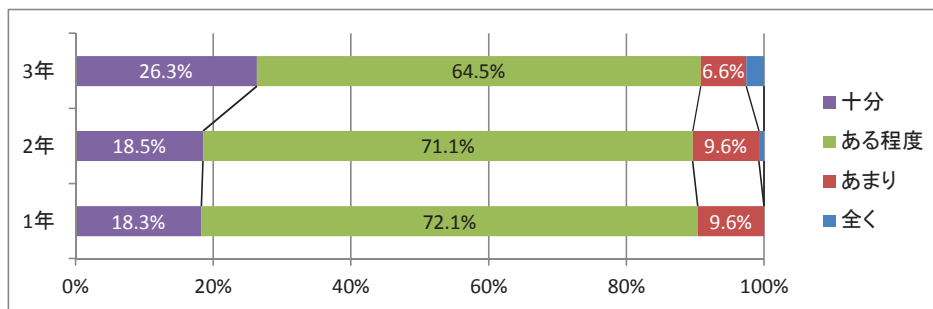
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



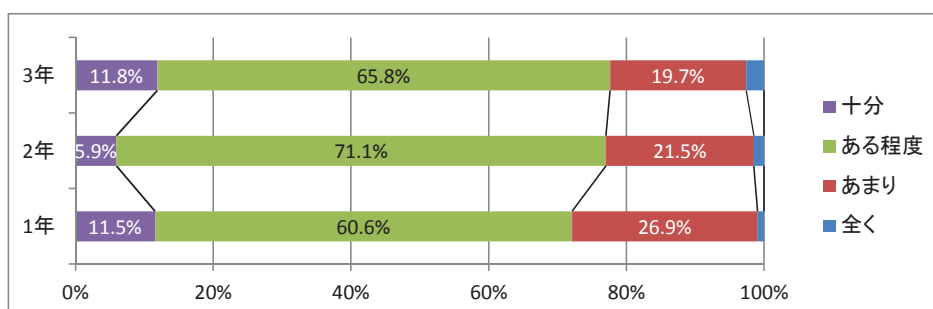
7) 教養教育等による幅広い知識



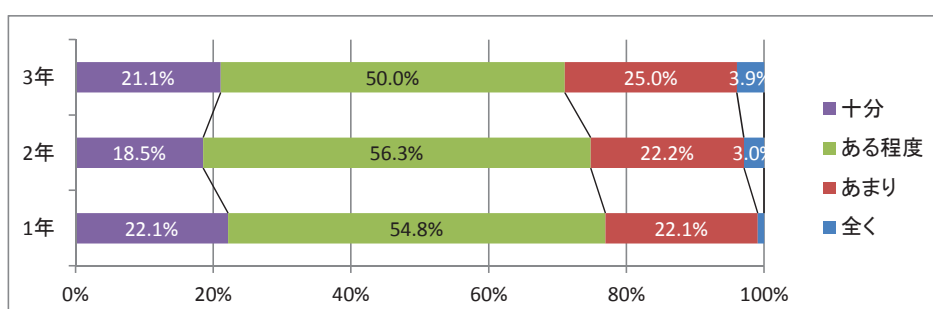
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力



10) 地域を志向する意識

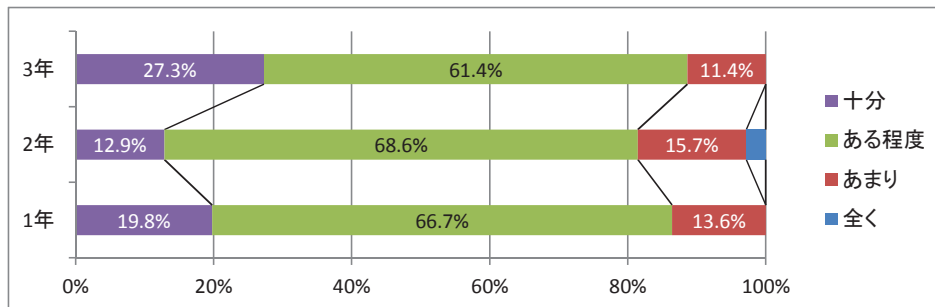


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

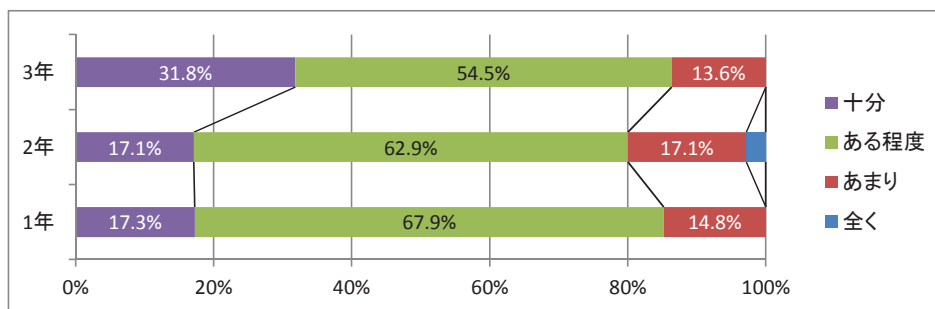
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



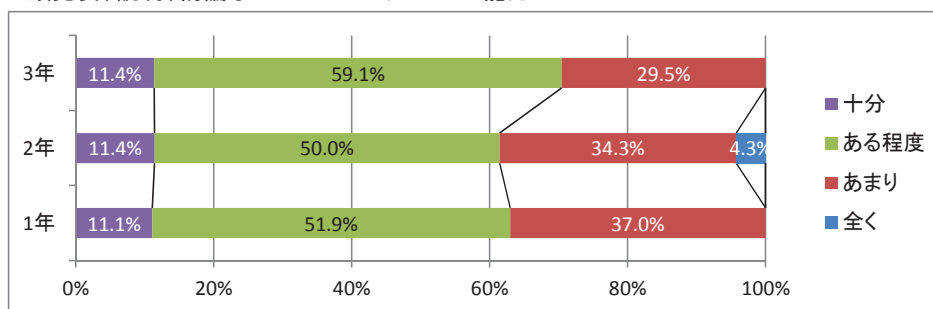
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



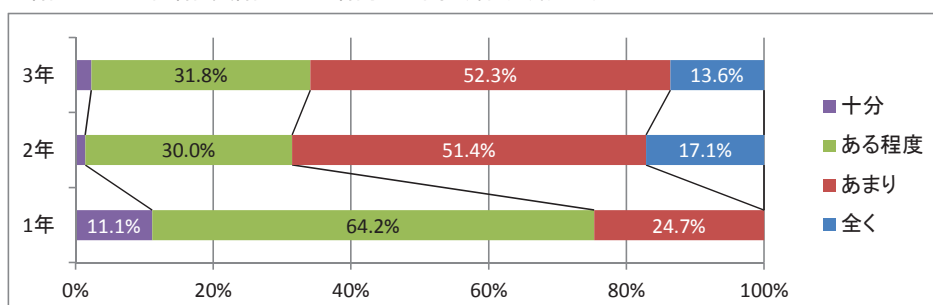
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



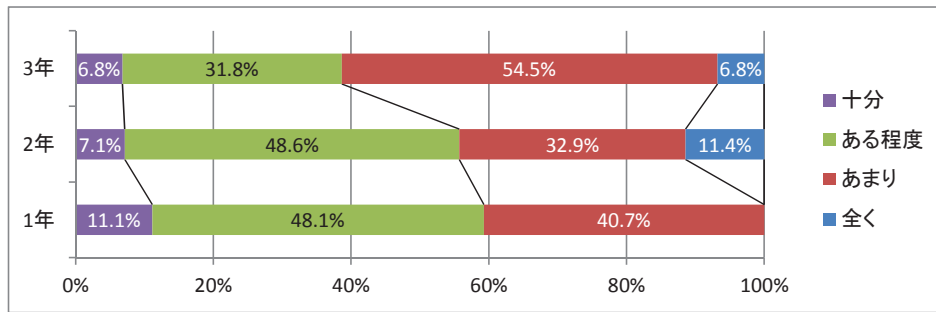
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



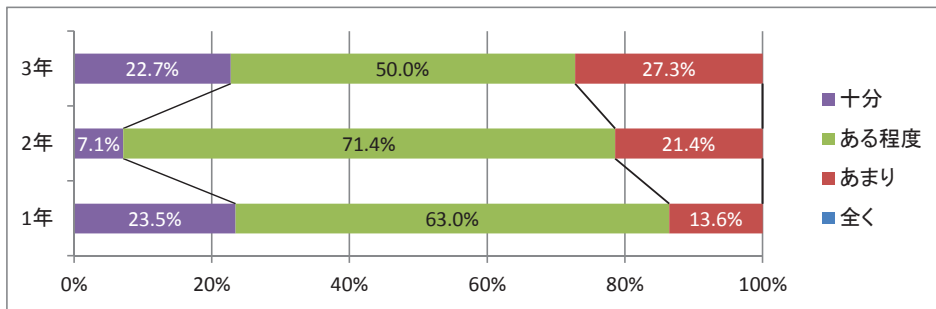
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



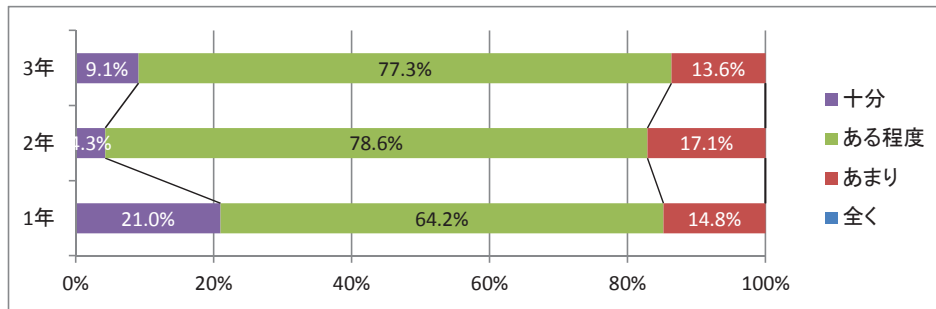
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



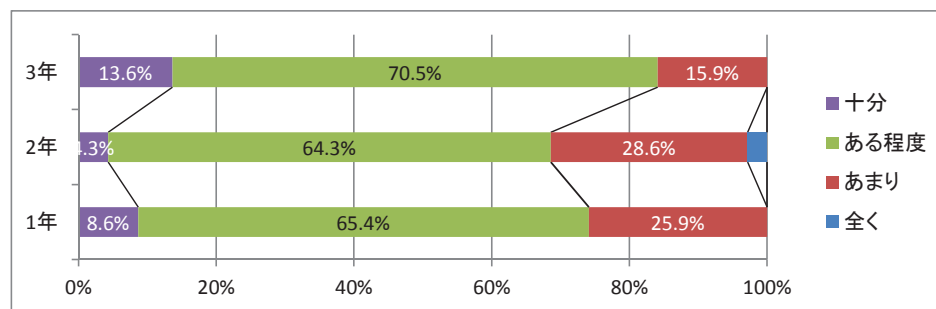
7) 教養教育等による幅広い知識



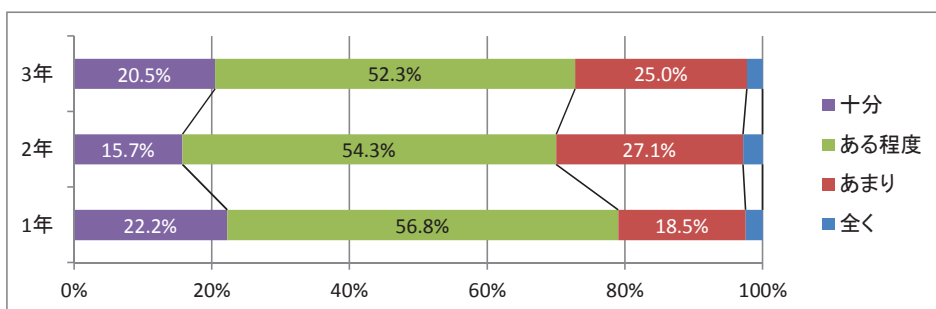
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

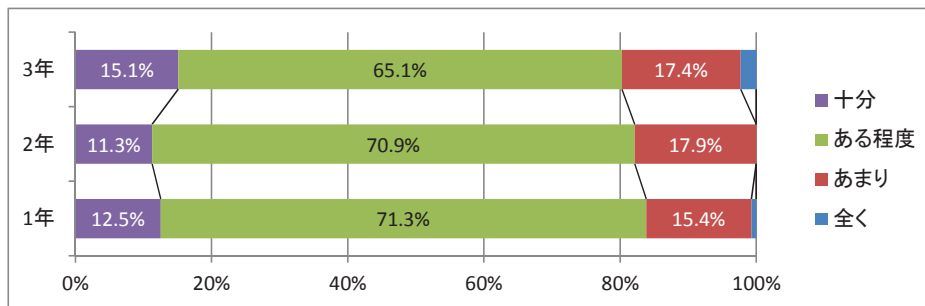


10) 地域を志向する意識

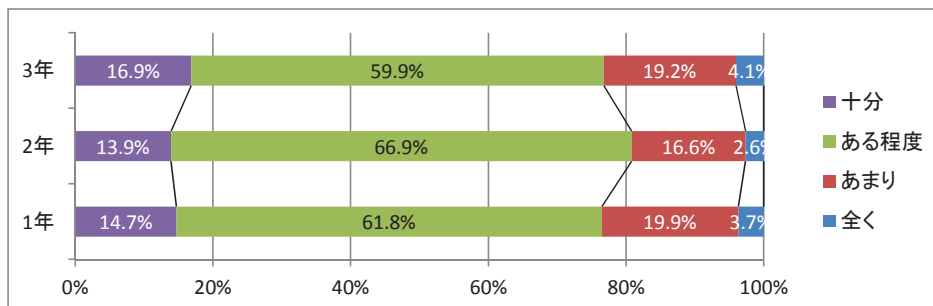


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

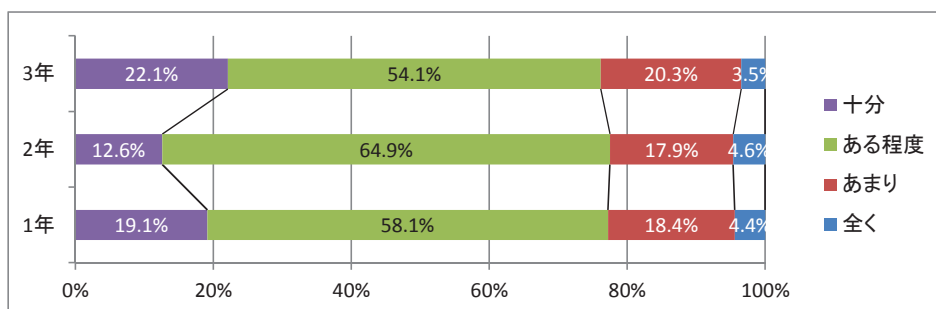
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



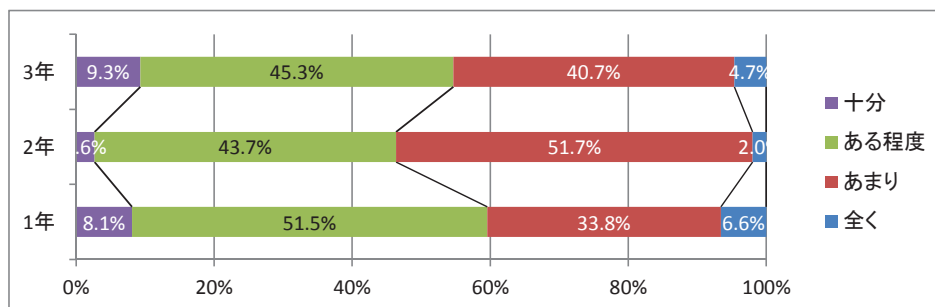
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



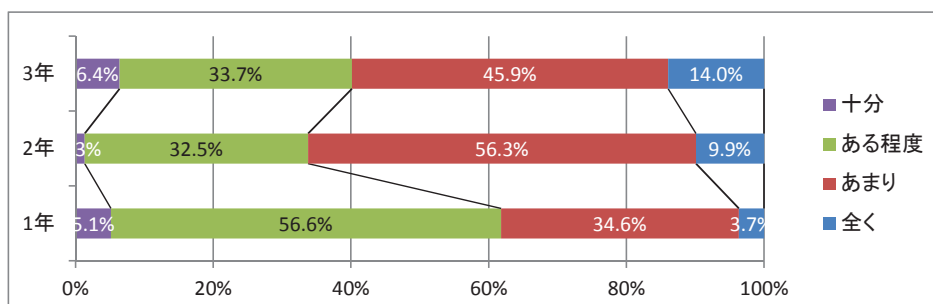
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



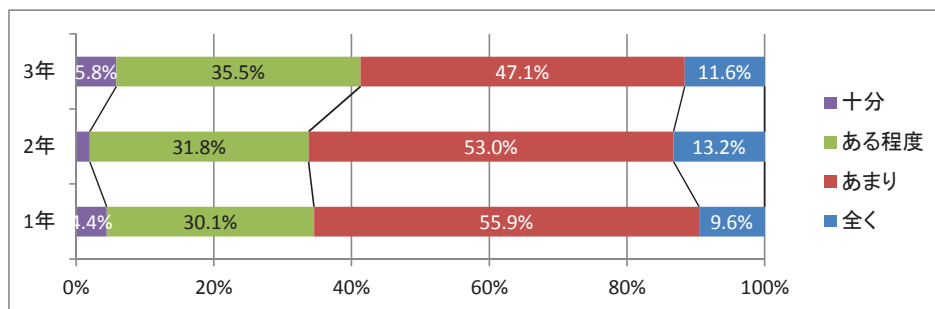
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



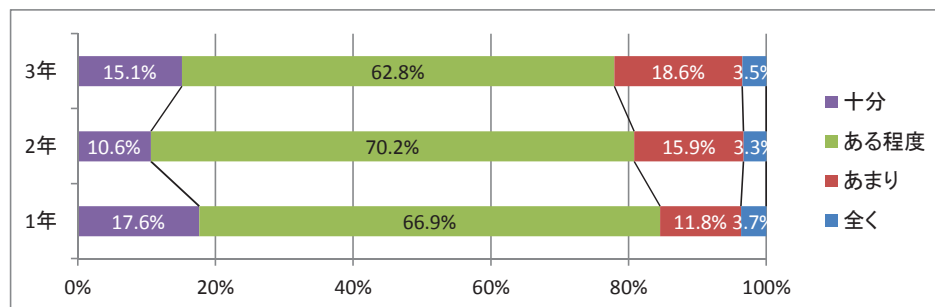
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



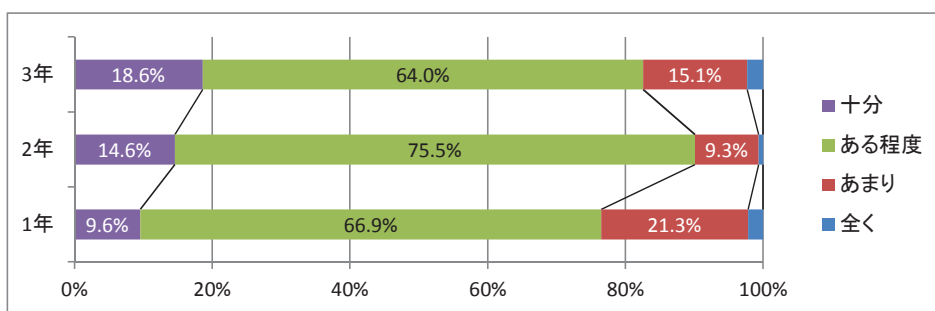
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



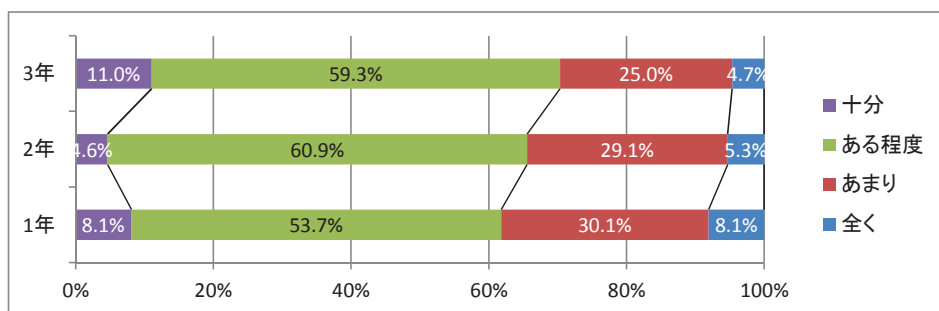
7) 教養教育等による幅広い知識



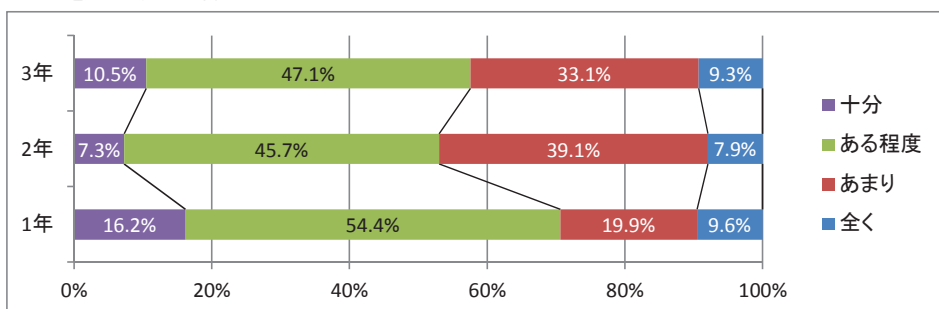
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

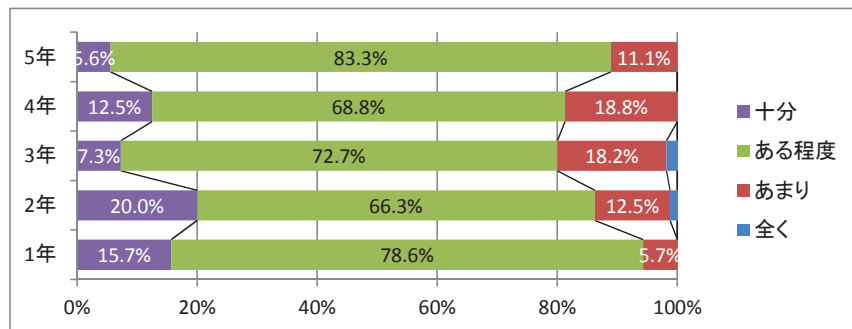


10) 地域を志向する意識

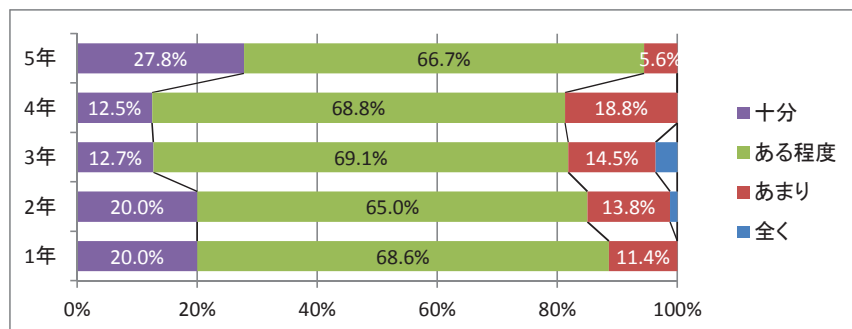


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

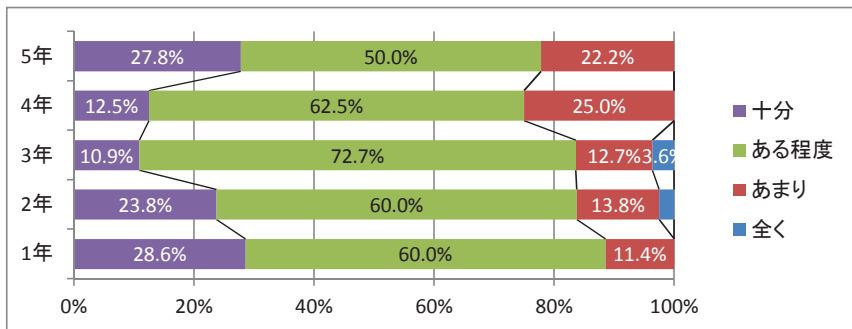
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



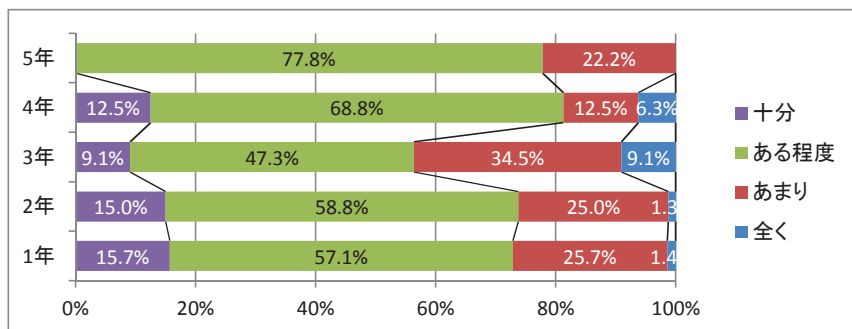
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



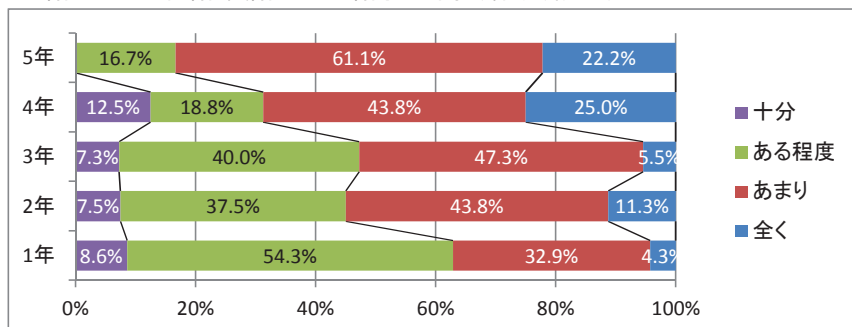
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



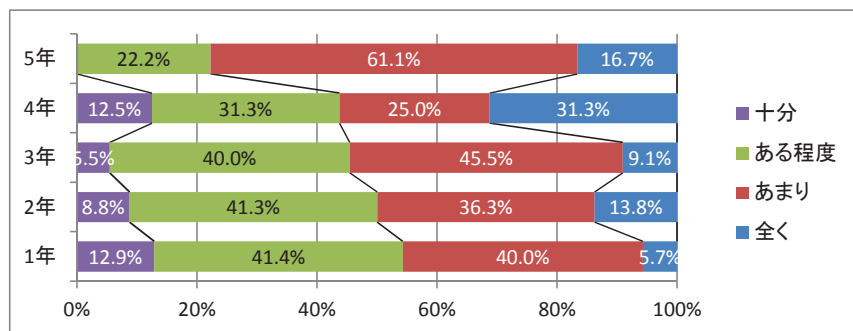
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



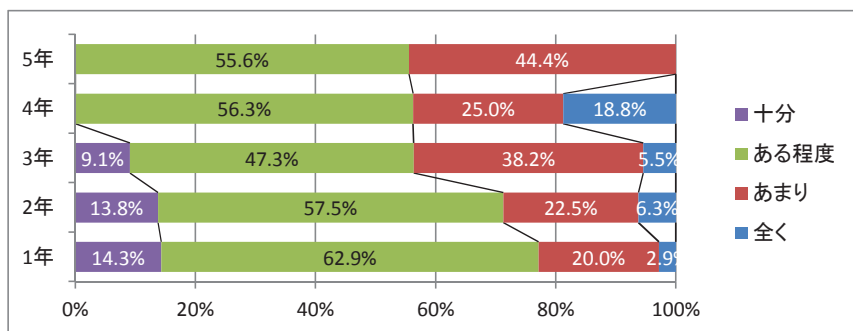
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



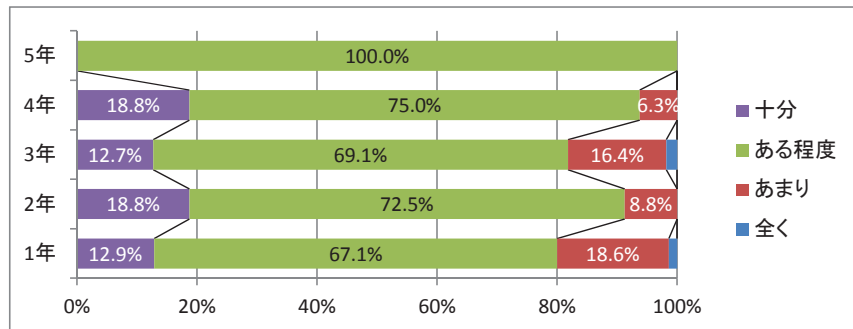
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



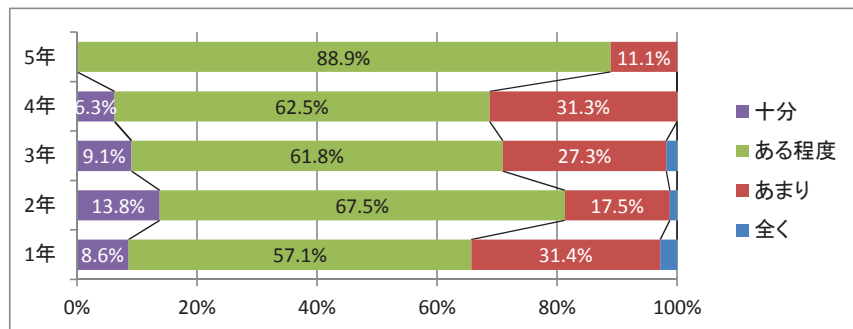
7) 教養教育等による幅広い知識



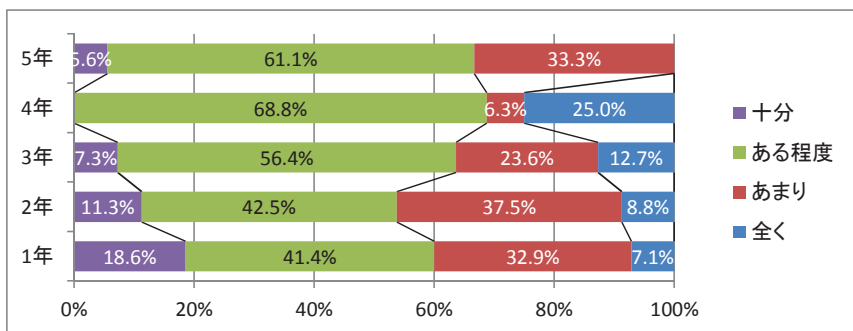
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

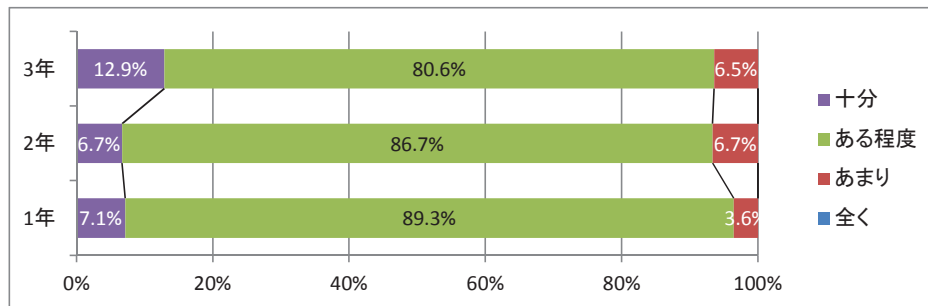


10) 地域を志向する意識

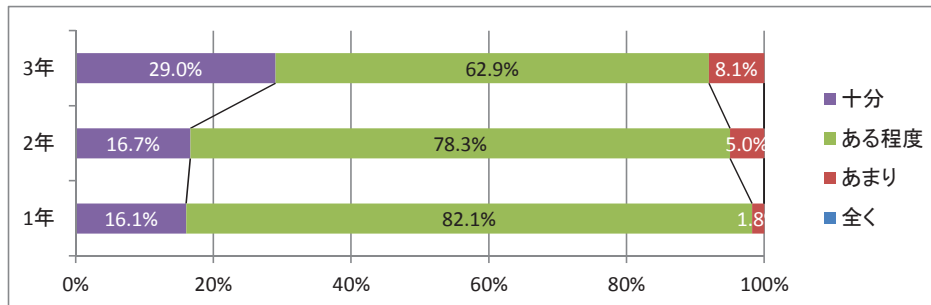


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

1)「課題や問題を自ら解決する能力」



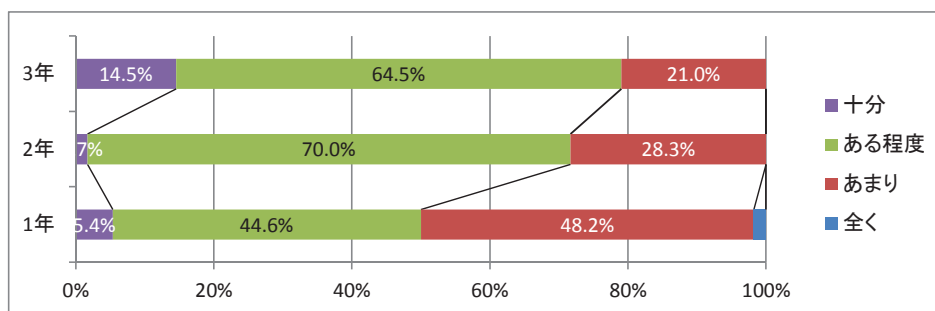
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



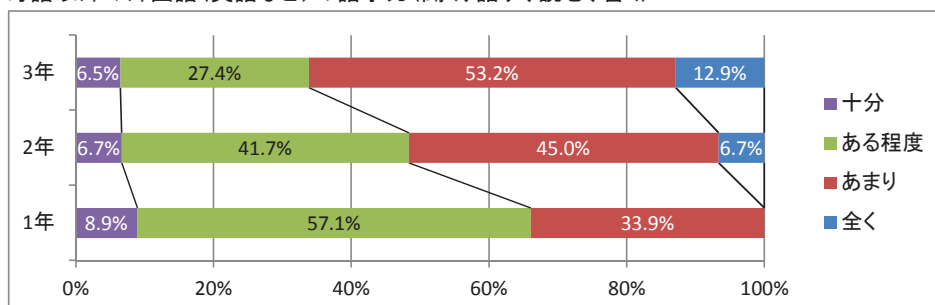
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



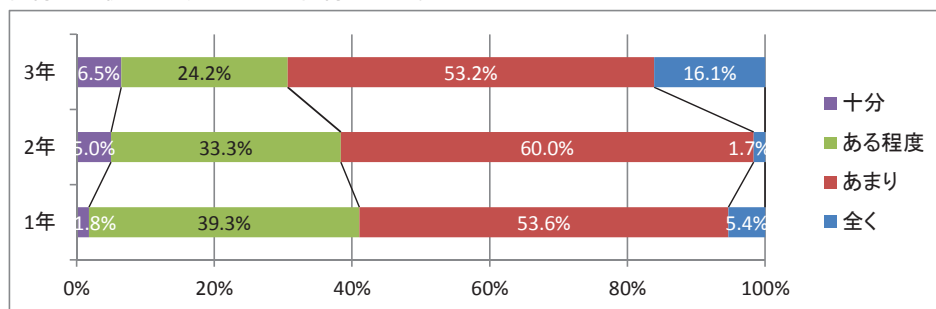
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



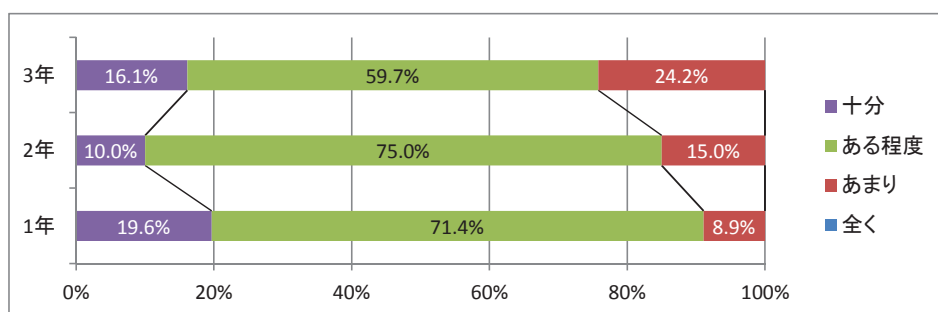
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



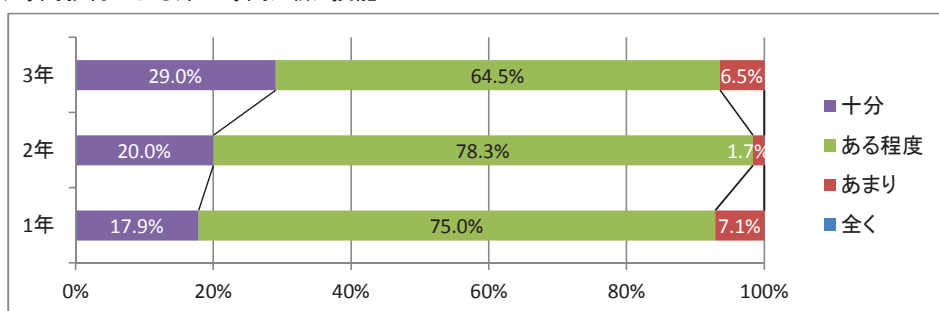
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



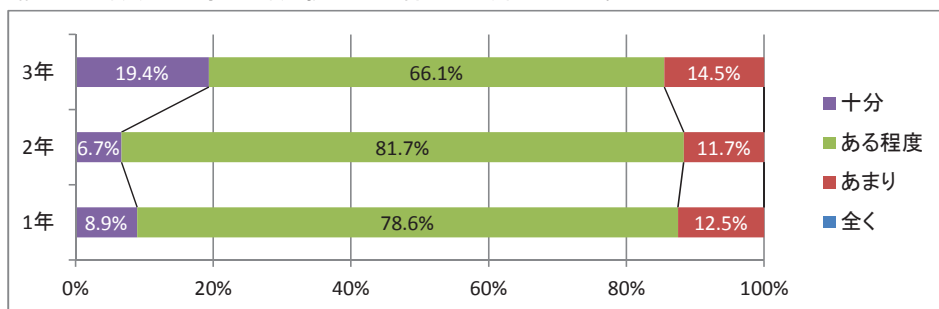
7) 教養教育等による幅広い知識



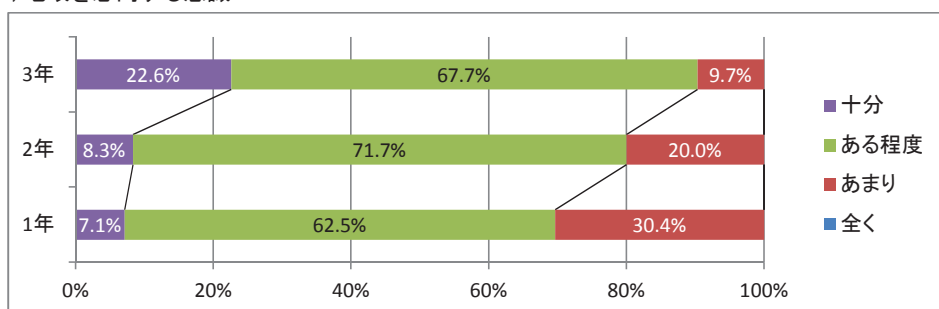
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

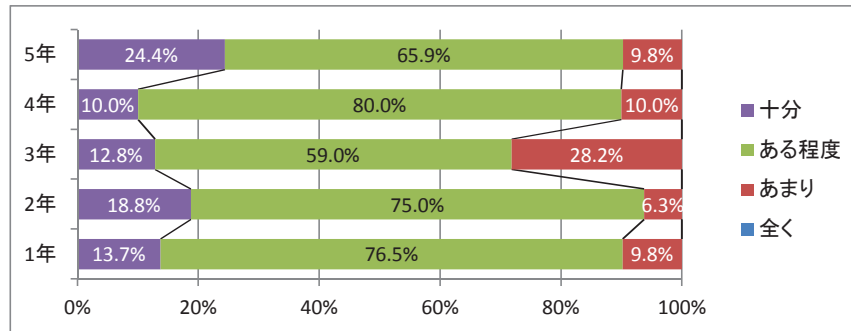


10) 地域を志向する意識

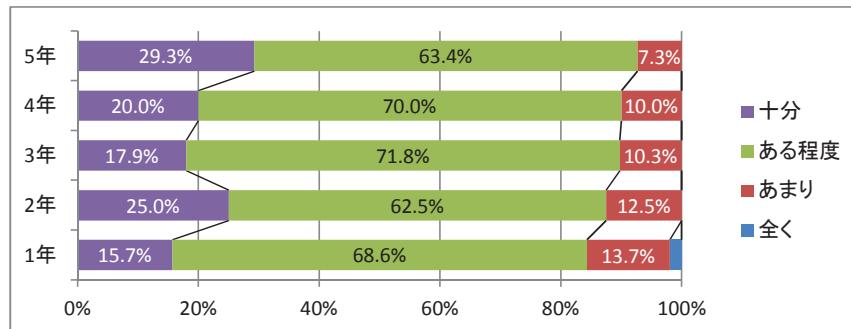


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

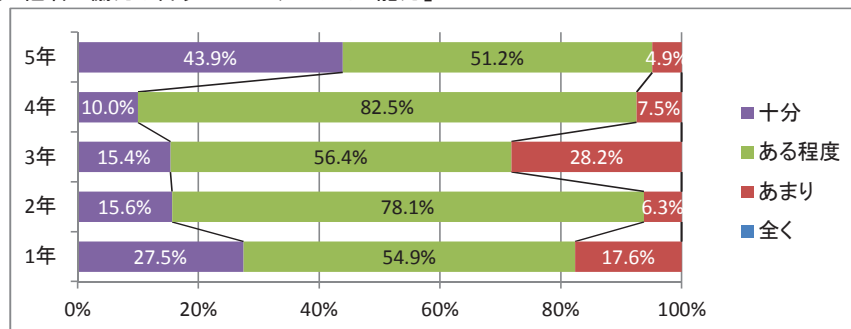
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



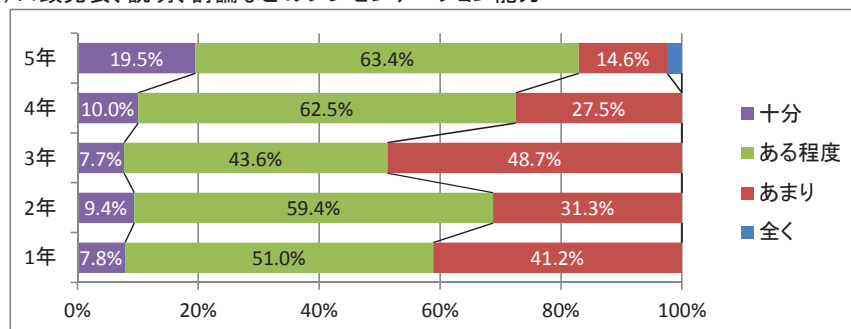
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



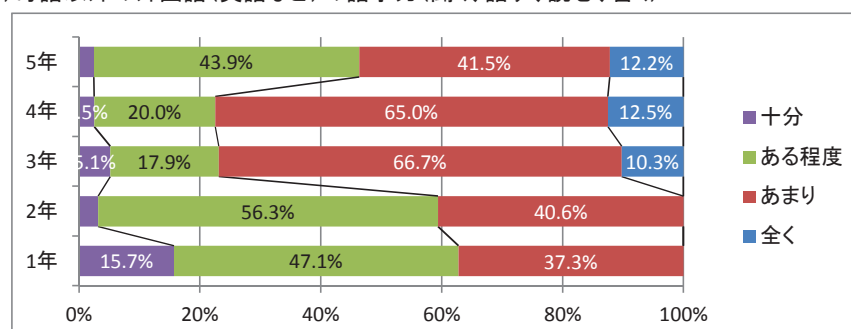
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



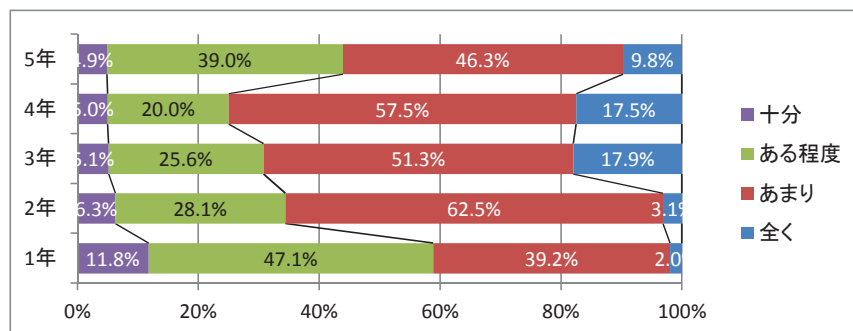
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



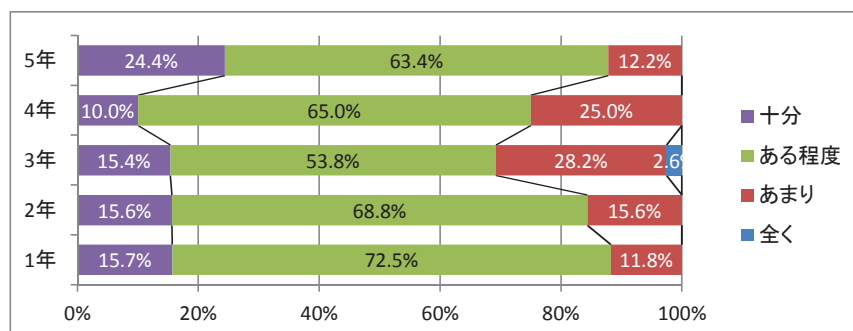
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



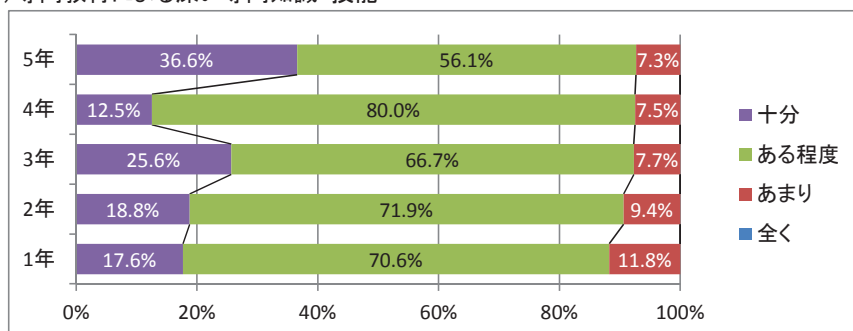
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



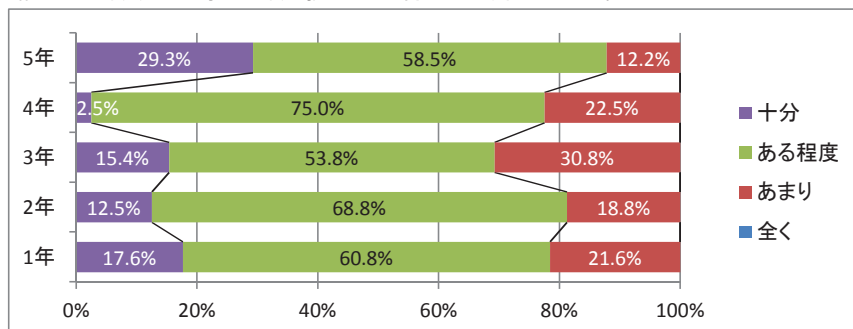
7) 教養教育等による幅広い知識



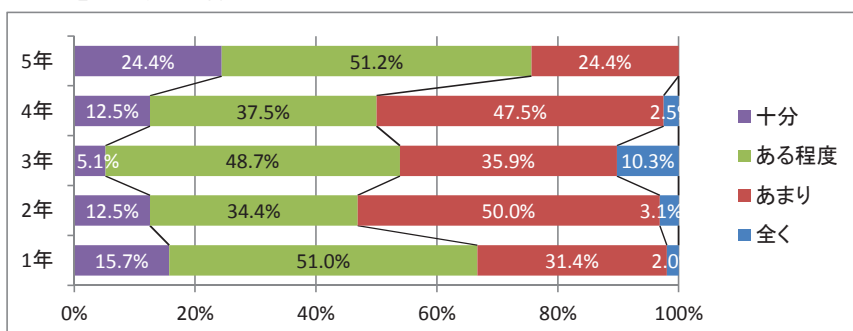
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

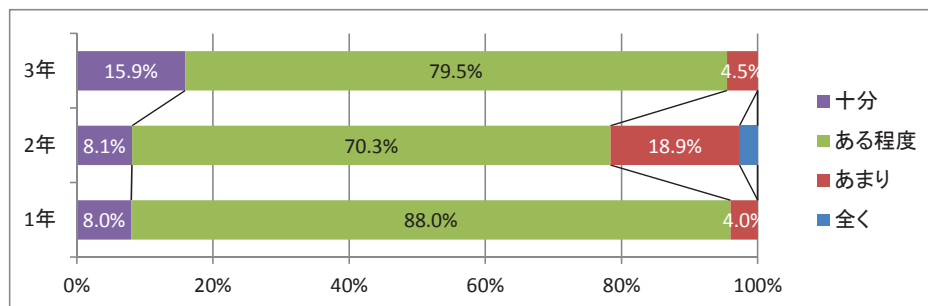


10) 地域を志向する意識



DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

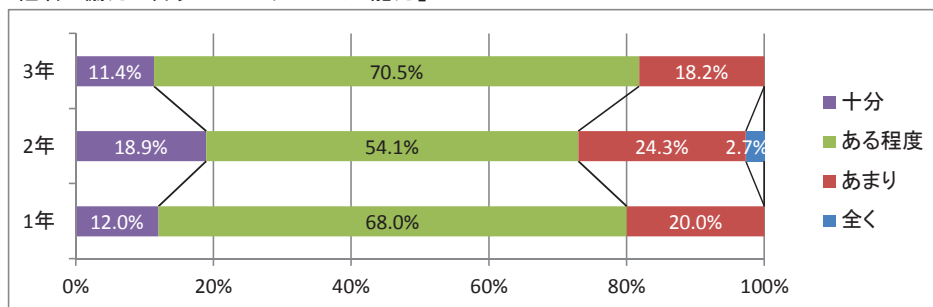
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



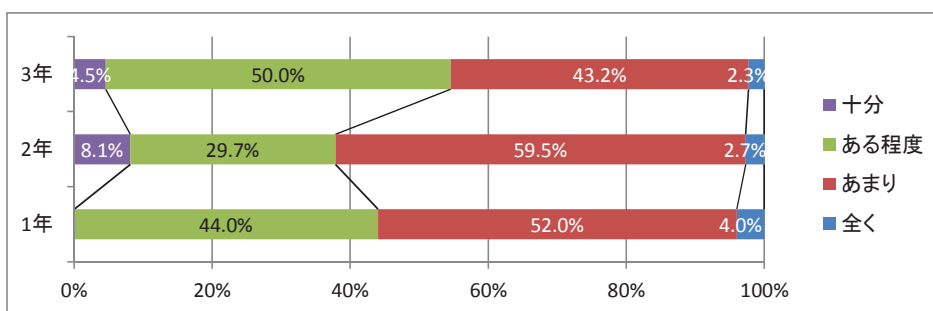
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



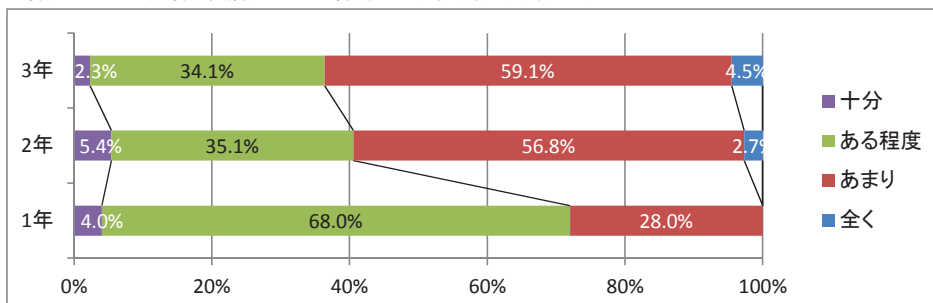
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



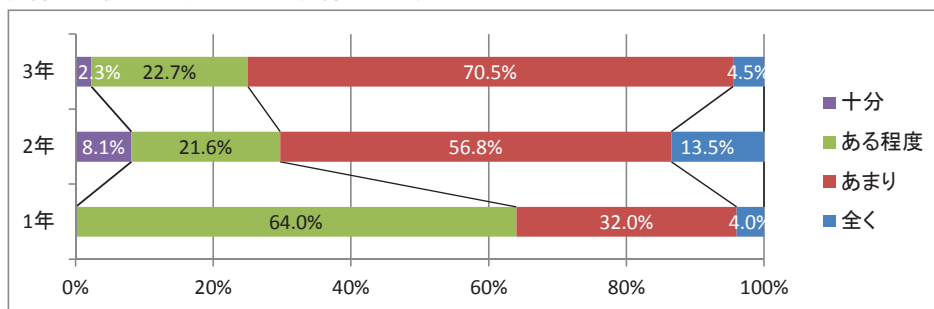
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



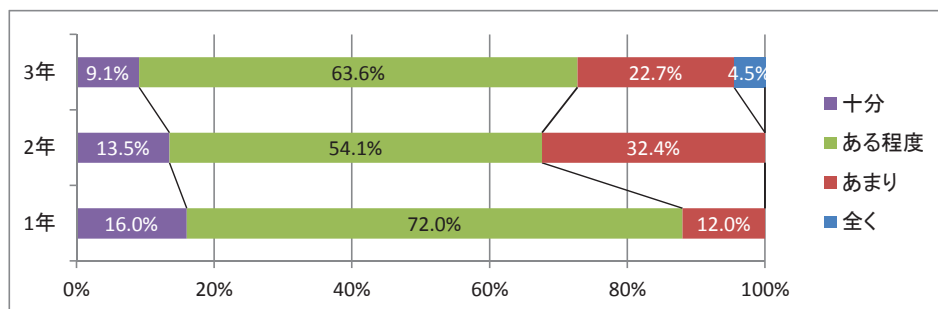
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



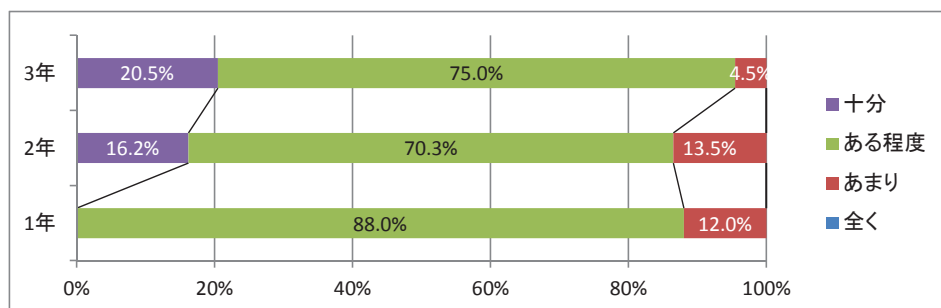
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



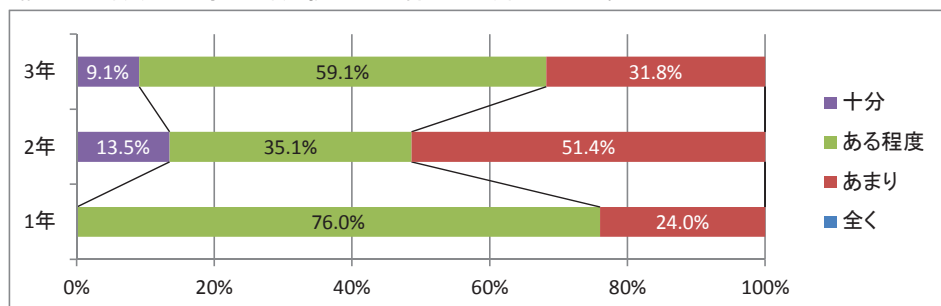
7) 教養教育等による幅広い知識



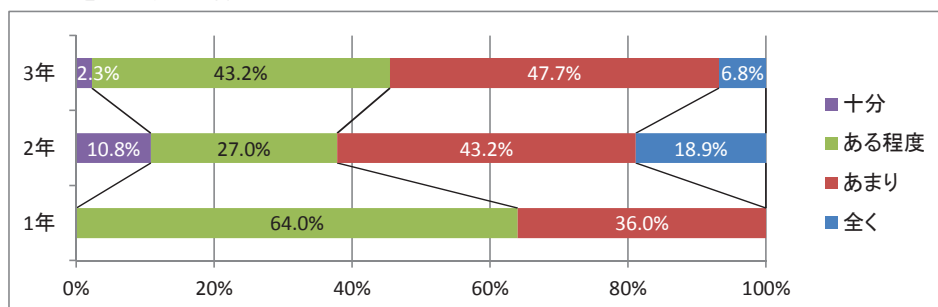
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力



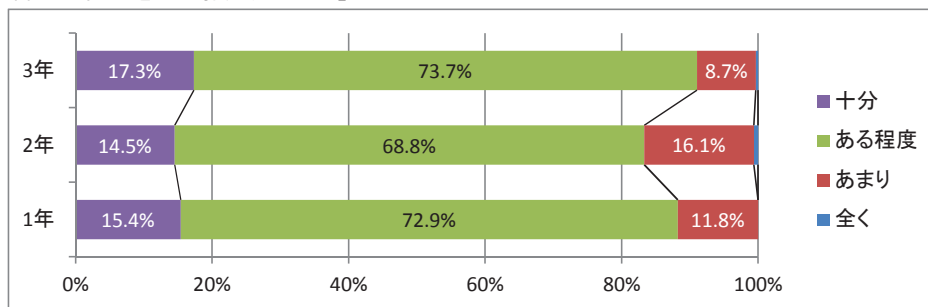
10) 地域を志向する意識



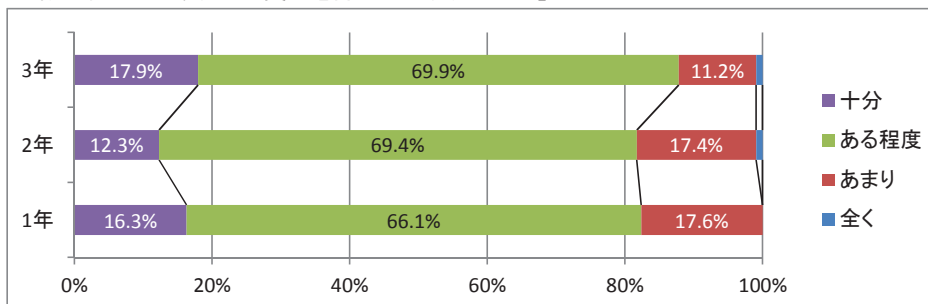
工学部

DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

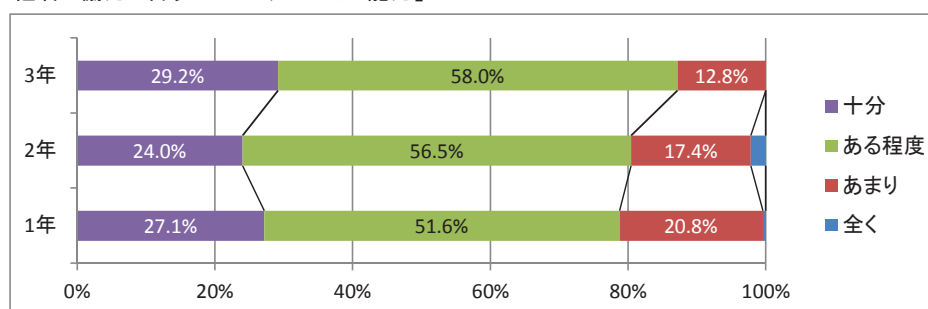
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



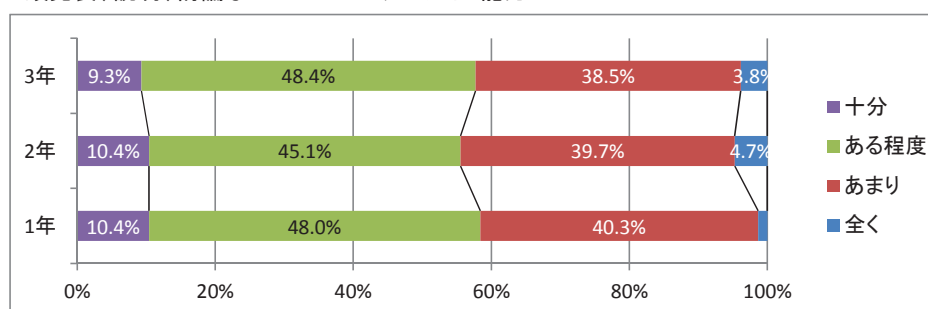
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



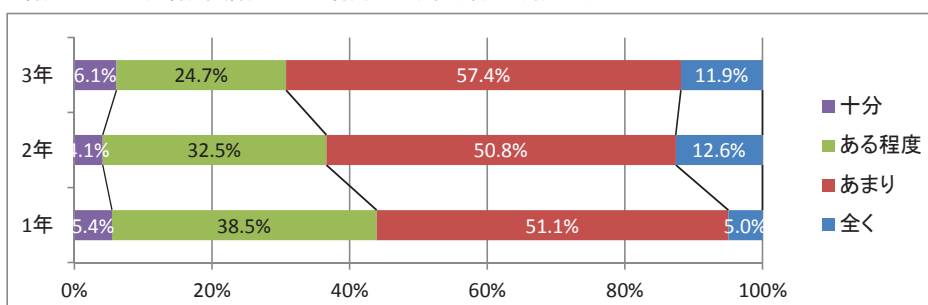
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



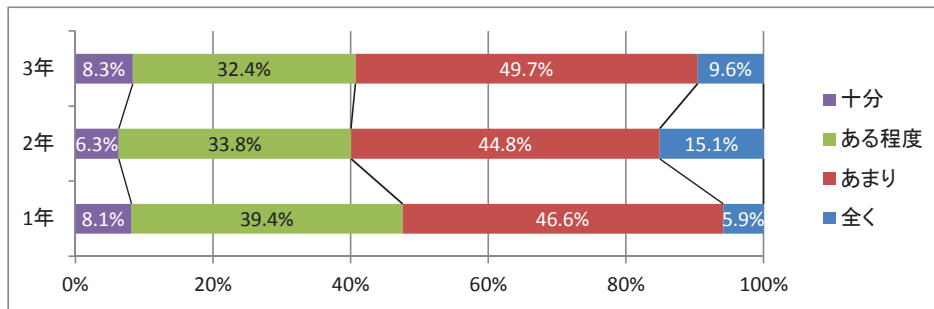
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



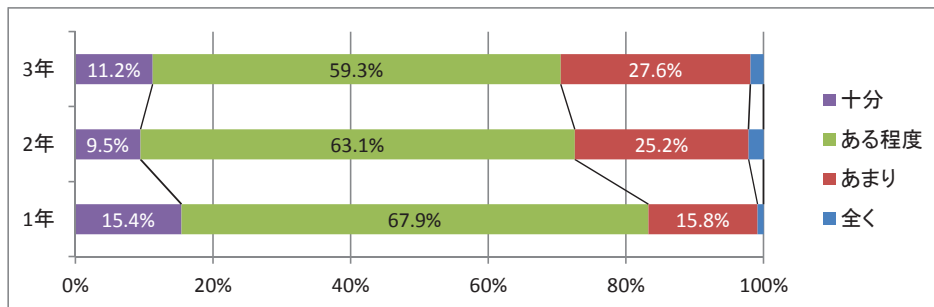
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



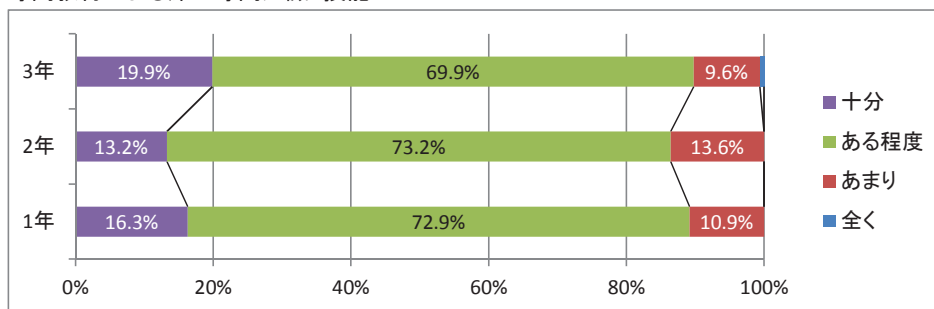
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



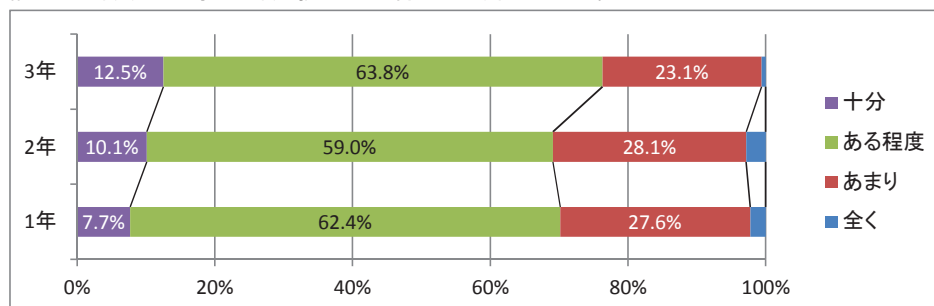
7) 教養教育等による幅広い知識



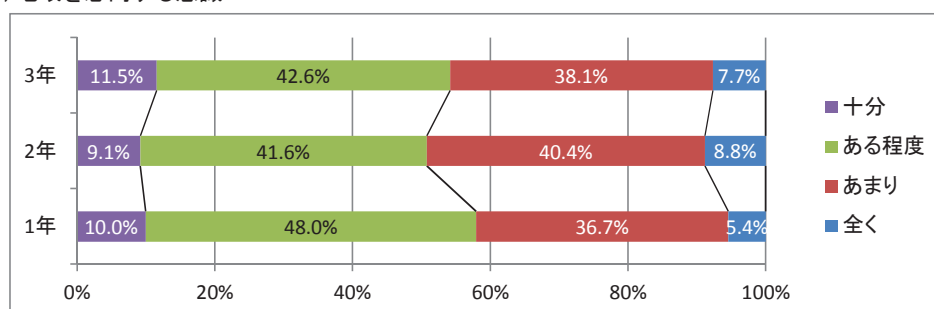
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

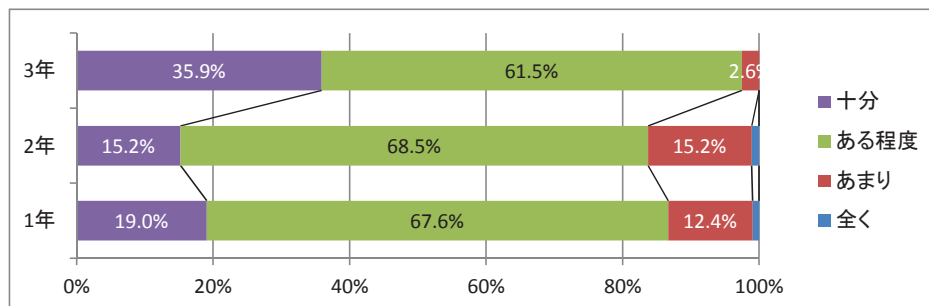


10) 地域を志向する意識

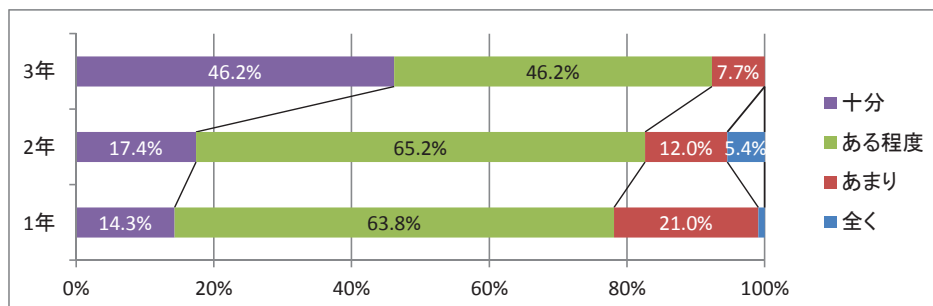


DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

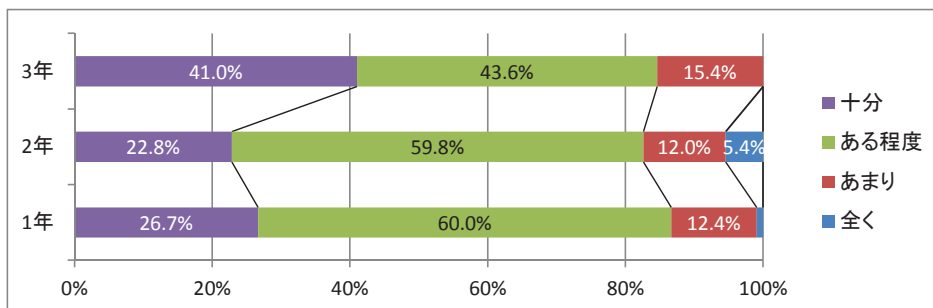
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



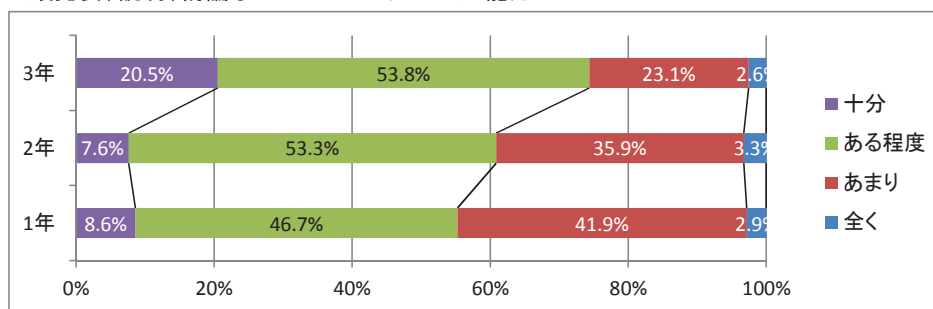
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



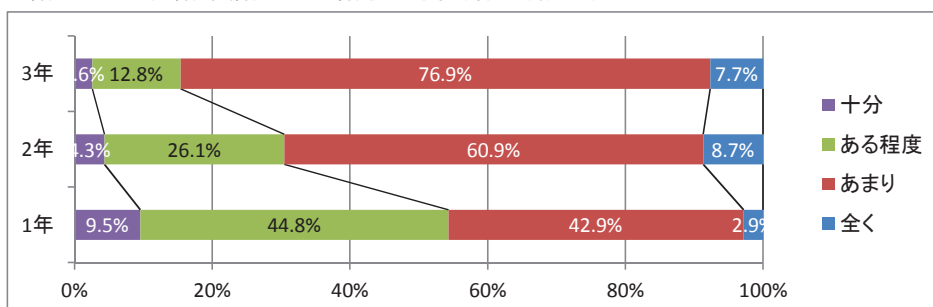
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



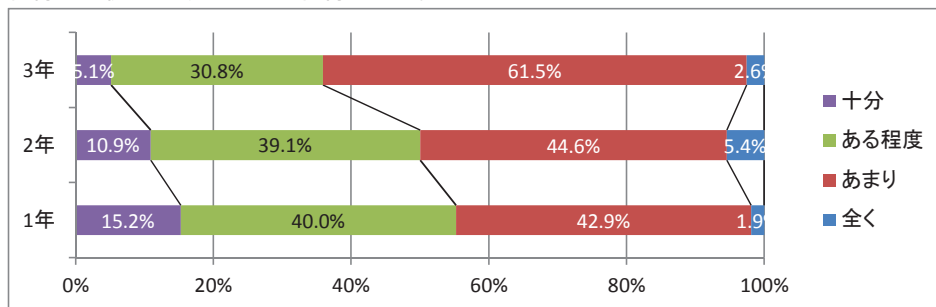
4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



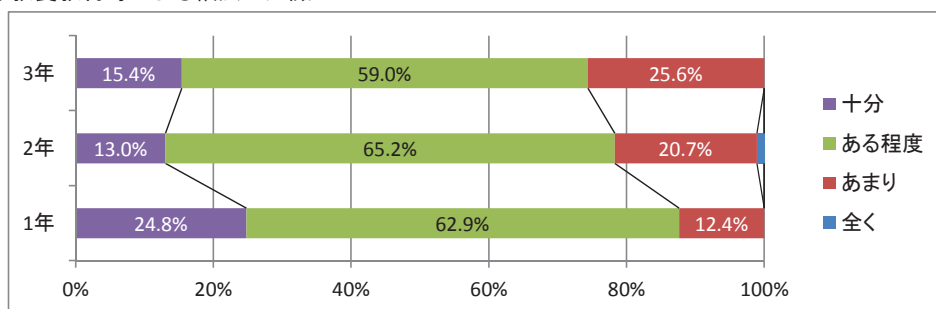
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



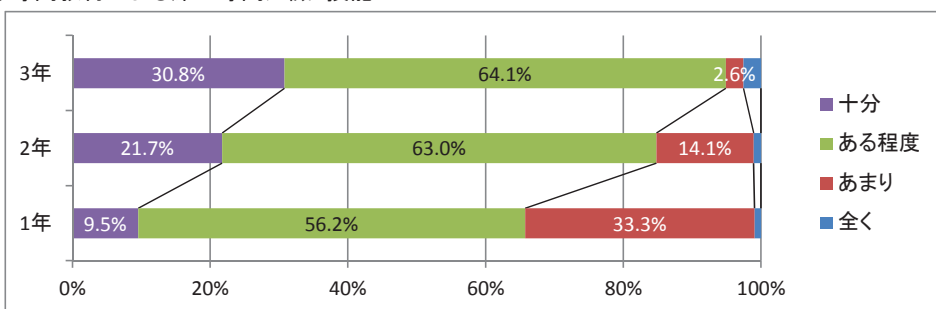
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



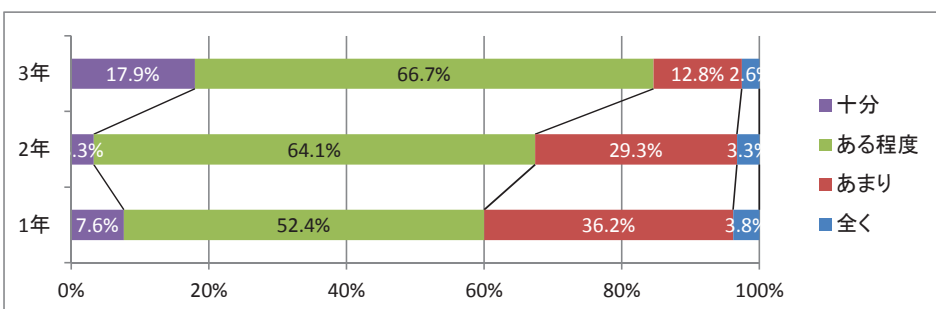
7) 教養教育等による幅広い知識



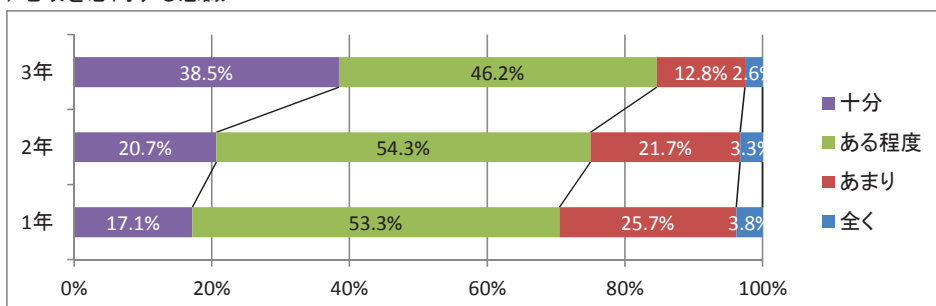
8) 専門教育による深い専門知識・技能



9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力

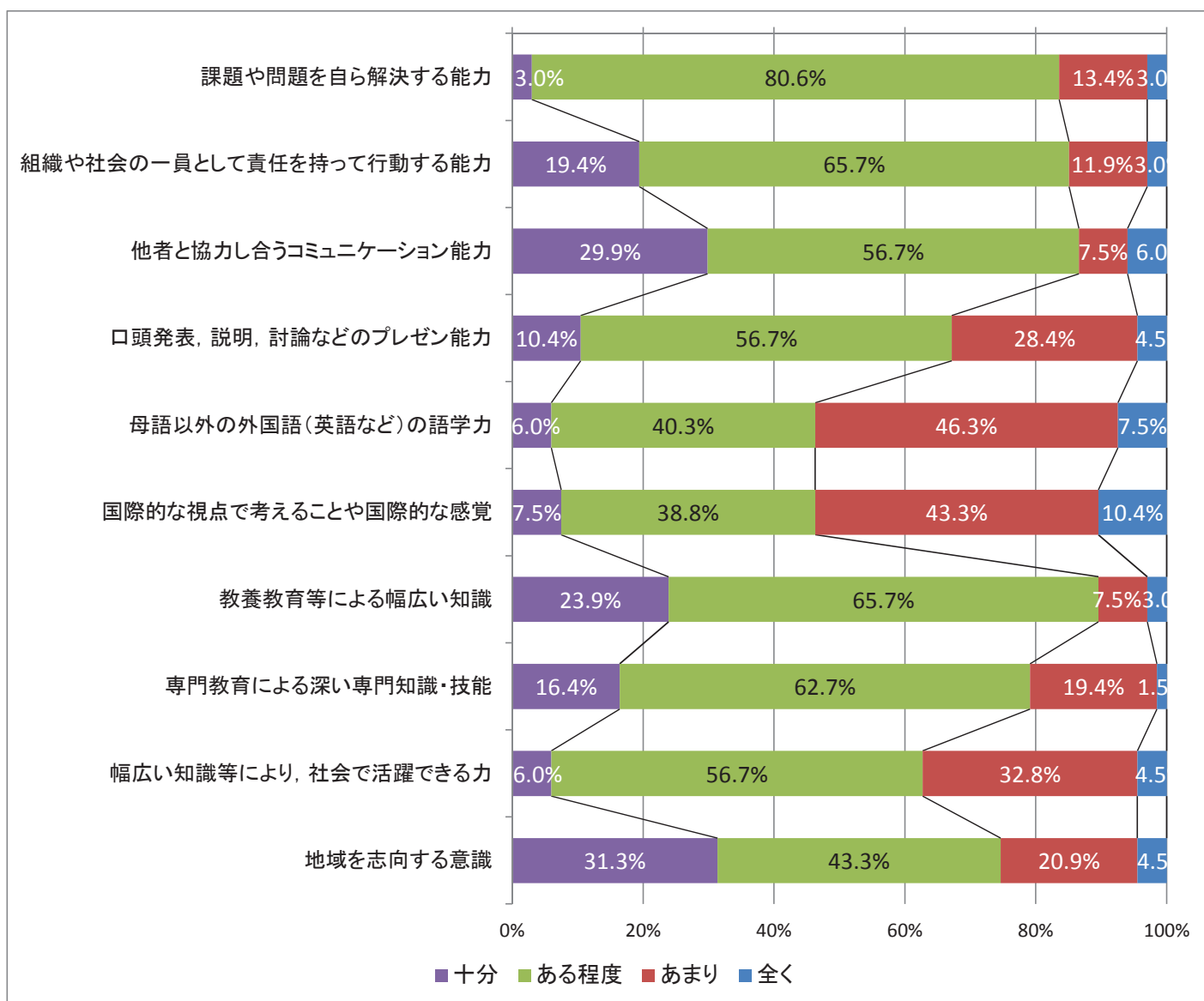


10) 地域を志向する意識



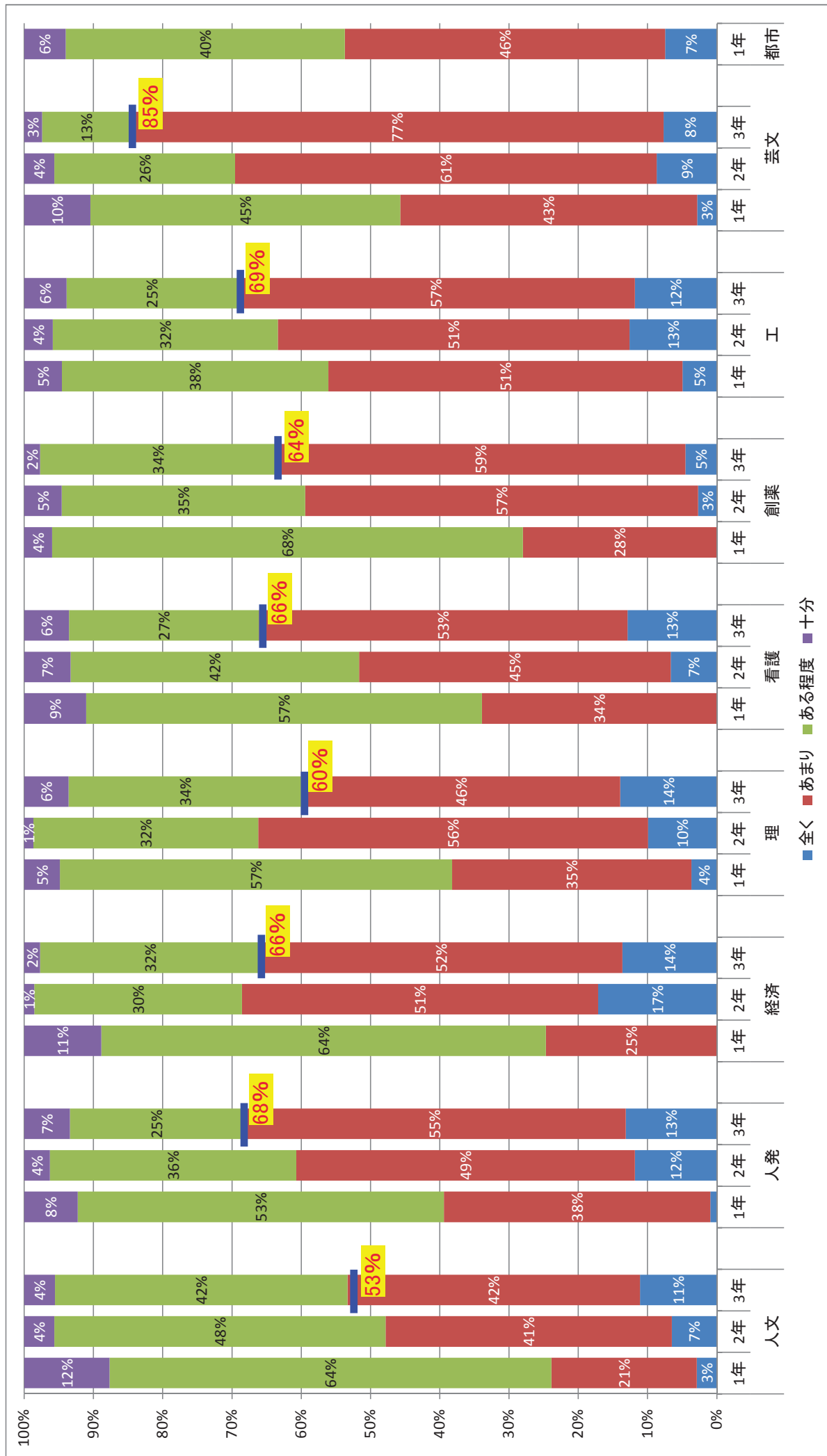
都市デザイン学部(1年)

DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？



「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」をどの程度身に付けることができましたか？

※4年制の学部・学科を基に集計



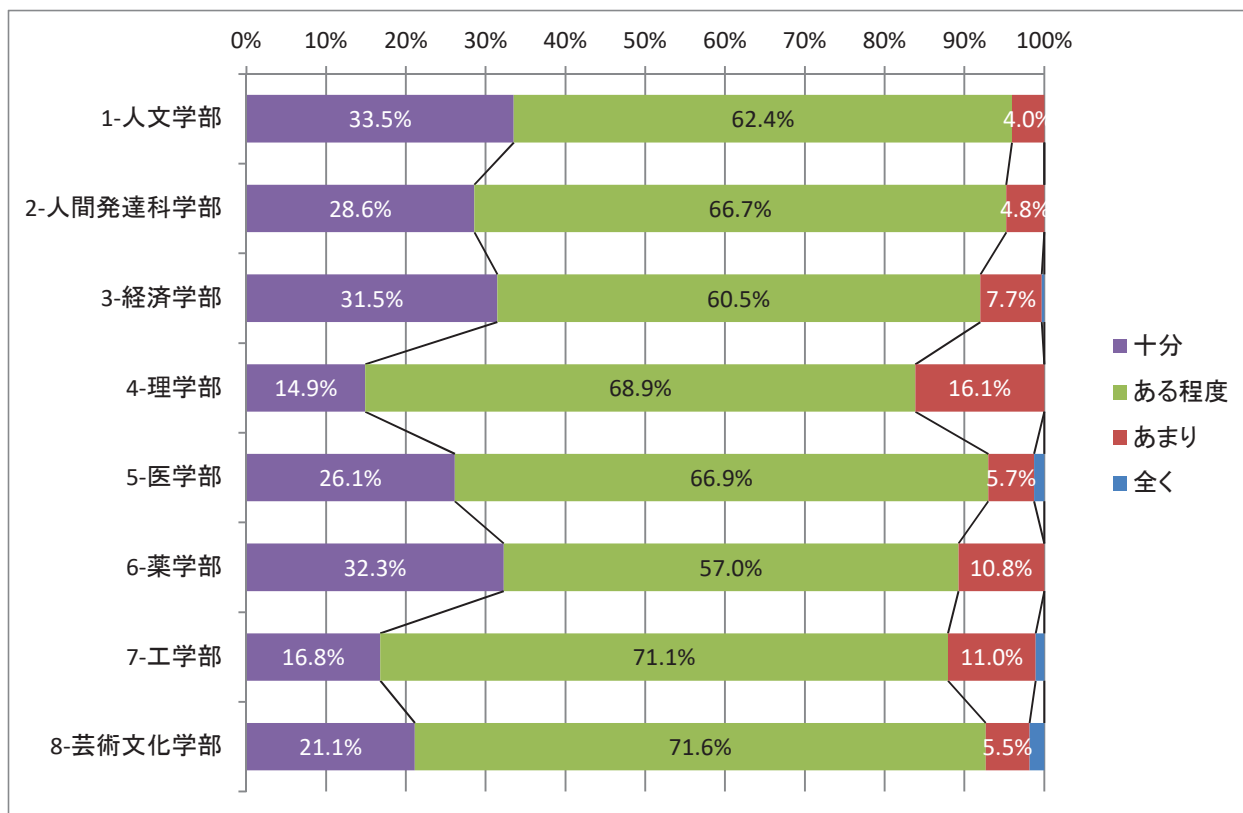
- ・概ね学年があがるにつれて、語学力が身に付いていない(全く身に付いていない。あまり身に付いていない。)と回答。
- ・3年次において、身に付いていない(全く身に付いていない。あまり身に付いていない。)と回答したものは、半数を超える状況。

⇒今年度末に卒業する学生で、語学力を身に付けることができたと考える者は半数にも満たない状況となる見込み。

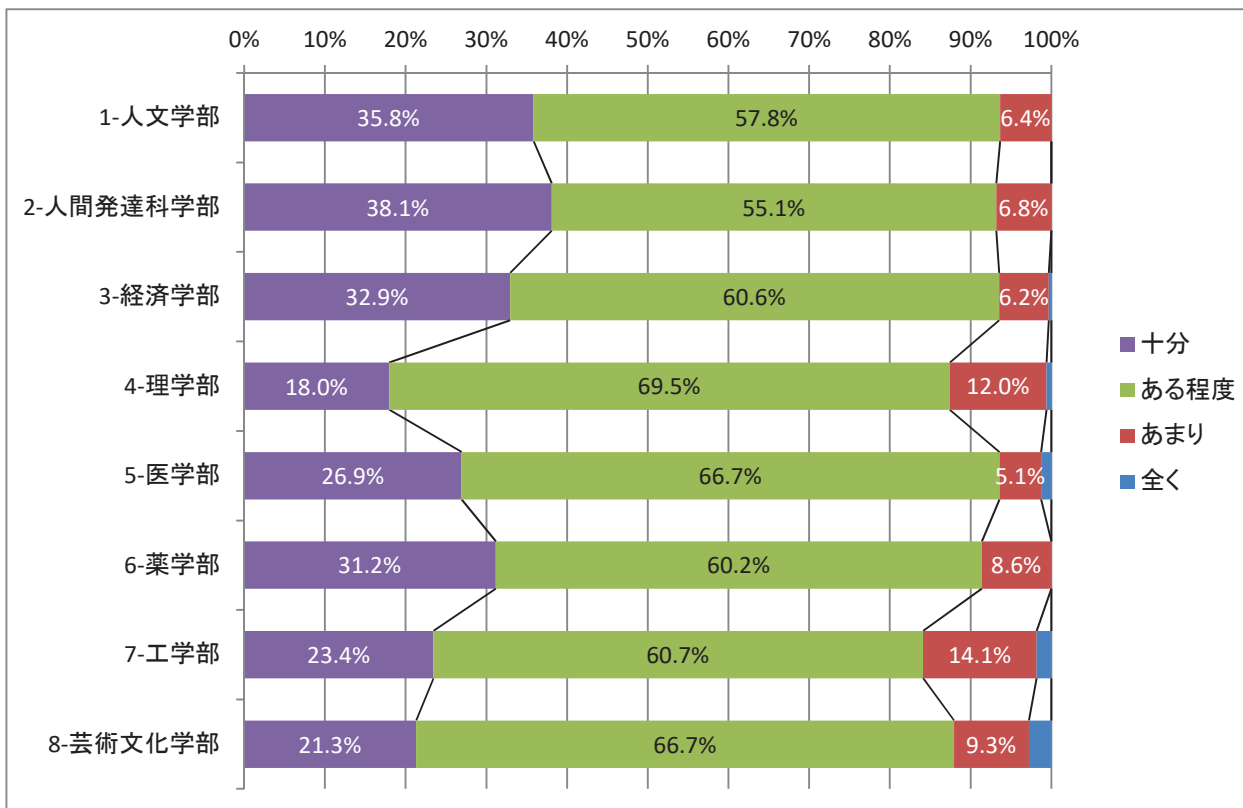
平成30年度卒業時調査における全学共通項目(DP能力達成状況)回答状況

在学時に、以下の能力等をどの程度身に付けることができましたか？

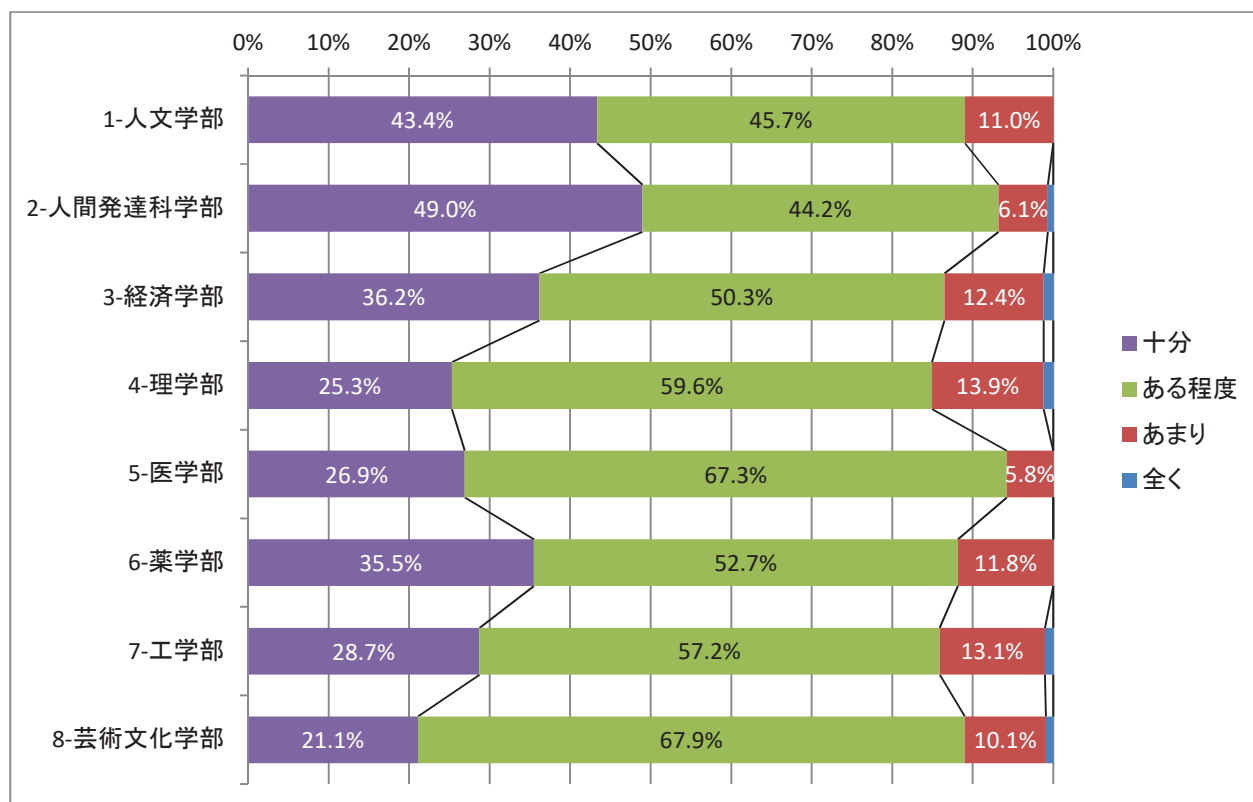
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



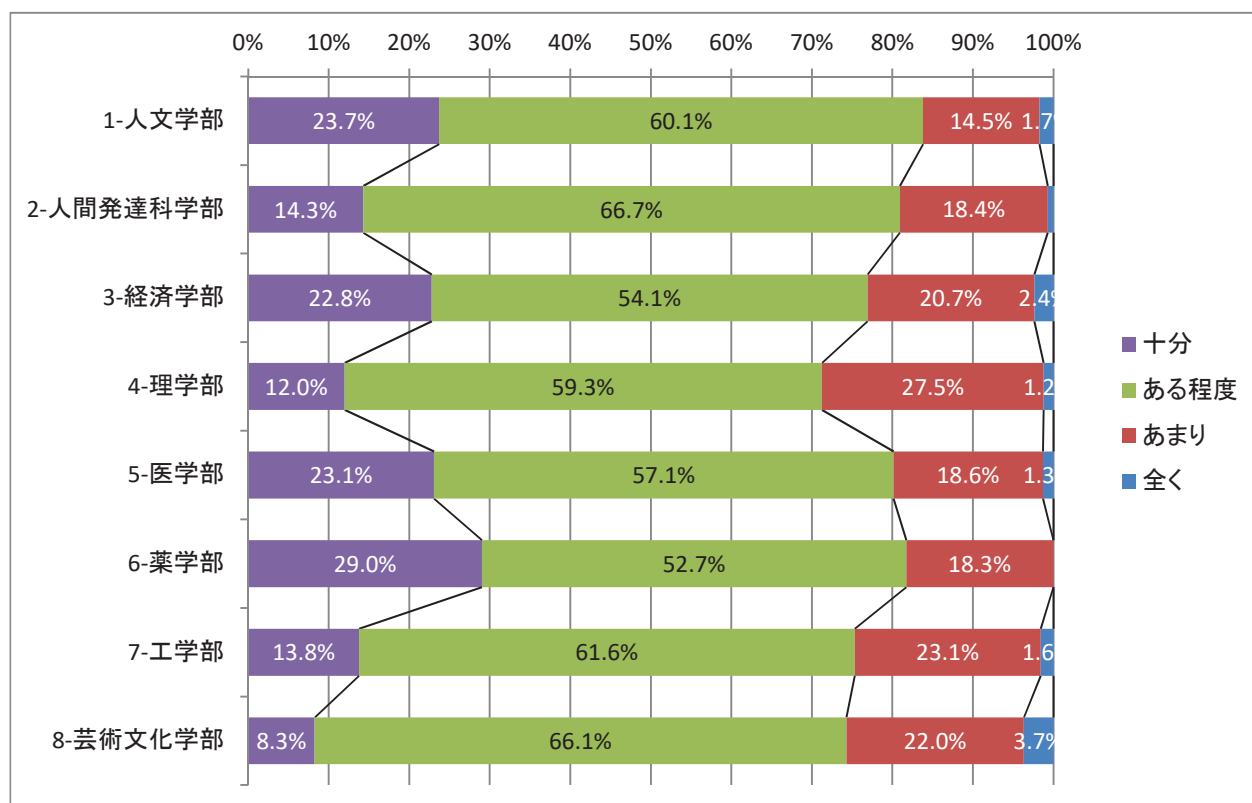
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



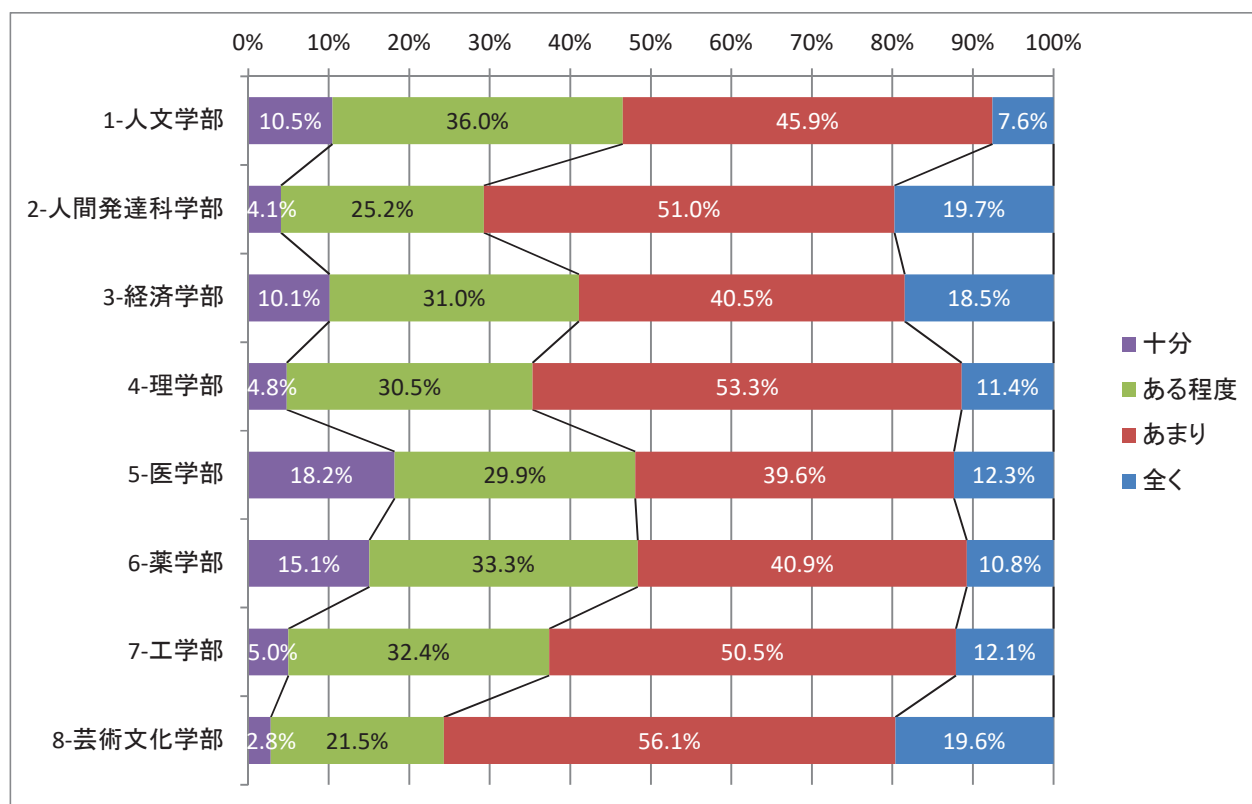
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



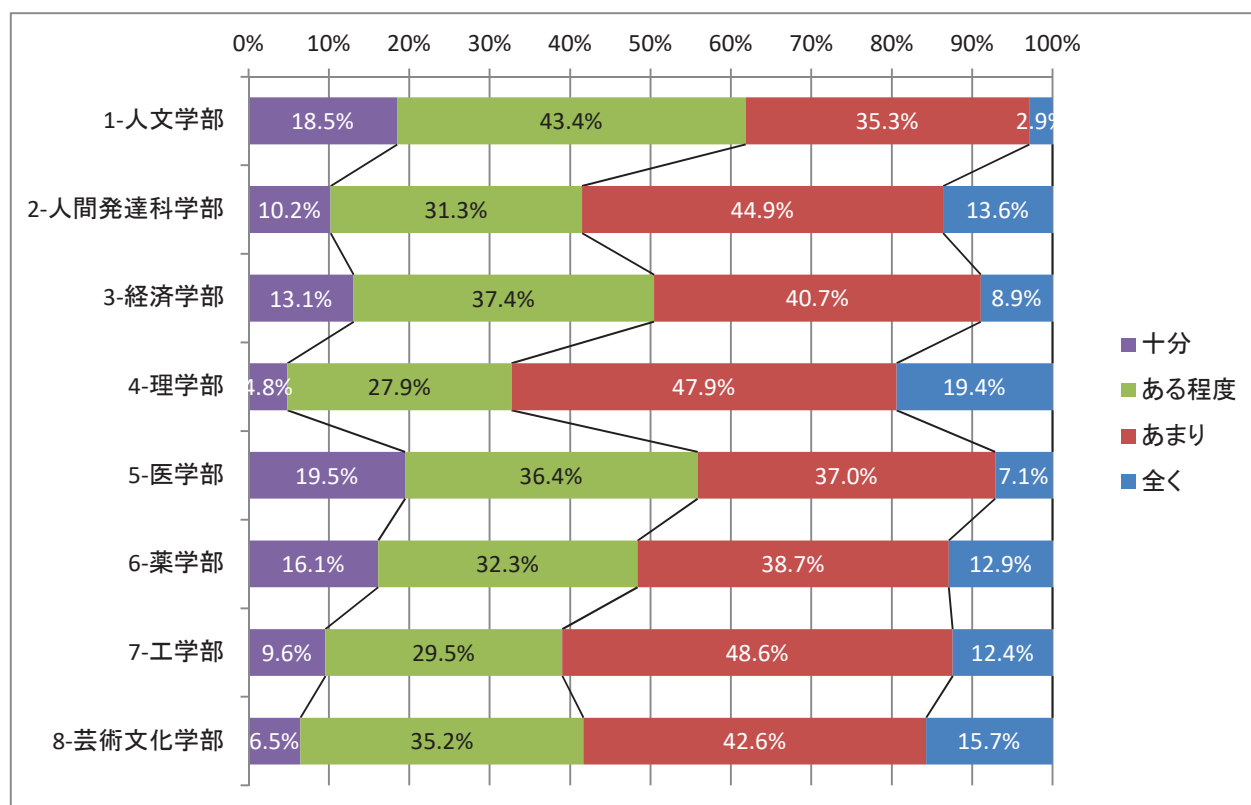
4)口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力



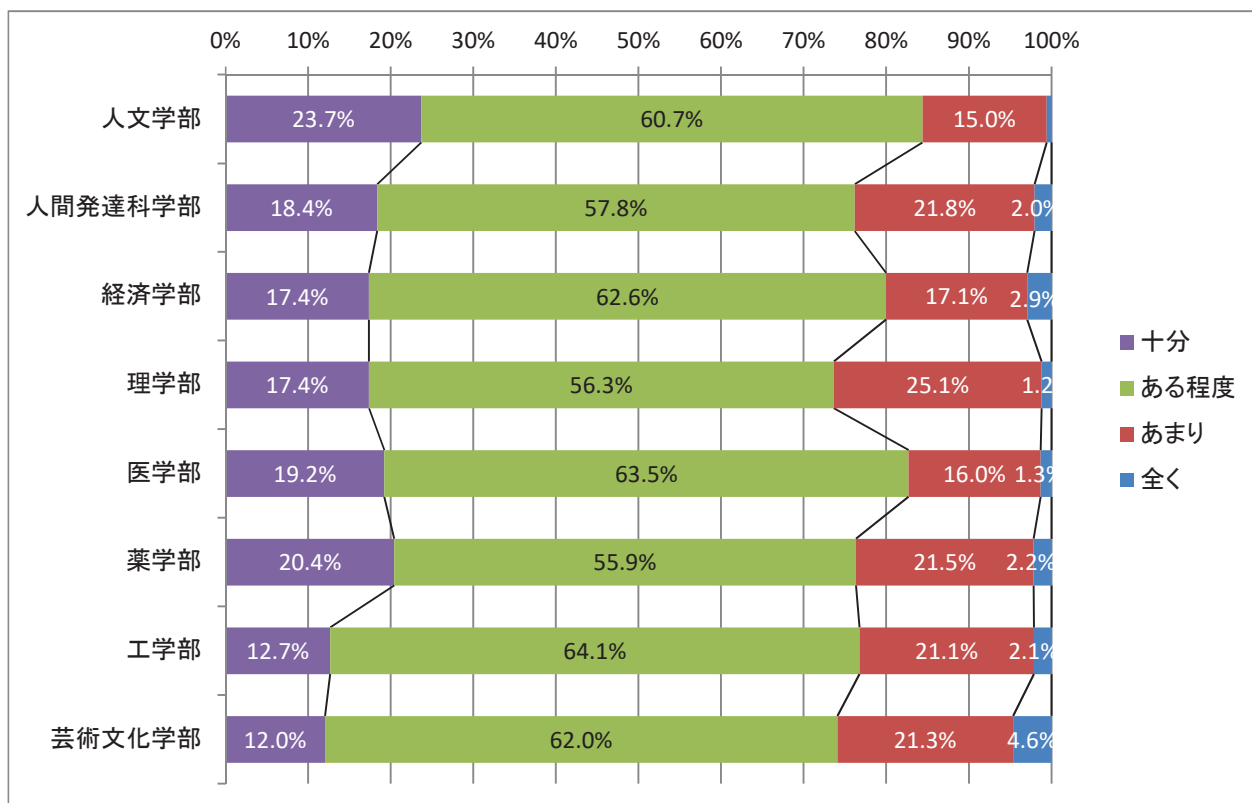
5) 母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)



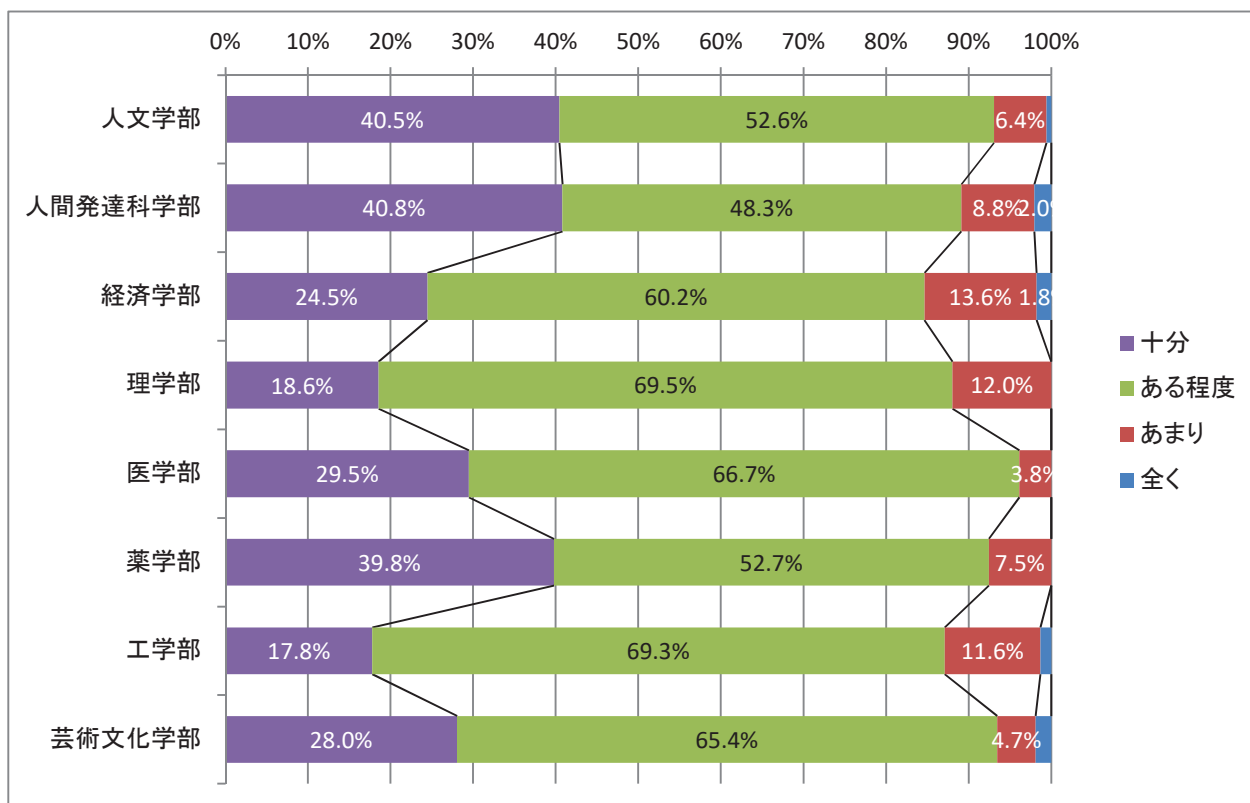
6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚



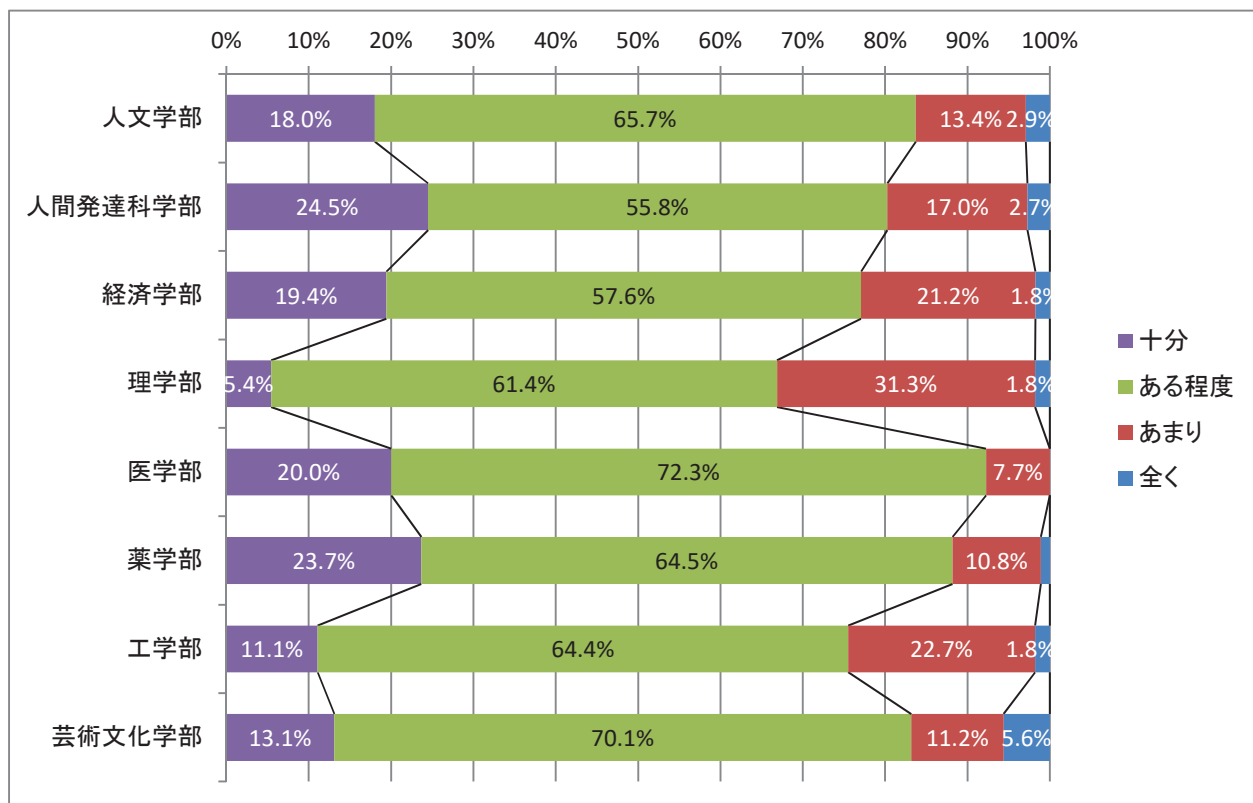
7) 教養教育等による幅広い知識



8) 専門教育による深い専門知識・技能



9)幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力



6. 全部局FD活動一覧及び 参加状況

令和元年度FD参加状況(令和元年4月～令和2年3月)

令和2年3月31日現在

部局名等	参加率	FD参加者数 (人)	学部教育を担当する教員数	備考
人文学部	100.0%	53	53	(目標参加率達成)
人間発達科学部	93.0%	53	57	(目標参加率達成)
経済学部	98.4%	60	61	(目標参加率達成)
理工学研究部(理学)	90.3%	56	62	(目標参加率達成)
理工学研究部(工学)	86.0%	80	93	(目標参加率達成)
理工学研究部(都市デザイン学)	95.8%	46	48	(目標参加率達成)
医学薬学研究部(医学)	93.1%	149	160	(目標参加率達成)
医学薬学研究部(薬学)	90.2%	46	51	(目標参加率達成)
芸術文化学部	95.2%	40	42	(目標参加率達成)
教養教育院	85.2%	23	27	(目標参加率達成)
大学院教職実践開発研究科	75.0%	6	8	次年度は、開催日を教授会等と同日開催にする等工夫し、参加率を上げる予定。
和漢医学薬学総合研究所	90.0%	18	20	(目標参加率達成)
附属病院	100.0%	107	107	(目標参加率達成)
教育・学生支援機構	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
研究推進機構	100.0%	18	18	(目標参加率達成)
地域連携推進機構	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
国際機構	100.0%	3	3	(目標参加率達成)
総合情報基盤センター	100.0%	6	6	(目標参加率達成)
環境安全推進センター	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
保健管理センター	100.0%	5	5	(目標参加率達成)
FD参加率	93.7%	775	827	

【調査方法】

今回の調査は、令和元年4月1日から令和2年3月末までのFD参加状況を各部局に照会したものである。
 参加率の算出に当たり、対象は、学部等に所属する専任教員のうち、「学部教育を担当する専任教員」であり、FDの参加者数については、延べ人数ではなく、実人数を記載したものである。よって、1人の教員が複数回(全学、自学部、他学部、教養教育等)のFDに参加してもFD参加数は1カウントとしている。
 昨年度の同調査では、全体のFD参加率は93.4%であった。

令和元年度 F D 活動実施状況一覧

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	所属教員数	講師名(所属)	報告書作成	他部局参加可否	備考
1	北陸認知症プロフェッショナル医療 成プラン(認プロ) 第22回認プロFD講演会	認知症の原因及び治療に 関する研究	2019/05/20 (月)	1H	附属病院2階 カンファレンスルー ム2	医学部	金沢大学他認プロ 共催大学 (富山大学)	認知症に興味を 持つ者	2人	134人	Massachusetts総合病院・ Harvard Medical School Steven M. Greenberg先生	無	可	金沢大学当番 開催
2	芸術文化学部FD研修会	芸術文化学部における休学・退 学の動向とその対策	2019/05/29 (水)	1H20M	芸術文化学部 大会議室	芸術文化 学部	芸術文化学部教育部会 議	学部教員	30人	41人	無	無	不可	教育部 会議内で 実施
3	第1回医学部医学科FD	臨床実習後OSCEへの備え	2019/06/07 (金)	1H25H	臨床講義室(1)	医学部	医学科教務委員会 医師キャリアパス 創造センター	教員	51人	162人	医学部 園田 道和 教授 石本 学 准教授	無	不可	
4	第1回人文学部FD研修会	障害学生支援に関する FD研修会	2019/06/12 (水)	1H	人文学部大会議室	人文学部	人文学部FD委員会	人文学部教員	51人	53人	橋谷 文哲 (学生支援センター 特命講師)	未定	不可	教授会内で実 施
5	超少子高齢化地域での先進的 がん医療人養成(北信がんプロ) 海外FD研修(台湾高雄) 報告会	海外FD研修(台湾高雄) 報告 海外FD研修(台湾高雄) 報告会	2019/06/17 (水)	1H	附属病院2階 カンファレンスルー ム2	医学部	金沢医科大学他北信が んプロ共催大学	がん医療に興味 を持つ者	3人	無	山田 壮亮(金沢医科大学 医学部臨床病理学教授)、 小島 知康(信州大学医学 部包括的がん治療学教授) 他金沢大学等10名	無	可	
6	2019年度 第4回セミナー	英語で書籍を出版するための方 法について	2019/06/20 (木)	1H	経済学部棟7階 中会議室	研究推進 機構	研究推進機構 極東地域研究 センター	全校教職員	10人	5人	Jacob Dreyer (Palgrave Macmillan 編集者)	無	可	
7	芸術文化学部FD研修会	授業評価アンケートの活用につ いて	2019/06/26 (水)	1H30M	芸術文化学部 大会議室	芸術文化 学部	芸術文化学部教育部会 議	学部教員	34人	41人	無	無	不可	教育部会議内 で 実施
8	学生生活に関する理学部FD 研修会	障害学生の支援について	2019/07/10 (水)	30M	理学部 大会議室	理学部	理学部学生生活 委員会	理工学研究部(理 学系)の 教員	74人	85人	橋谷 文哲 (学生支援センター 特命講師)	無	不可	
9	多様なニーズに対応するがん専門 医療人材(がんプロフェッショナル 医療人材)養成プラン 第36回腫瘍病理セミナー、北信 がんプロFD講演会	ゲノミクスの病理診断への 応用	2019/07/10 (水)	1H30M	附属病院2階 カンファレンスルー ム2	医学部	金沢医科大学他北信が んプロ共催大学	がん医療に興味 を持つ者	3人	無	前田 大地 (大阪大学大学院医学系研 究科先端ゲノム医療学共同 研究講座特任教授)	無	可	

10	第1回経済学部FD研修会	PROGテストの結果報告会 (1年次「初年次教育」)	2019/07/17 (水)	1H	経済学部大会議室	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	17人	61人	根本 康宏 (株式会社リアセック)	無	不可	
11	芸術文化学部FD研修会	多様な性を生きる学生・ 教職員が共に学び働くために (LGBTQ/SOGI研修)	2019/07/24 (水)	1H30M	芸術文化学部 大会議室	芸術文化 学部	芸術文化学部教育部会 議	学部教員	32人	41人	林 夏生 (人文学部 准教授)	無	不可	教育部会議内 で 実施
12	多様な新ニーズに対応するがん専門 医療人材(がんプロフェッショナル 養成プラン 第37回腫瘍病理セミナー・北信 がんプロFD講演会	染色体末端領域テロメア・ サブテロメアから 生命の基本原理を語る	2019/07/25 (木)	1H30M	附属病院2階 カンファレンスルー ム2	医学部	金沢医科大学他北信が んプロ共催大学	がん医療に興味 を持つ者	0人	無	加納 純子 (大阪大学・蛋白質研究所 独立准教授)	無	可	
13	保健管理FD研修会	At Risk Mental Stateの学生に おける早期支援・早期介入	2019/08/02 (金)	1H	保健管理センター ミーティング ルーム	保健管理 センター	保健管理センター	保健管理 センター教職員	4人	4人	西山 志満子 (保健管理センター講師)	無	不可	学生支援関係 部局職員には 連絡予定
14	薬学部・大学院医学薬学教育部 薬学系部会FD	テーマ未確定	2019/08/03 (土)	6H	医薬イノベーション センター1F	薬学部	薬学部・ 大学院医学薬学 教育部薬学系部会	薬学部、附属病 院薬剤部及び 和漢医薬学総合 研究所教員	60人	72人	井ノ口 慶 (医学部教授) 予定	有	不可	
15	第2回経済学部FD研修会	ネット依存症について	2019/09/11 (水)	1H	経済学部大会議室	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	52人	61人	山田 正明 (医学部 疫学・健康政策 学講座助教)	無	不可	教授会内で実 施
16	大学コンソーシアム富山 FD&SD研修会	これまでの初年次教育の 成果と課題	2019/09/17 (火)	3H	富山県立大学 大講義室	富山県立大 学・大学コ ンソーシア ム富山	富山県立大学・大学コ ンソーシアム富山	全学教職員	29人	801人	山本 啓一 (北陸大学経済経営学部長 教授)		可	
17	医学部看護学科・大学院 医学薬学教育部看護学FD	看護学における学習者の パフォーマンス課題と評価	2019/09/24 (火)	2H	看護学科棟 10講義室	医学部	看護学科 教務委員会/FD担当	看護学科 教員	25人	29人	石井 英真 (京都大学大学院 教育学研究科准教授)	有	可	
18	教養教育院 FD2019	学生と考えるおもしろい授業	2019/09/25 (水)	3H	共通教育棟 A21番教室	教養教育院	教養教育院	本学教職員・ 学生	60人	25人	無	有	可	
19	第2回医学部FD	コンピテンシーを評価する	2019/10/04 (金)	1H25M	臨床講義室(1)	医学部	医学科教務委員会 医師キャリアパス 創造センター	教員	31人	162人	医学部教員	無	可	

20	第3回医学部FD	地域枠制度の現状と課題	2019/10/07 (月)	1H	臨床講義室(1)	医学部	医学部 医学科教育委員会 地域医療総合支援学講 座	教職員、学生	45人	162人	片岡 義裕 (筑波大学医学医療系 地域総合診療医学)	無	可	
21	第2回人文学部FD研修会	人文科学研究科の 現状と課題	2019/10/09 (水)	1H	人文学部大会講義室	人文学部	人文学部FD委員会	人文学部教員	46人	52人	中井 精一 (人文学部教授)	無	不可	教授会内で実 施
22	全学FD研修会	学部を越えた連携教育の 発展・拡大に向けて	2019/10/30 (水)	3H	共通教育棟D棟 2階D21教室 (ほか)	教育推進 センター	教育推進センター	全学教職員	61人	801人	本田 康二郎 (金沢医科大学一般教育機 構人文科学准教授)	有	可	
23	第1回人間発達科学部 FD研修会	今日から始める 情報セキュリティ対策	2019/11/13 (水)	1H	人間発達科学部 大会講義室	人間発達 科学部	人間発達科学部 FD委員会	人間発達科学部 教員／ 教職実践開発研究 究科教員	59人	65人	黒田 卓 (人間発達科学部/教職実践 開発研究科 教授、前 総合 情報基盤センター長)	無	不可	教授会内で実 施
24	UD Talk	授業改善のすすめ	2019/11/23 (土)	4H	共通教育棟	UDtalk 実行委員会	UDtalk実行委員会	全学教職員、 学生、一般市民	57人	801人			可	学生参画型FD
25	第3回経済学部FD研修会	学生の県内就職と地方創生の取 組について	2019/12/04 (水)	1H	経済学部大会講義室	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	40人	61人	金岡 省吾 (地域連携推進機構地域連 携戦略室教授) 尾山 真 (地域連携推進機構地域連 携戦略室特命准教授)	無	不可	
26	理学部・理工学教育部 (理学領域) 合同FD研修会	学生の就学困難状態への 対応とメンタルヘルス不調の予 防について	2019/12/04 (水)	30M	理学部 大会講義室	理学部	理学部教育委員会、 理工学教育部(修士課 程)理学領域部会 教育委員会	理学部教員	65人	85人	八島 不二彦 (学生支援課 学生生活相 談員)	無	可	
27	生命融合科学教育部FD研修会	大学院生を増やす方策	2019/12/10 (火)	2H	医薬イノベーション センター1F会議室	生命融合 科学教育部	大学院生命融合科 学教育部教員	大学院生命融合 科学教育部教員	未定	41人	無	作成予定	可	生命融合科学 教育部・医学 薬学教育部 共 (医学系) 共 催
28	大学院医学薬学教育部 (医学系)FD研修会	大学院生を増やす方策	2019/12/10 (火)	2H	医薬イノベーション センター1F会議室	大学院医学 薬学教育部 (医学系)	大学院医学薬学 教育部教員 委員会	大学院医学薬学 教育部教員(医 学系)	無	30人	無	有	可	生命融合科学 教育部・医学 薬学教育部 共 (医学系) 共 催
29	第4回経済学部FD研修会	PROGRESSの解説会 (3年次等)	2019/12/11 (水)	1H	経済学部大会講義室	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	47人	61人	谷川 雅之 (株式会社リアセック)	有	不可	

30	令和元年度第1回 都市デザイン学部FD研修会	Moodle初心者講習会	2019/12/18 (水)	1H	工学部管理棟 大会議室	都市デザイン ン学部	都市デザイン学部 FD委員会	都市デザイン 学部教員	47人	42人	遠山 和夫 (総合情報基盤センター)	無	可
31	工学部FD研修会	学生による授業満足度の向上に向 けて ～授業満足度を向上させるための ヒント～	2019/12/25 (水)	1H30M	工学部大会議室 (管理棟2階)	工学部	工学部FD委員会	教員 (職員可)	47人	87人	機部正治工学部FD委員長 H30年度サ・ティーチャー	無	可
32	本学の英語教育に関する 意見交換会	英語教育の充実・推進に 向けた意見交換	2019/12/27 (金)	3H	共通教育棟 A21番・A22番教室	教養教育院	教養教育院	本学教職員	35人	801人	早瀬 博範 (佐賀大学 副学長・全学 教育機構長)	無	可
33	工学部FD研修会	学生の就学困難状態への対応と メンタルヘルス不調の予防につ いて	2020/1/15 (水)	1H30M	工学部大会議室 (管理棟2階)	工学部	工学部FD委員会・工 学部学生生活 委員会	教員 (職員可)	82人	87人	教育・学生支援機構 学生支援センター学生相談 室 学生生活相談員 八島不二 彦	無	可
34	センター講演会	コンピュータゲームを通して情 報科学を体験する情報教育の授 業手法	2020/01/30 (木)	2H	共通教育棟 C12番教室	総合情報基 盤センター	総合情報基盤 センター	教職員、学生	13人	6人	長瀬 寛之 (大阪電気通信大学)	無	可
35	第4回医学部FD	試験問題（教育コンテンツ）と 個人情報保護	2020/02/18 (火)	1H	臨床講義室（1）	医学部	医学科教科委員会 医師キャリアパス 創造センター	教員	34人	162人	医学部教員	未定	可
36	第5回経済学部FD研修会	性の多様性と、いま大学・学部 に求められる対応について	2020/02/17 (月)	1H	経済学部大会議室	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	16人	61人	林 夏生 (人文学部 准教授)	無	可
37	令和元年度第2回 都市デザイン学部FD研修会	Moodle講習会 応用編	2020/02/19 (水)	1H	工学部管理棟 大会議室	都市デザイ ン学部	都市デザイン学部 FD委員会	都市デザイ ン学部教員	45人	40人	上本 佐幸子 (総合情報基盤センター)	可	可
38	ALL富山000+シンポジウム	地域創生について	2020/02/21 (金)	2H30M	とやま自遊館	地域連携 推進機構	ALL富山000+	全学教職員対象	152人	801人	無	無	可
39	Moodleを利用した e-ラーニングに関する ワークショップ	e-ラーニングコンテンツ 作成の実践例等	2020/03/05 (木)	3H35M	共通教育棟 LL教室・B21番教室	教養教育院	教養教育院	本学教職員	未定	801人	杉森 保 (教養教育院 准教授) 木村 裕三 (医学部 教授) 上本 佐幸子 (総合情報基盤センター)	無	可

40	Moodle実践講習会	Moodleを活用した教育支援 (応用編)	2020/03/25 (水)	1H	総合情報基盤 センター端末室	総合情報基 盤センター	総合情報基盤 センター	教職員・学生	23人	6人	上木 佐幸子 (総合情報基盤センター)	無	可	
41	芸術文化学部FD研修会	メンター教員として必要なカウ ンセリングの基礎技術について	2020/1/29 (水)	1H30M	芸術文化学部 大会議室	芸術文化学 部	芸術文化学部教育部会 議	学部教員	35人	42人	西山 志満子 (保健管理センター講師)	無	不可	教育部会議内 で実施

7. 各種資料

教育成果の評価についての基本方針

1. 趣旨と目的

認証評価等で学修成果の評価が求められている状況に対応し、富山大学においても学修成果の組織的な評価を行う。

その目的は、学修成果を明らかにして教育の質保証を行うとともに、評価に基づいた教育活動の水準の維持・向上を図ることである。

2. 評価の基準

学修成果は、どのような能力を身に付けたかによって評価することが求められている。そのため、同様の趣旨で制定された学位授与方針を評価基準とすることが適切である。

3. 評価の方法

以下の 4 つの方法によって評価を行う。

- 1) 在学中の自己評価
- 2) 卒業・修了時の自己評価及び客観的な資料による評価
- 3) 卒業・修了後数年を経た時期の自己評価
- 4) 就職先による評価

それぞれについての具体的な方法は、教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議が企画・実行し、教育・学生支援機構会議等に報告する。

4. 評価の実施体制

- ・各学部等，大学院において，自己評価を行い，課題を析出する。
- ・教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議において，各学部等，大学院の評価を取りまとめ，全学的な課題を析出する。
- ・教育推進センター会議において評価によって得られた課題等を提言する。

富山大学教育・学生支援機構教育推進センター専門会議要項

平成 27 年 6 月 16 日制定
平成 27 年 12 月 2 日改正
平成 28 年 6 月 23 日改正
平成 29 年 11 月 10 日改正
平成 30 年 3 月 27 日改正

(趣旨)

第 1 条 この要項は、富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議内規（以下「センター会議内規」という。）第 7 条第 3 項の規定に基づき、富山大学教育・学生支援機構教育推進センターに置く専門会議（以下「専門会議」という。）に関し必要な事項を定める。

(専門会議)

第 2 条 専門会議として、全学 F D ・教育評価専門会議、学芸員養成科目専門会議及び大学院教務専門会議（以下「各専門会議」という。）を置く。

(機能)

第 3 条 各専門会議は、センター会議内規第 7 条第 2 項の規定に基づき、富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議（以下「センター会議」という。）から付託された次に掲げる事項について審議し、実施する。

(1) 全学 F D ・教育評価専門会議

- イ 学部等の教育の質保証に関すること。
- ロ 学部等の教育評価に関すること。
- ハ 全学的 F D に関すること。

(2) 学芸員養成科目専門会議

- イ 全学の学芸員養成科目に関すること。

(3) 大学院教務専門会議

- イ 大学院の教育の質保証に関すること。
- ロ 大学院の教育評価に関すること。

(組織)

第 4 条 各専門会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 全学 F D ・教育評価専門会議

- イ 富山大学教育・学生支援機構教育推進センター長（以下「センター長」という。）が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 各学部の F D 担当組織の長
- ハ 教養教育院の F D 担当教員 1 人
- ニ 学務部学務課長
- ホ その他センター長が必要と認めた者

(2) 学芸員養成科目専門会議

- イ センター長が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 人文学部, 人間発達科学部, 理学部, 芸術文化学部及び都市デザイン学部から選出された教員 各1人
- ハ 学務部学務課長
- ニ その他センター長が必要と認めた者

(3) 大学院教務専門会議

- イ センター長が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 各研究科から選出された教員 各1人
- ハ 生命融合科学教育部から選出された教員 1人
- ニ 医学薬学教育部の医学系及び薬学系から選出された教員 各1人
- ホ 理工学教育部の理学系及び工学系から選出された教員 各1人
- ヘ 学務部学務課長
- ト その他センター長が必要と認めた者

- 2 前項第1号ハ及びホ並びに前項第2号ロ及びニ並びに前項第3号ロ, ハ, ニ, ホ及びトの委員の任期は, 2年とし, 再任を妨げない。ただし, 欠員が生じた場合の後任の委員の任期は, 前任者の残任期間とする。

(議長)

第5条 各専門会議に議長を置き, 前条第1項各号イの委員から, センター長が指名する委員をもって充てる。

- 2 議長に事故があるときは, 議長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 各専門会議は, 委員の過半数が出席しなければ開会できない。

- 2 議事は, 出席委員の過半数をもって決する。ただし, 可否同数のときは, 議長がこれを決する。

(意見の聴取)

第7条 各専門会議が必要と認めたときは, 委員以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

(議事の報告)

第8条 各専門会議は, 原則として議事内容をセンター会議に報告する。

(雑則)

第9条 この要項に定めるもののほか, 各専門会議に関し必要な事項は, 各専門会議において定める。

(事務)

第10条 各専門会議の事務は, 学務部学務課において処理する。

附 則

この要項は、平成 27 年 6 月 16 日から施行する。

附 則

- 1 この要項は、平成 27 年 12 月 2 日から施行する。
- 2 この要項の施行日において委員である者の任期は、第 4 条第 2 項の規定にかかわらず平成 29 年 3 月 31 日までとする。

附 則

この要項は、平成 28 年 7 月 1 日から施行する。

附 則

- 1 この要項は、平成 29 年 11 月 10 日から施行する。
- 2 この要項の施行後最初に選出される第 4 条第 1 項第 5 号ロ、ハ、ニ、ホ及びトの委員の任期は、第 4 条第 2 項の規定にかかわらず平成 31 年 3 月 31 日までとする。

附 則

この要項は、平成 30 年 4 月 1 日から施行する。

教育・学生支援機構教育推進センター全学FD・教育評価専門会議 委員名簿

平成31年4月1日

職 名 等		氏 名 等	備 考
センター長が指名したセンター会議の委員（第1号イ委員）		教授 副センター長	教育・学生支援機構 はし もと まさる 橋 本 勝 (議長)
各学部FD担当委員長 (第1号ロ委員)	人文学部	教授	こすけがわ てい じ 小助川 貞 次
	人間発達科学部	准教授	やま ぐち のり かず 山 口 範 和
	経済学部	教授	もり ぐち たけ ひこ 森 口 毅 彦
	理学部	教授	いし い ひろし 石 井 博
	医学部	教授	きし ひろ ゆき 岸 裕 幸
	薬学部	教授	や くら たか ゆき 矢 倉 隆 之
	工学部	教授	いそ べ まさ はる 磯 部 正 治
	芸術文化学部	教授	おお うじ まさ し 大 氏 正 嗣
	都市デザイン学部	教授	まつ だ けん じ 松 田 健 二
教養教育院のFD担当 教員（第1号ハ委員）	教養教育院	准教授	すぎ もり たもつ 杉 森 保
学務部学務課長（第1号ニ委員）			てらばやし ただ お 寺 林 忠 男
その他センター長が必要と認 めた者（第1号ホ委員）			

結びに代えて

2020年1月19日付の北日本新聞の読者投稿欄『声の交差点』には、UD Talkに関する本学の学生の投稿が掲載されています。「大学の授業について本気で考え、良くしようという参加者が多数いたことに強い衝撃を受けた」という主旨の内容です。UD Talkだけではなく、全学FDや教養教育院のFD等には、以前から学生の参加があり、学生目線からの鋭い発言が、参加した教職員にも大きな刺激を与えてもいます。

教育改革は、「学生・教員・職員」が一体となって進めてこそ実効性を高めるものです。本学では、私の着任を機に、既に9年前から学生参画型FDが少しずつ歩を進めてきましたが、例えば、医学教育の国際認証との関係もあって、医学部医学科では、先行的にカリキュラム委員会に学生委員が参加する体制がスタートしており、今後、他学部にも波及する動きがあります。約20年前に発表された「廣中レポート」^{注)}の精神が、本学でもようやく本格化しそうな感じになってきました。

一方、大学としての社会的説明責任という観点から、全学FDは昨年度から、他大学関係者にも開放する体制を取っています。UD Talkへの6大学参加、という状況とは対照的に、残念ながら、全学FD2019には他大学からの参加はありませんでしたが、今後は一層、広報に努めたいと考えています。

忘れてならないのは、全学FDや各部局FDの実施において、学務部や各部局の事務職員の献身的な協力があることです。単なる裏方だけではなく、教員や学生への事務目線からの鋭い指摘は三位一体型教育改善では不可欠のものといえます。この場を借りて深く感謝するとともに、次年度以降も引き続き宜しくお願いしたいものです。

Web版となったこのFD報告書が、様々な形で活用されることを願って、結びに代えたいと思います。

教育推進センター 副センター長

全学FD・教育評価専門会議議長

橋 本 勝

注：廣中レポートとは、文部科学省(当時文部省)が2000年6月に発表した『大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－』という名称の報告書である。元山口大学学長の廣中平祐氏がとりまとめの座長だったことからこの通称で呼ばれ、その後の大学教育改革の基本となっている。Web情報としても全文が閲覧できる。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm 学生の声の反映の重要性については特に1章が割かれ、中でも「今後は、正課教育の内容のあり方や授業方法、さらに教育条件の改善などの分野についても、学生の希望や意見を適切に取り入れる仕組みを整備していくことが重要である。」という一文は学生参画型FDの推進の拠り所となっている。

富山大学における F D 活動報告書 2 0 1 9

発行／2 0 2 0 年 3 月

編集・発行／富山大学教育・学生支援機構教育推進センター
富山市五福 3 1 9 0 番地